戦国無双2
SENGOKU MUSOU

SENGOKU MUSOU 2
CHARACTERS PROFILE

戦国無双2 キャラクターズ真書

◆コーエー 出版部 編

「直江兼続のシンボルマーク〝愛〟の意味は!?」

「風魔小太郎って、人なの?」

戦国無双2のキャラクターたちのナゾを

歴史から解き明かす!

KOEI

立花誾千代
九州一の名将、立花道雪の娘で、7才で家督を継ぎ女城主となった。

カバーグラフィック：石田三成
豊臣秀吉の腹心で、秀吉死後に遺児・秀頼を擁して、政権奪取をねらう徳川家康と対立する。

カバーデザイン
株式会社ケイズ　大橋勉

戦国無双2 キャラクターズ真書

戦国無双2 キャラクターズ真書
SENGOKUMUSOU2 CHARACTERS PROFILE

戦国無双2 キャラクターズ真書
SENGOKUMUSOU2 CHARACTERS PROFILE

CONTENTS

1st mission / Main Characters キャラクター勢ぞろい！ 003

織田信長／濃姫 …… 004
浅井長政／お市 …… 008
明智光秀／森蘭丸 …… 012
羽柴秀吉／ねね …… 016
徳川家康／服部半蔵 …… 020
本多忠勝／稲姫 …… 024
上杉謙信／武田信玄 …… 028
石田三成／島左近 …… 032
直江兼続／前田慶次 …… 036
伊達政宗／真田幸村 …… 040
島津義弘／立花誾千代 …… 044
雑賀孫市／風魔小太郎 …… 048
宮本武蔵／佐々木小次郎 …… 052
阿国 …… 056

2nd mission / The Nobunaga Age 信長の時代 057

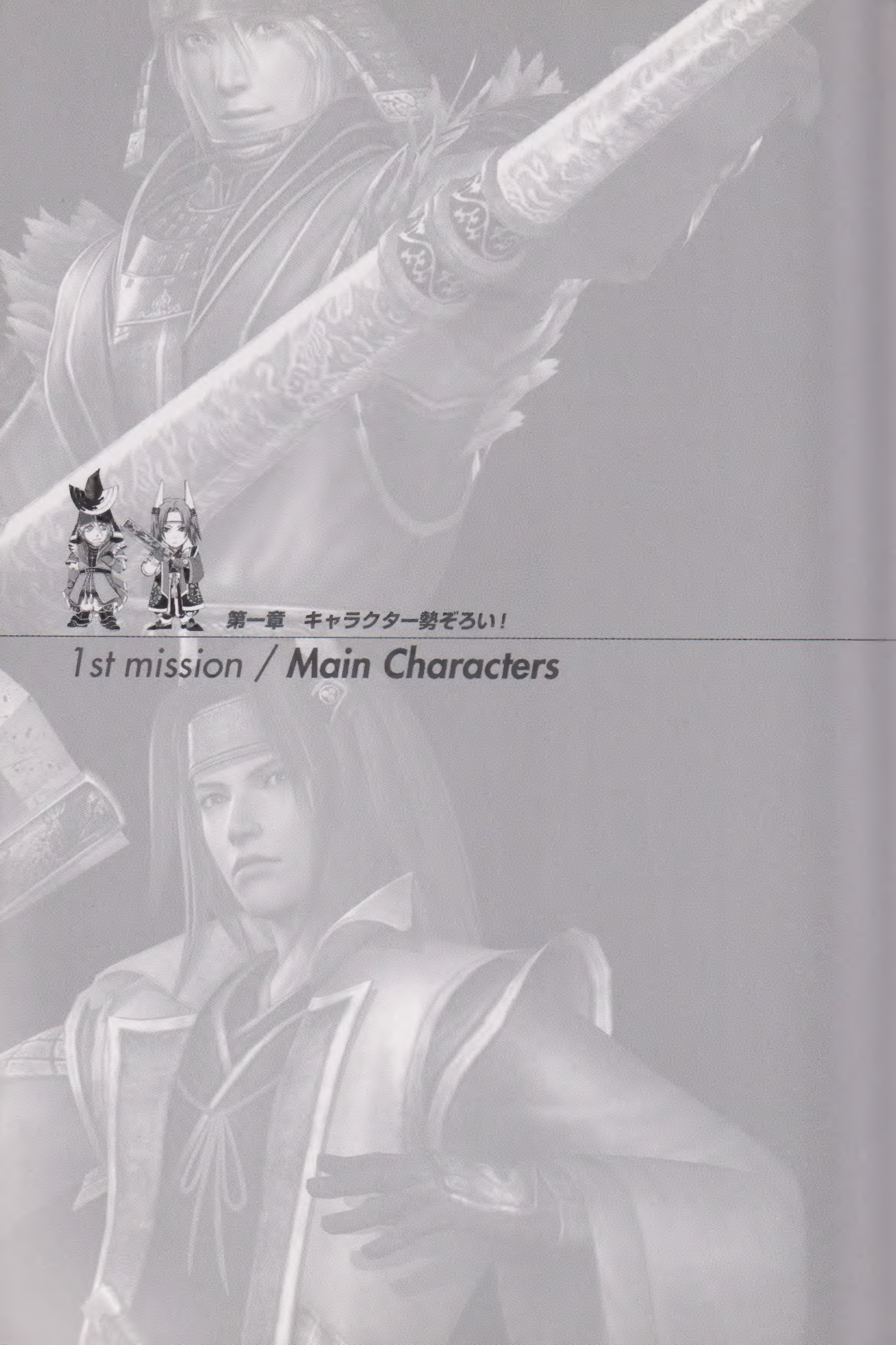
信長をめぐる人々 …… 060
長政とお市をめぐる人々 …… 068
謙信と信玄をめぐる人々 …… 076
九州動乱 …… 082

3rd mission / The After Nobunaga Age 秀吉と家康の時代 087

秀吉とねねをめぐる人々 …… 090
家康をめぐる人々 …… 096
関ヶ原の戦い …… 102
大坂の陣 …… 108

コミック「戦国のグルメ」…… 072
特別戦場紹介「関ヶ原の戦い」…… 114

本書は「戦国無双2」の登場する人物やエピソードについて、広く歴史背景や逸話などをもとに解説しました。ゲーム設定とは異なる記述や登場しない人物なども掲載しております。



第一章　キャラクター勢ぞろい!

1st mission / Main Characters

織田信長

この信長に抗うなど無価値

生きた男女一対

Nobunaga Oda

天下布武へすすむ織田信長。信玄、謙信など有力戦国大名のみならず、身内である長政ですら敵対することになった。信長の苛烈なやり方に対して足利幕府、一向門徒、そして因習、旧秩序などこの時代すべてが信長の敵となった。覇王・信長は、時代そのものをすりつぶしていくのだった。

無双演武シナリオ

長篠の戦い ‐ 大坂湾の戦い ‐ 手取川の戦い

武田殲滅戦 ‐ 本能寺の変 ‐ 信長天下統一戦

出現条件

雑賀孫市クリア

濃姫

Nouhime

「美濃のマムシ」と怖れられた梟雄、斎藤道三。その愛娘は、政略結婚で、隣国の尾張のうつけ者、織田信長の妻となる。「隙があれば、これで婿を刺せ」。道三からもたされた小刀を懐に隠して。信長の奇矯な振る舞いに、時代の創造的破壊者と、絶対的な孤独をみた濃姫は、いつしか信長と生きることを決意する。

無双演武シナリオ

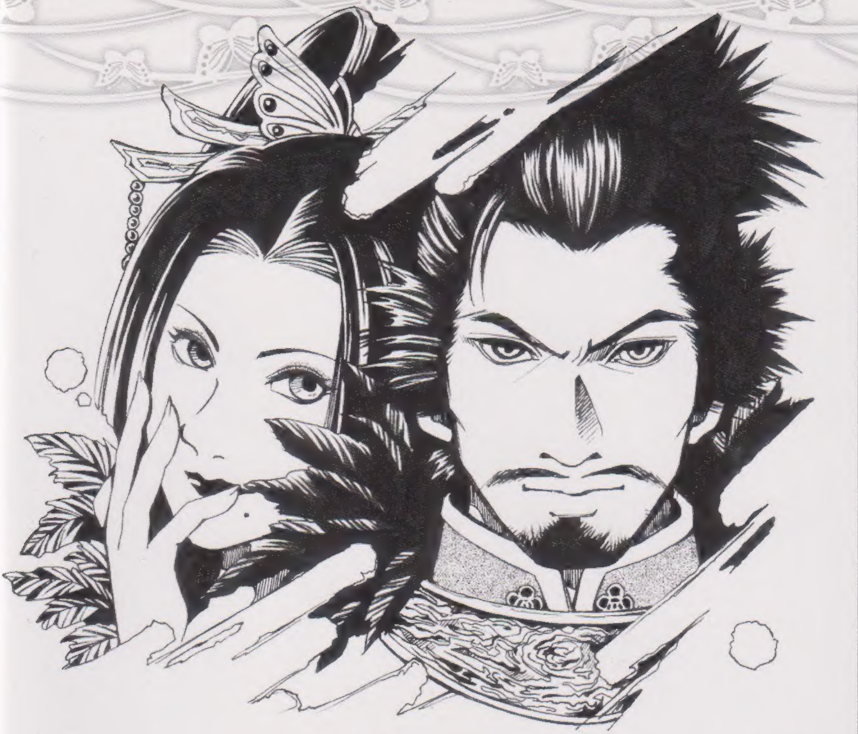
長篠の戦い	村落救出戦	手取川の戦い
武田殲滅戦	本能寺の変	賤ヶ岳の変

出現条件

織田信長クリア

信長と濃姫

戦国乱世をひた走った
うつけと呼ばれた信長と
マムシと呼ばれた道三の娘



マムシの娘が尾張へ嫁ぐ

信長の父・織田信秀は、尾張守護代（県知事のようなもの）に仕える奉行のひとりでした。とはいえその勢力は、尾張国内にとどまらず、駿河（静岡）の今川義元や、美濃（岐阜）のマムシこと斎藤道三とも争うほどでした。

　しかし、さすがに今川・斎藤の両方を敵に回すのは負担が大きく、信秀はやがて道三と和睦します。このときの条件が、道三の娘・濃姫と信長の結婚でした。

　濃姫は「美濃から来た姫」という意味で、本名は帰蝶といいます。道三は濃姫を非常にかわいがっていました。それを尾張の一豪族の息子の嫁に出すのですから、よほど信秀の実力を評価していたのでしょう。また、そのころはすでに信長が「うつけ」であると知れわたっていましたが、そんな男に愛娘を嫁がせるというのも道三の度量の大きさを感じさせます。忍びから信長の行動を聞いて、「マムシの婿にふさわしい男」と感じていたのかもしれません。

　濃姫にしても、父・道三の命に素直に従って嫁いできたというのは、お家のためというよりも、信長が本物の「うつけ」かどうか興味があったのでしょう。

道三の鼻を明かす

　信長は父・信秀の急死後、織田家を継ぎます。

　おそらくこのころ濃姫は、信長のようすや挙動を密かに道三に報告していたはずです。信長がわざと斎藤家臣と内通しているようにみせかけて、濃姫を通じて道三の耳に入れ、その家臣を殺させたという話もあります。

そんな信長のもとに、道三から会見の申し入れがありました。濃姫からの報告を聞くうちに、信長の実物を見たくなったのでしょう。信長は、道三にアピールする絶好の機会とばかりに、多数の軍勢を引き連れて美濃との国境へ向かいます。ズラリと並んだ長槍の部隊に、当時としては珍しい五百挺もの鉄砲隊が行進し、信長はふだんどおりのハデな「うつけもの」スタイルです。信長は斎藤方の忍びがこのようすを偵察に来ると思っていたでしょうが、実際は道三自身が民家の奥からこれを目を丸くして見ていました。

会見場の寺へ着くと、信長は正装に着替え、容姿端麗な若殿といった風情で道三の前に現れます。

「道三どの、このオレがうつけに見えるか?」

実際には「で、あるか」と相づちを打つ以外、ほとんど話さなかったといわれますが、心中では道三を挑発していたかもしれません。道三はこの信長の変わりようにショックを受けました。

「ただのうつけではなく、将来たいへんな男になる!」

道三はこう感じたのかもしれません。その後、道三は信長に対して友好的に接し、息子・義龍と戦って滅ぼされたときも、信長に美濃の譲り状を送っています。

道三死後、信長は斎藤家と敵対し、尾張を統一して桶狭間の戦いで今川義元を破ると、本格的に美濃攻略を開始します。義父の仇討ちという名分はありますが、実際は勢力拡大を図るうえで美濃は必要不可欠な土地でした。

そして一五六七年、信長はついに稲葉山城を占領し、美濃を手中に収めます。道三が亡くなって十一年が経っていました。ここから信長は、「天下布武」の印を用いるようになり、天下統一の野望を明らかにします。

しかし、濃姫の消息はいつしか途絶えていました。斎藤家と戦うにあたって実家に返されたという説もありますし、ずっと織田家中にいて、信長死後も次男の信雄に保護されて余生を過ごしたという説もあります。表舞台からは去っても、父・道三と自分が認めた信長という男を最後まで見届けたかったのかもしれません。

マムシの娘

この勝利、すべてを市に捧げよう

浅井長政

終わった夫婦花(めおとばな)

Nagamasa Azai

北近江の青年大名、浅井長政。その才覚と人柄を天下統一をめざす信長から「我が片腕」と見込まれる。しかし、信長は長政との約束を裏切り、旧恩ある朝倉家を攻めるのだった。長政は、かなわずと知りながらも信長と、戦うことを決意する。長政に気がかりなのは、愛妻お市の悲しみだった。

無双演武シナリオ

姉川の戦い	宇佐山包囲戦	小谷城防衛戦
賤ヶ岳決戦	金ヶ崎の戦い	関ヶ原決戦

出現条件

お市クリア

お市

宿命にも、勝てるでしょうか…？

つかの間の平穏に

Oichi

眉目秀麗な織田の家系でも、ひときわ美しく咲いた花、それがお市だった。浅井長政に嫁いだお市は、長政の誠実な人柄に惜しみない愛を捧げる。しかし、愛してやまない長政と信長の同盟はつかの間に過ぎなかった。

無双演武シナリオ

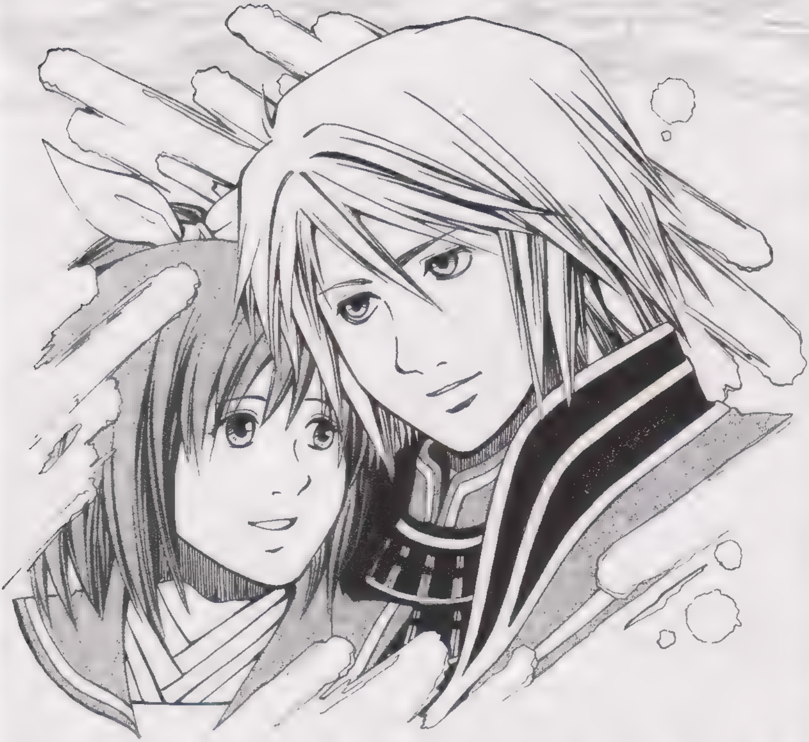
村落救出戦 ― 金ヶ崎撤退戦 ― 姉川の戦い ― 宇佐山包囲戦 ― 小谷城攻略戦 ― 賤ヶ岳の変

出現条件

最初から登場

長政とお市

時代に翻弄された青年大名と絶世の美女
はかない愛の行方は



浅井長政は、北近江（滋賀）を治める戦国大名です。浅井家は祖父・亮政の代に勢力を拡大し、越前朝倉家の支援を受けながら、南近江の六角家と争っていました。

しかし、長政の父・久政のときに六角義賢に屈服し、長政は義賢から一字もらって賢政と名乗り、六角家の重臣の娘を妻に迎えました。長政はそれが不満で、一五五九年に久政から当主の座を奪って妻を六角側に送り返し、翌年には六角軍を破って独立を勝ち取ります。このころ、六角家との決別を期に長政と改名しました。

その後、長政は正妻を迎えませんでしたが、そこに目をつけたのが信長です。美濃攻略後に上洛をめざしていた信長には、浅井家との同盟が必要だったのです。

お市は信長より十三歳年下の妹でした。絶世の美女で、柴田勝家や秀吉も彼女に心を寄せていたといいます。信長もこの妹をたいそうかわいがっていましたが、迷わず長政に嫁がせました。長政なら信長を裏切らず、お市を大切にすると見こんだのでしょう。

戦国の世では政略結婚は当たり前のことで、お市も織田家のためと心得て嫁いでいきました。ところがこの結婚は思いのほか良縁だったようです。二人の仲はたいへんよく、お市は男子二人、女子三人の五人の子供を生みました。このなかで長女がのちに秀吉の側室となる淀殿であり、三女が徳川秀忠の妻・お江与の方です。

上洛した信長が足利義昭を将軍位につけて後ろだてにすると、これに朝倉義景が反発します。信長は義景が将軍の名で上洛命令を出しても従わなかったため、討伐軍をおこしました。

これに対して、浅井軍は越前（福井）に攻めこんだ織田軍の背後をつこうとしました。長政は信長を裏切りたくありませんでしたが、織田家よりも朝倉家の恩を重視する父・久政や重臣らの決定にさからえなかったのです。

信長はギリギリのところで逃亡し、九死に一生を得ます。そして姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍に戦いを挑み、勝利を収めました。

注目したいのは、こうして織田家と浅井家が決裂したのちも、お市は離縁されず、浅井家に留まっていたことです。姉川の戦い後、お市は浅井家中から白い目で見られて苦労したと思われますが、お市と長政の仲が本物だったことを表しているのでしょう。

天下のため、貴公には消えて頂く！

明智光秀

美濃の血統

Mitsuhide Akechi

絶対の孤独を生きる覇王・信長を理解し認めていたのは光秀だった。濃姫の従兄弟、光秀は諸国を流浪後に、信長に仕える。秀吉をしのぐ勢いで出世を遂げた光秀だったが、いつしか信長との間に埋められない溝ができるのだった。光秀は覇王と共に生きていくことができないのか？

無双演武シナリオ

金ヶ崎撤退戦	小谷城攻略戦	雑賀攻め
本能寺の変	山崎の戦い	光秀天下統一戦

出現条件

最初から登場

森蘭丸

Ranmaru Mori

武名高い美濃の豪族、森可成の遺児。目から鼻に抜けるような聡明で利発な蘭丸を小姓とした信長は、片時も離さなかった。蘭丸もまた信長を不世出の英雄として尊崇していた。将来を嘱望された蘭丸は、未完の大器で終わるのか？

出現条件

無限城クリア

光秀と蘭丸

美濃出身の有能な二人の武将は、信長を間に挟んで、微妙な関係だったようです。

[illegible]

明智光秀は、もとは美濃に住んでいて、一族は斎藤道三に仕えていたといわれています。信長の妻である濃姫の母も明智氏の出身で、光秀とは親戚関係にありました。

道三が子の斎藤義龍に攻め滅ぼされたとき、光秀も義龍に攻められて逃亡しました。そして越前の朝倉義景に仕えたのです。

ちなみに当時道三に仕えていたなかには森蘭丸の父・可成もおり、道三とともに戦って敗れたのち、信長の配下となっています。

その後、光秀はうだつの上がらないまま朝倉家に何年も仕えていましたが、足利義昭が朝倉家に身を寄せたことで、大きな転機が訪れました。義昭の上洛の希望を実現するため、信長に会見して義昭を引き合わせたのです。

小姓の24時間

信長はすぐに義昭を奉じて上洛を開始し、義昭は望みどおり足利幕府将軍に就任しました。こののち信長と義昭はしだいに仲が悪くなりますが、そうなると光秀は義昭と手を切り、織田家臣として活動するようになります。

信長は外交などの実務能力に優れた光秀を気に入り、上洛後には京都の奉行に任命しています。その後もいわゆる「中途入社」ながら重臣のひとりとなり、家臣のなかでは初めて城を与えられます。しかし、それも森蘭丸が台頭してきたころから変わっていきました。

森蘭丸は、信長家臣・森可成の三男として生まれました。森家を継ぐのは兄の長可だったため、蘭丸は十五歳前後のころから小姓として信長に出仕します。

小姓は主君の身の回りの世話をしたり、家臣たちの取り次ぎをするのが役目でした。

あるとき蘭丸は信長に、

「向こうの部屋に行って開いている障子を閉めてこい」

と命じられました。実際に行ってみると、障子はすべて閉まっています。しかし蘭丸は、わざわざ障子を一枚開けて、ピシャリと閉めました。開いている障子があると勘違いした信長をフォローするための心くばりでした。

このようにして信長の信頼を得た蘭丸は、しだいに重臣たちからも恐れられるようになりました。信長との取り次ぎ役である蘭丸の機嫌を損ねれば、それは信長の機嫌を損ねることになるからです。

光秀と蘭丸は、美濃出身という接点がありました。蘭丸が出仕したころは、同郷ということで光秀との交流があったかもしれません。将来の官僚候補として期待されていた蘭丸にとって、実務派の光秀はいいお手本だったでしょう。

しかし、ほかの信長の家臣と同じく、光秀と蘭丸の仲も悪くなっていったようです。蘭丸が信長に光秀領の宇佐山城をねだったという逸話もあります。

本能寺に向かう光秀は、信長憎しの感情だけではなく、

「蘭丸さえいなければ……」

という無念の思いがあったかもしれません。

二人で築いた黄金伝説

Hideyoshi Toyotomi

名もない農民の出身の秀吉。持ち前の明るさと機転から織田信長の足軽から有力武将へと出世をとげた。智略と人の心をつかむ屈託のなさを武器に、戦のない世をつくるためにひた走る。

無双演武シナリオ

山崎の戦い ■ 賤ヶ岳の戦い ■ 小牧長久手の戦い
九州征伐 ■ 小田原城攻略戦 ■ 関ヶ原の戦い

出現条件

石田三成クリア

ねね

うちの人のため、これからも張り切るよ！

足軽から天下人へ、

Nene

ほがらかな人となりと美貌の持ち主のねね。足軽時代から、秀吉を支えた内助の功で有名である。子宝に恵まれなかったねねは、秀吉の遠い親戚の子、加藤清正や福島正則を、有名な武将に育てあげた。

無双演武シナリオ

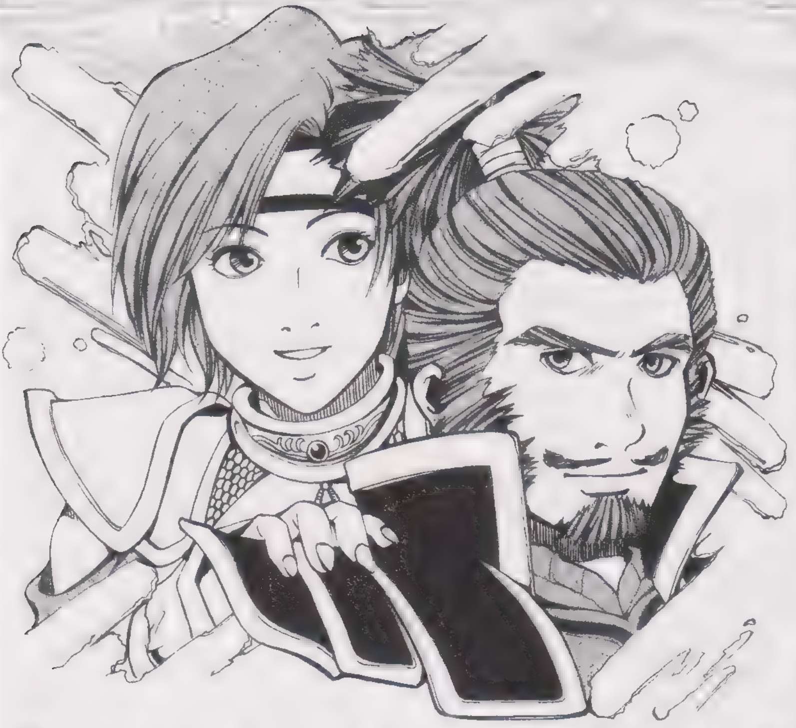
山崎の戦い	賤ヶ岳の戦い	小牧長久手の戦い
海賊討伐戦	小田原城攻略戦	関ヶ原乱入

出現条件

豊臣秀吉クリア

秀吉とねね

天下人に昇りつめても変わることなく続いた夫婦の情愛



秀吉は二十六歳のときに、十四歳だったねねと結婚しました。これは一五六一年、桶狭間の戦いの翌年のことです。

ねねは織田家足軽の浅野長勝の養女で、母方が木下姓だったことから、秀吉も木下藤吉郎と名乗るようになりました。

このころの秀吉はまだ足軽の身分でしたが、美濃攻略では墨俣築城などの功績を挙げ、越前攻略中に浅井長政から背後を攻められたときは、死ぬ覚悟で最後尾を守り、撤退を成功させました。

この秀吉の活躍を陰から支えたのがねねです。子供はできなかったものの、貧しい生活をやりくりし、苦楽をともにしました。

そして、結婚してから十二年で、秀吉は近江長浜城の城主となります。このときから秀吉は羽柴姓を名乗るようになり、さらに「筑前守」の受領名も許されました。

このころから秀吉は、側室をもうけるようになります。「跡継ぎの子供が欲しい」というのが言い訳だったでしょう。実際、南殿という側室が秀吉の子を生みましたが、幼いころ亡くなったようです。

しかし、秀吉があまりにもいろいろな女に手を出すので、ねねは安土城を訪問したおりに、たまりかねて信長に秀吉の浮気を直訴したことがあります。信長は、あとでねねに手紙を出し、

「確かに秀吉はけしからん。だが、秀吉があなたのような素晴らしい妻を持つことなど二度とできるわけがない。だから、これからは妻として落ち着いて秀吉に接し、簡

単にやきもちを焼いたりしないようにしてほしい」

と要望しています。

側室同士でケンカも

秀吉には、側室が十六人いたといわれます。もっとも有名なのは、浅井長政とお市の子・淀殿でしょう。秀吉がお市を好いていたのに望みがかなわなかったため、その娘を側室にしたといわれています。彼女は秀吉のお気に入りだったうえに、跡継ぎの秀頼を生んだため、秀吉没後、秀頼の後見人として権勢をふるいました。

秀吉は生まれたときの身分が低かったためか、身分の高い女性が好みだったといわれています。たとえば松の丸殿と呼ばれた側室は、名門・京極家の娘でした。彼女は秀吉と敵対していた兄・京極高次が許しを得るために秀吉の側室になりました。たいへん気の強い女性で、花見の会で淀殿と席の順番を争い、大ゲンカになったという話があります。

[illegible]

秀吉は多くの側室をかかえていましたが、ねねを邪険に扱ったわけではなく、つねに正妻としての面目を立てていました。いわゆる「恐妻家」だったのです。

たとえば小田原の役の陣中からは、ねねに次のような手紙を書いています。

「世の中でいちばん好きなのはおまえだけだ。小田原まで来ていろいろ世話をしてもらいたいのだが、おまえに旅をさせるのも申し訳ない。そこで、茶々(淀殿)をこちらへ送ってもらえないだろうか」

秀吉の下心がみえみえですが、一応これでもねねの立場を尊重しているつもりなのでしょう。ねねも拒絶したりせず、秀吉の望みどおりにしています。

ねねは子供こそできませんでしたが、秀吉がもらいうけた養子の面倒をよくみていました。また、加藤清正、福島正則らを幼少のころに引き取って我が子同然に育て上げ、秀吉の子飼いの武将として戦場に送り出しています。ほかにも秀吉が大好きだった母・大政所に対しても親身になって世話をしていました。こうしたねねの献身的な活動に感謝していたため、秀吉は生涯ねねに頭が上がらなかったのでしょう。

名前も出世

徳川家康

負けられぬな、わしには背負うものがある

築いた光と影

Ieyasu Tokugawa

秀吉の死後、第一人者に躍り出た家康は、豊臣の天下に固執する石田三成との対立を深めていくのだった。家臣達の忠誠を得た家康は、天下の安寧のために、長く続いた戦乱を終息させるために、邁進していく。

無双演武シナリオ

姉川の戦い	三方ヶ原の戦い	小牧長久手の戦い
小田原城攻略戦	関ヶ原の戦い	大坂の陣
上杉征伐		

出現条件

最初から登場

服部半蔵

Hanzou Hattori

忍者集団、伊賀者を束ねた服部半蔵。忍者は諜報や攪乱活動をする一時雇いのスペシャリストである。一人の主君に仕えるケースはほとんどない。半忍半士で家康に絶対の忠誠を誓った半蔵は、異色の忍者である。

無双演武シナリオ

姉川の戦い	三方ヶ原の戦い	長篠の戦い
小牧長久手の戦い	大坂城攻略戦	上田城攻略戦

出現条件

風魔小太郎クリア

家康と半蔵

大勢力のなかでしたたかに
生き抜いた忍従の主君と
陰の下で支えた伊賀忍の頭領

[illegible]

一五八二年六月、大坂・堺を見物していた徳川家康は、信長が明智光秀の謀反にあって本能寺で亡くなったという報を受けました。兵も従えず、ほとんど無防備だった家康は、街道を通ると明智の手のものに捕らわれる恐れがあったため、伊賀の山中を越えて三河（愛知）へ戻ろうとします。

このルートも安全ということはなく、山賊や落ち武者狩りにあう恐れもありました。この危機を救ったのが、伊賀出身の服部半蔵です。半蔵は先導役を務め、知り合いの伊賀の地侍を集めて家康を護衛させます。こうして家康一行は伊賀越えに成功し、伊勢湾から船に乗って三河へ戻ったのです。

家康はこのような苦難があったために軍勢を動かせず、結局、秀

吉が明智光秀を討って信長の後継の座を奪ってしまいます。しかし、ここで無事に帰還できたからこそ、のちに家康の天下が訪れたといえるでしょう。

その後、家康は逃亡に協力した伊賀者二百名を取り立てて、半蔵をその頭に任じます。これが「伊賀同心組」という警備組織の誕生になりました。

[illegible]

服部半蔵の父・保長は、伊賀を出て三河に入り、家康の祖父・清康に仕えます。服部家は伊賀三上忍家のひとつで、多数の忍者を支配して命令を下す役目を担っていました。ところが、伊賀で何か問題がおこったのか、単に武将になりたかったのか、上忍の座を捨てて松平家に仕えたのです。

半蔵には十六歳の初陣のとき、忍者を使って敵城に潜入し、大活躍したという話があります。しかし、それ以降は忍者ではなく武将として活躍し、槍をしごいて戦功を挙げ、「鬼の半蔵」という異名をとっています。

家康の長男・信康が、信長に謀反を疑われて自害を強要されたとき、半蔵は信康の介錯を命じられました。しかし、半蔵は信康に同情して涙を流し、ついに斬れなかったのです。この話を聞いた家康は半蔵を責めたりせず、

「鬼の半蔵と呼ばれても、当主の子の首は斬れなかったか……」

と感慨深げに語ったといいます。冷酷な忍者のイメージがまったく感じられない話です。

戦場で活躍して武功を挙げる「鬼の半蔵」、暗躍する忍者たちを統率する陰の頭領、どちらが服部半蔵という男の本当の姿だったのでしょうか？

[illegible]

家康は半蔵が統率する伊賀忍者のほか、甲賀忍者や根来忍者も多数召し抱えていました。

彼らは徳川幕府成立後、伊賀組・甲賀組・根来組と名づけられ、幕府の組織に組みこまれていきます。表面上は江戸城内の警備などを担当していましたが、実際のところは全国へ散って情報収集をしていたのでしょう。これがのちに公儀隠密という諜報組織になり、家康がつくりあげた幕藩体制を強化していったのです。

健康オタク家康

本多忠勝

我が上道、貫き通さん！

尚武の血統

Tadakatsu Honda

優秀な人材が揃った家康の家臣でも、徳川四天王と呼ばれた一人で、桶狭間の戦いでの初陣を皮切りに徳川家が戦った戦場では必ず忠勝の姿があった。敵だった武田家や豊臣家からも、あまりの武者ぶりに絶賛を惜しまなかった武勇の持ち主。三河徳川家の武のシンボルだった。

無双演武シナリオ

姉川の戦い ― 三方ヶ原の戦い ― 上田城攻略戦

杭瀬川の戦い ― 関ヶ原の戦い ― 天正御前仕合

出現条件

徳川家康クリア

稲姫

戦の修羅も、命は華でありたいものです

娘に受け継がれた

Inahime

忠勝の長女。徳川家と真田家との和睦のときに、幸村の兄、真田信幸（のちに信之）に嫁ぎ小松殿と呼ばれた。徳川配下の大名として微妙な立場となった夫信之を支えて、真田家を守っていく。

無双演武シナリオ

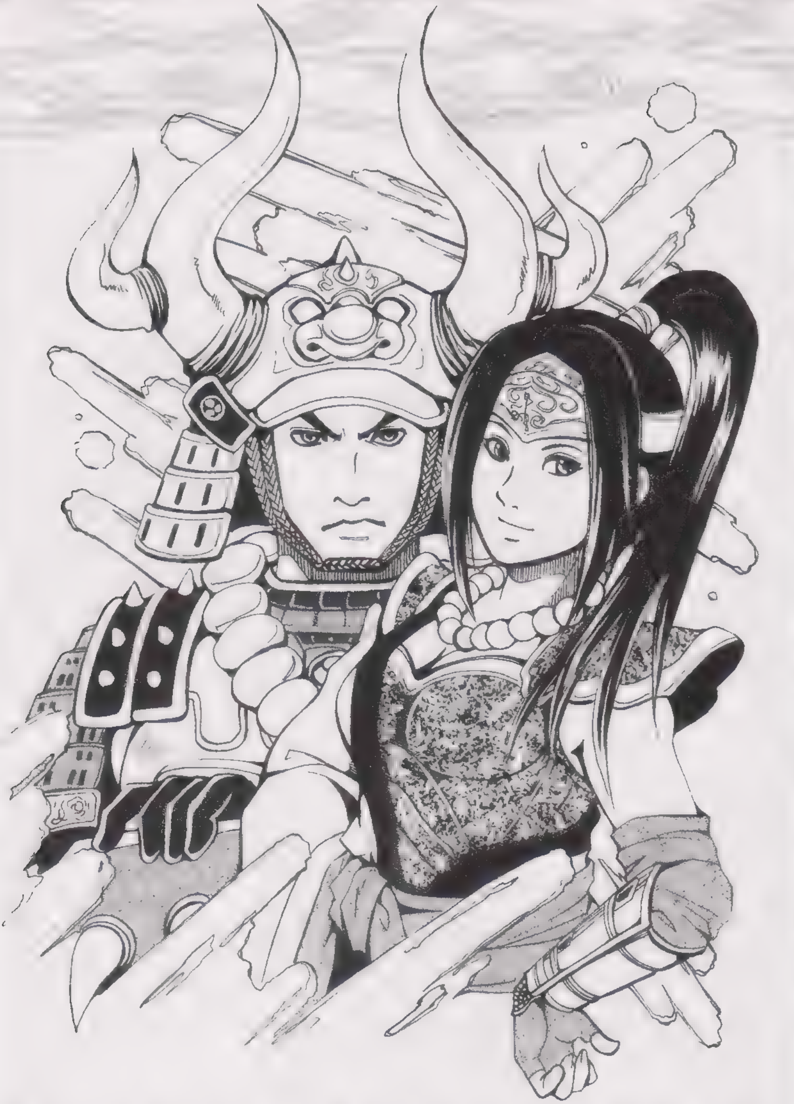
小田原城攻略戦	村落救出戦	杭瀬川の戦い
関ヶ原の戦い	大坂の陣	沼田城防衛戦

出現条件

本多忠勝クリア

忠勝と稲姫

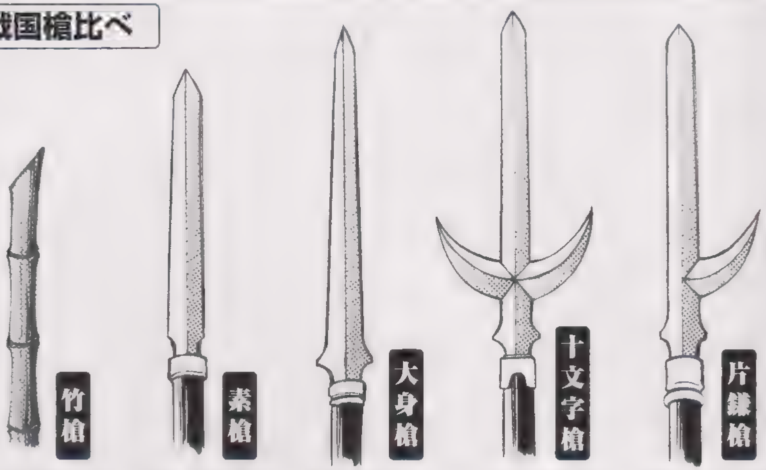
武勇、家康に一と呼ばれた忠勝と、その血筋を見事に受け継いだ稲は、見事に戦国を生き抜いたのです。



徳川家康には、配下に「徳川四天王」と呼ばれた名将がいました。酒井忠次、榊原康政、井伊直政、そして本多忠勝です。「蜻蛉切」という名の槍をふるって戦う忠勝の武勇は諸国に知れわたっていました。三方ヶ原の戦いの直前に起こった一言坂（ひとことざか）の戦いでは、撤退する徳川軍のしんがりを務めて奮闘し、敵の武田軍から「家康にはもったいない男」と賞賛されています。

忠勝には稲姫という娘がいました。女子とはいえ忠勝の精神を受け継ぎ、武芸好きのうえに度胸満点でした。忠勝は稲姫をたいへん可愛がっていたものの、やはりいつかは嫁に出さなければなりません。その相手は真田昌幸の長男・真田信之に決まりました。

戦国槍比べ



竹の先を斜めに切り落とした非常用の槍。一揆や落ち武者狩りに農民に使われた。

足軽・雑兵が使うごく一般的な槍で長さは2mから5mまでいろいろある。

穂先が60cm以上もある槍。腕力に自信のある者が使った。忠勝の「蜻蛉斬り」もこれ。

十文字状の枝刃は相手をひき倒す効果がある。加藤清正が使ったことで有名だ。

片側についた枝刃は、十文字槍と同じように、相手にひっかけて倒すためにある。

「いつまでも父上のそばにいてお助けしたい」

　稲姫はそう思っていたかもしれませんが、これは徳川と真田が手を結ぶための政略結婚でした。稲姫は徳川の養女として真田家へ嫁いだのです。そのときから稲姫は真田家中から「小松殿」と呼ばれるようになりました。

[illegible]

　稲姫の嫁入りのおかげで友好関係を保っていた徳川家と真田家ですが、それも秀吉が亡くなるまでのことでした。石田三成と家康が反目し、天下分け目の戦いが始まろうとすると、真田家は稲姫の夫・信之が徳川方につき、その父・昌幸と弟・幸村は石田三成に味方したのです。

　昌幸・幸村は上杉景勝討伐へ向かう諸大名連合軍から脱落し、居城の上田城へ戻ります。そしてその途中、昌幸は信之のいない沼田城へ立ち寄りました。

「上田へ帰る途中なんじゃが、ちと休ませてくれないものか。孫の顔も久しく見ておらんしな」

「敵を城内へ入れるわけにはまいりませぬ！」

　夫の留守を守る稲姫は侍女とともに武装を固め、昌幸を決して城へ入れようとしませんでした。昌幸と信之が決裂したという情報がすでに届いていたのです。

「これは一本とられた。さすがは本多忠勝の娘じゃの。この女子さえおれば、真田家は安泰じゃ！」

　笑いながら去っていった昌幸ですが、その笑顔には沼田城を奪えなかった悔しさが混じっていたかもしれません。

　本多忠勝も後日このニュースを聞き、稲姫を大いに誇りに思ったことでしょう。そして関ヶ原では「娘に負けてなるものか」とばかりに、捨て身の撤退を行う島津義弘軍を追撃したのです。これが勇将・忠勝にとって生涯最後の合戦となりました。

上杉謙信

この身、既に鬼神なり

宿命の龍虎

Kenshin Uesugi

戦の神である毘沙門天を深く信奉し、何よりも義を重んじた上杉謙信。武田信玄、北条氏康、織田信長と死闘を繰り返すが、彼ら戦国有数の名将相手にも、生涯において負けを知らなかった。人は謙信を戦国最強の武将と呼んだ。

無双演武シナリオ

川中島の戦い	村落救出戦	長篠乱入
手取川の戦い	関ヶ原決戦	九州征伐

出現条件

直江兼続クリア

武田信玄

兵法の極意、見せてやるわい！

川中島で相撃った

Shingen Takeda

不敗の采配をもって戦った最強騎馬軍団の総帥。その神髄は、戦わずして勝つという、戦略の王道だ。三方ヶ原の戦いで徳川家康を蹴散らし、いよいよ織田信長との決戦にのぞむ。そして宿敵、上杉謙信との対決の行方は？

無双演武シナリオ

川中島の戦い	海賊討伐戦	三方ヶ原の戦い
長篠の戦い	関ヶ原決戦	九州征伐

出現条件

上杉謙信クリア

謙信と信玄

**ともに戦国最強と呼ばれ
死闘を繰り返しながらも
お互いを認め合った英傑二人**

[illegible]川中島

一五五三年、武田信玄は信濃（長野）へ攻めこみ、村上義清を破りました。義清は逃亡し、越後（新潟）の上杉謙信を頼ります。謙信は義清の願いにこたえ、信濃へ出兵しました。ここに、戦国の二大英雄・武田信玄と上杉謙信が対戦した川中島の戦いが始まったのです。

川中島の戦いは五次にわたっており、一般に知られている両軍が大激突した戦いは、一五六一年九月の第四次川中島の戦いになります。これ以外の四回の戦いは、小規模な戦闘か、対陣しただけで終わりました。というのも、両軍がまともに戦えば必ず損害が大きくなり、たとえ勝ったとしても、そのあと戦力を回復するのが大変になるからです。

第四次は、早朝の濃霧のなか、たまたま両軍が出会ってしまったために大激戦となりました。この結果、信玄側は弟の信繁、山本勘助が戦死し、兵二万のうち四千五百を失ったといわれます。一方の上杉謙信軍も、一万八千の兵のうち、三千四百の戦死者が出ました。やはりこの損害は両軍ともに大打撃だったでしょう。

この三年後には第五次川中島の戦いが起こりますが、大きな戦闘にはならないまま終わり、両雄の最後の戦いとなりました。

[illegible]

武田信玄の合戦は、領土拡張のための戦いでした。重臣らの支持を得て、父・信虎を追放して当主の座を奪うと、さっそく信濃へ進出します。関東の北条家、駿河の今川家と三国同盟を結び、他国から攻撃を受ける心配がないことも遠征をあと押ししました。

信玄には「人は城、人は石垣、人は堀……」という名言があり、「人民こそが国を守る城や石垣そのものなのだから、城を持つよりも人の和を大切にせよ」と説いています。信玄は本拠の甲斐（山梨）国内に城を建てませんでした。この名言に従ったというよりも、戦うのは国外のみで、攻める一方だったからです。

[illegible]

一方の上杉謙信は、信玄のような領土に対する野心は持ちませんでした。それよりも、「正義の戦い」にこだわります。

謙信は関東管領・上杉憲政に頼られて何度も関東へ出兵し、次々と城を落としました。しかし、それらの城を支配する気持ちは薄く、降伏した城主たちも元のまま治めさせました。このため、謙信が越後へ戻ると城主たちはたちまち造反し、また謙信が関東へ攻め寄せるという繰り返しでした。謙信は関東・信濃・越中（富山）と、三方面で戦いを繰り広げていましたが、信玄と違って所領はほとんど広がらなかったのです。

その代わりに謙信は、関東管領職と上杉姓を手に入れました。関東管領に実質的な権力はありませんでしたが、謙信は大いに名誉に感じていたでしょう。

信玄と謙信は、水と油のような関係でしたが、戦いを通じて互いを認め合っていました。信玄は亡くなるとき、

「謙信は義理堅いから、わしが死んだらヤツを頼れ」

と遺言しました。実際に武田家滅亡後、信玄の七男・信清は、上杉家を頼って落ち延びたのです。

	武田信玄	上杉謙信
生没年	1522～1573	1530～1579
家柄	清和源氏　武田氏の長男	桓武平氏　長尾家の末子
健康	胃腸が弱くて神経質で繊細 一日の大半を執務室兼トイレで過ごす 肥満の肖像が残っているが、実は痩せていたらしい 死因は胃ガンか？	160cmくらい　大酒のみ 筋肉質だったが、大酒がたたって肥満気味になり高血圧に 死因は脳溢血らしい
ラブ	愛人は30余名、かなりのやり手 小姓時代の高坂昌信に宛てたラブレターも残っている	生涯女性と交際せずと言われる 直江兼続の嫁の姉を側に置いていたことも
子供	7男7女	なし　後継ぎの景勝は姉の子
懐具合	甲州金山が重要な収入源だったが、掘り尽くした 領土は謙信より広いが、財力では劣る	佐渡金山を持ち、江戸時代にも豊富な金脈があった ほかに海運も盛んでけっこう豊か
レジャー	温泉	毘沙門堂でおこもり

戦いの勝利などに、俺の答えはない

石田三成

義の紐帯

りょうたい

Mitunari Ishida

秀吉の小姓から、秀吉の天下統一に寄り添うように出世をとげ、豊臣政権の奉行として天下の政治を握った才物が石田三成である。切れすぎる頭脳の持ち主だが、人情に疎く多くの敵をつくってしまう。そんな三成をよき理解者である直江兼続や島左近とともに、秀吉死後に政権を狙う徳川家康との対決にのぞむ。

無双演武シナリオ

山崎の戦い	賤ヶ岳の戦い	小牧長久手の戦い
小田原城攻略戦	杭瀬川の戦い	関ヶ原の戦い
江戸の陣		

出現条件

最初から登場

島左近

生命を賭した

Sakon Shima

天下に名高い武人、島左近。誰にも仕えず浪人をしていたところ、石田三成の志に惚れてその軍師となった。兵法や武勇だけでなく、生命を三成に捧げて、徳川家康との勝ち目の薄い戦いに賭ける。

無双演武シナリオ

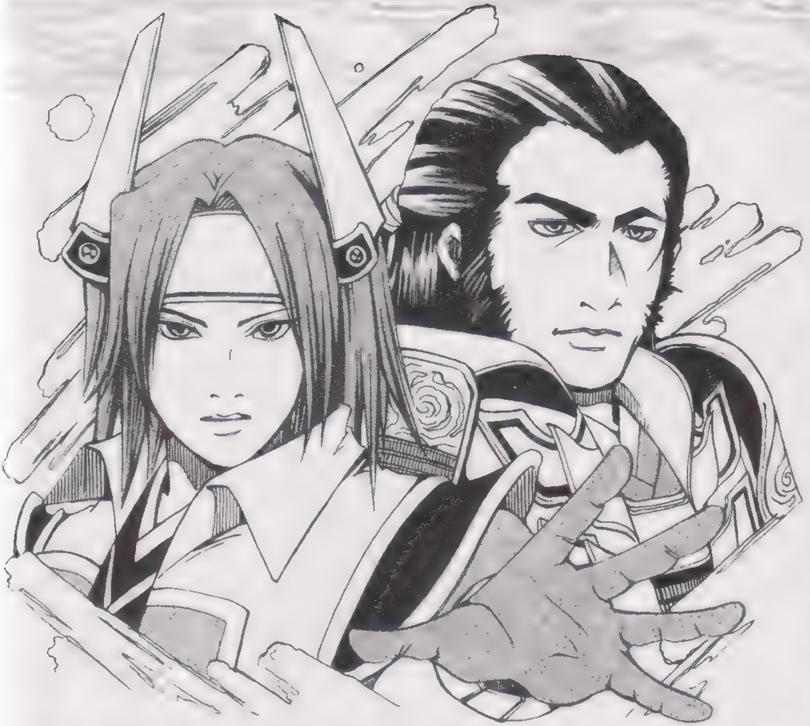
山崎の戦い	九州征伐	小田原城攻略戦
杭瀬川の戦い	関ヶ原の戦い	三方ヶ原の戦い

出現条件

石田三成クリア

三成と左近

年齢は離れた主従でしたが、おのれを知るもののために生きた二人でした。



[illegible]

石田三成は、近江の地侍の子でしたが、寺に入って小姓を務めていました。この寺に立ち寄った秀吉は、三成のもてなし方があまりにみごとだったため、その才覚にほれこんで配下に迎えます。

賤ヶ岳の戦いでは福島正則ら「七本槍」に次ぐ活躍をしたといわれますが、三成の本領は武功ではなく、実務能力にありました。出陣が決まると軍資金を用意し、兵糧や武器などの輸送を整えるといった後方支援の仕事をこなし、三成は出世していきます。

やがて三成は、近江水口城四万石を与えられました。しかし、ひとつ困った問題があります。まだ若い三成には家臣がほとんどいなかったのです。三成の苦手な軍事能力を補うような、経験豊かな武将を配下に迎える必要がありました。そこで三成が目をつけたのが、島左近でした。

[illegible]

大和（奈良）の筒井順慶の家臣だった島左近は、弱小勢力の筒井家を支えつづけた武人です。順慶没後は跡継ぎの定次に仕えますが、折り合いが悪く、やがて筒井家を飛び出してしまいます。そこへスカウトに訪れたのが三成でした。

「島どののような歴戦の勇士が、こんな若造の家臣になってくれるだろうか？」

そこで三成は思い切った申し出をします。

「私の知行は四万石ですが、俸禄としてその半分の二万石を差しあげましょう」

君主と家臣の領地が同じ——こんな冗談のような話を聞いた左近

は、意気に感じて三成にほれこみ、家臣になる決心をしたのです。
「三成に過ぎたるものが二つあり島の左近と佐和山の城」
とうたわれた、石田三成・島左近主従の誕生でした。

[illegible]

三成は豊臣政権の五奉行のひとりとして活躍し、存在感を強めていきます。ただ、官僚としては有能でしたが、無遠慮な発言をして敵をつくることが多く、左近もそんな性格を心配していました。
とくに豊臣家臣の福島正則、加藤清正といった武闘派の面々とは仲が悪く、朝鮮の役では、三成が清正の行状の悪さを秀吉に訴え、清正が帰国・謹慎を命じられるという事件が起こりました。これ以降、清正たちと三成の対立は決定的となります。これはのちに関ヶ原で清正たち豊臣恩顧の武将が徳川方へつく原因となりました。

西軍の士気を高めた一戦

秀吉没後、天下の状況は大きく変わっていきます。
「このままでは徳川に天下を乗っ取られる」
と警戒した三成は、家康が会津の上杉景勝討伐に向かったスキに反徳川の大名を集めて兵を挙げ、家康に戦いを挑みます。
しかし、これは家康のワナでした。家康は軍を反転し、東海道をのぼってアッという間に三成のいた美濃大垣城の目の前までやってきたのです。三成方の諸将に動揺が走りました。そんなときに進言したのが島左近です。
「こういうときに出撃して士気を高めないと、本番の戦いで負けてしまいます」
左近は兵一千を率いて出撃し、宇喜多家臣の明石全登らも加わりました。一方、徳川方から迎撃に出たのは中村一栄・有馬豊氏隊です。左近は杭瀬川を渡って攻撃をしかけ、すぐに退却を始めました。敵は追撃を開始し、勢いにのって川を渡ってしまいます。ここで川岸にいた伏兵が敵の退路を絶ち、宇喜多勢も加わって包囲攻撃し、大勝利を収めたのです。
「このまま家康の首を取りに行きましょうぞ！」
意気揚々と引き揚げてくる島左近と、勝利を称える三成。関ヶ原の戦い前日のことでした。

三杯のお茶

直江兼続

風来坊の友誼（ゆうぎ）

Kanetugu Naoe

上杉謙信の小姓で、謙信の軍法はもちろん生き方まで深く傾倒した。謙信死後は、その後継者景勝に無二の忠誠で仕え、「天下の名家老」と呼ばれる。盟友・石田三成に応じて徳川家康挟撃の大戦略に賭ける。

無双演武シナリオ

川中島の戦い	手取川の戦い	小田原城攻略戦
長谷堂の戦い	江戸城攻略戦	上杉征伐

出現条件

真田幸村クリア

前田慶次

この戦場を大舞台に、大傾奇だ！

天下の名家老と

Keiji Maeda

並はずれた武力と知性をもちあわせた稀有な漢。出世や名声に興味をもたずに、「傾奇者」として自由奔放な生き方を貫いた前田慶次。そんな慶次は「己を知る」直江兼続との友誼にすべてを預け、ともに闘うことを誓う。

無双演武シナリオ

小田原城攻略戦	三成救出戦	海賊討伐戦
長谷堂の戦い	江戸城攻略戦	天正御前仕合

出現条件

直江兼続クリア

兼続と慶次

天下の名家老と
天下無双の風来坊
生涯にわたった風変わりな友情

[illegible]

直江兼続は、幼いころから上杉謙信に仕え、上杉家への忠誠心を育むとともに、謙信から武将としての精神を学びました。

謙信が亡くなって景勝の代になると、兼続は若き重臣として上杉家を支えます。のちに上杉家は秀吉の傘下に入りますが、秀吉は才気あふれる兼続を気に入り、景勝の会津百二十万石に国替えになったとき、米沢三十万石を特別に兼続に与えています。これは兼続を上杉家から引き抜こうとしたためともいわれますが、兼続の忠誠心は揺らぎませんでした。

[illegible]

秀吉が没して家康が次代の天下人として有力になると、上杉家に暗雲が立ちこめます。

家康は、謀反の疑いなど難癖をつけて、上杉家を従えようとしました。兼続は覚悟を決め、「なぜ景勝が命令にそむいて上洛しないのか」などといった非難に対して反論し、さらに、

「景勝が間違った行いをしているのか、家康さまが裏で画策しているのか、世間がいずれ判断してくれるでしょう」

というような宣戦布告とも受け取れる言葉を盛りこんだ書状を送りました。これは「直江状」と呼ばれています。

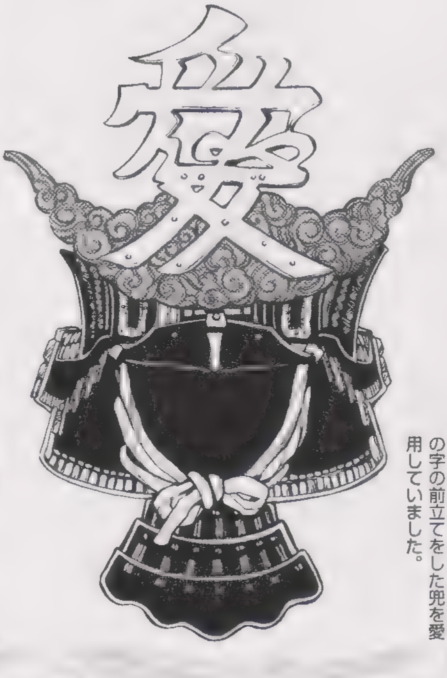
これにより、家康側は上杉討伐の準備を開始します。一方、上杉家にも各地から腕に覚えのある浪人たちが集まってきました。そのひとりが前田慶次です。

「大ふへんもの」の活躍

前田慶次は前田利家の兄の子で、若いころから利家にしたがって戦功をあげます。その一方で古典文学に通じ、詩歌にも優れていました。しかし、奔放な性格で奇行が多く、それを利家にとがめられると、利家をだまして水風呂に入れ、前田家から逃げ出しました。

そんな慶次がたどりついたのが上杉家です。教養人でもあった直江兼続に、慶次が興味を持ったのかもしれません。

のちに慶次が出陣するとき、「大ふへんもの」と書いた旗ざおをさしていました。これを見たほかの武将は、「新参者のクセに『大武辺者』とは何事だ！」と怒



直江兼続は、実際は「愛」の字の前立てをした兜を愛用していました。

り出します。これに対して慶次は、「これは拙者が浪人で貧乏だったゆえ、『大不便者』と書いたのです」と涼しい顔でこたえました。

徳川軍は上杉家へ向けて進軍を開始しましたが、西で石田三成が挙兵したために徳川軍は兵を返し、上杉軍対徳川軍の合戦は実現しませんでした。

このため、上杉軍は徳川方についた山形の最上領に攻めこみます。ところが、長谷堂城の最上軍の抵抗が予想外にしぶとく、その間に関ヶ原での東軍勝利の報が伝わりました。これにより、上杉軍は撤退せざるを得なくなります。

兼続は最上軍の追撃を防ぐため、「しんがり」、つまり撤退する軍の最後尾につきます。これに「ぜひ拙者も!」と志願したのが慶次でした。心強い味方を得た兼続は、慶次の奮闘もあり、見事に撤退を成功させたのです。

真田幸村

私には生きて、貫くべきものがある！

光る武士（もののふ）の意地

Yukimura Sanada

父の昌幸とともに関ヶ原の戦いで上田城を囲んだ徳川本軍を翻弄した真田幸村。戦後、幽閉されて無念の日々を送る。東西が手切れとなり、豊臣と徳川は再び雌雄を決することとなる。幸村は勝てないことを知りながら、豊臣秀頼の招きに応じて大坂城に入る。狙いは豊臣の勝利でもなく、徳川家康の首でもなく、ただ武士の面目を貫くために。

無双演武シナリオ

長篠撤退戦	小田原城攻略戦	三成救出戦
上田城防衛戦	大坂の陣	関ヶ原の戦い

出現条件

最初から登場

伊達政宗

天下までわしは一気に走り抜ける！

戦国終焉に

Masamune Date

時代にも地理にも恵まれなかった政宗。現実家である政宗は、次代の天下を夢見ながらも、関ヶ原の戦いでも大坂の陣でもいちはやく徳川方につく。信長の後には秀吉、秀吉の次は家康、ならば家康の次があってもいいだろう。最後の戦国武将と呼ばれた政宗の左眼は常に天下を狙い続ける。

無双演武シナリオ

小田原城攻略戦	長谷堂の戦い	海賊討伐戦
大坂の陣	三方ヶ原決戦	関ヶ原の戦い

出現条件

雑賀孫市クリア

幸村と政宗

まったく異なる人生をあゆんだ
奥州の独眼竜と
日本一のつわもの

遅れてきた武将

伊達政宗と真田幸村はともに一五六七年生まれで、これは信長が美濃の稲葉山城を占領した年です。彼らが成人したころには、すでに天下の行方は定まっていました。いわば彼らは「遅れて世に出た戦国武将」だったのです。

伊達政宗は十八歳で父・輝宗から家督を継ぎました。まだ四十一歳だった輝宗が隠居を決意したのは、妻・義姫が政宗の弟・竺丸（じくまる）に跡を継がせるのを防ぐためといわれています。

翌年、伊達家に降伏した二本松義継が、突然輝宗を拉致して逃亡しました。このとき政宗は、「私にかまわず、義継を撃て！」という言葉に従い、義継ともども輝宗を討ってしまいます。若き政宗の苦渋の決断でした。

その直後、人取橋の戦いで佐竹・蘆名ら三万の軍勢と戦い、押され気味ながらも伊達成実や戦死した茂庭良直らの活躍で持ちこたえました。その後も苦難の時代が続きますが、政宗は軍事力に加え、ときには外交や調略で周囲の大名・豪族を従えていきます。そし

て摺上原（すりあげはら）の戦いで蘆名家を滅ぼし、奥州最大の勢力となりました。

しかし、政宗の快進撃はそこで終わりました。秀吉が日本の三分の二を手中にし、関東・奥州へ進出してきたからです。

[illegible]

政宗が摺上原の戦いに勝ったころ、真田幸村は人質として大坂城に入っていました。兄・信之が嫡男として父・昌幸に従っていたため、次男だった幸村が人質になったというわけです。

小田原の陣後、幸村はようやく人質から解放されました。ちなみに伊達政宗は、遅ればせながらも小田原の陣に駆けつけて、秀吉に降伏しています。

その後、幸村は兄や父に従っていましたが、関ヶ原の戦いが真田家の命運を大きく変えました。昌幸は石田三成の誘いにのって西軍につきましたが、家康の養女（本多忠勝の娘・稲姫）を妻に迎えた信之は、父や幸村とたもとを分かって家康につきます。幸村は父に従い、上田城へ入りました。

やがて、徳川秀忠の三万八千の大軍が、中山道を通って関ヶ原へ向かいます。秀忠は三千の兵しかいなかった上田城を攻めますが、昌幸と幸村は伏兵やワナなど、あらゆる手を使って防ぎます。この結果、秀忠は関ヶ原への到着が遅れる大失態を演じたのです。

伊達家に仕えた幸村の子

とはいえ、肝心の関ヶ原の戦いでは東軍が勝利を収めました。結局、真田昌幸・幸村父子は紀伊（和歌山）の九度山へ流され、幸村はその後の十四年間をこの地で過ごします。父・昌幸も亡くなり、幸村はこのまま生涯を終えるものと思っていました。

事態が変わったのが一六一四年のことでした。徳川との決戦に備え、豊臣方は全国から浪人を集めたのです。幸村はこの呼びかけに喜んで応じ、九度山を抜け出して大坂城に入りました。

大坂冬の陣で、幸村は大坂城外に「真田丸」という出城を築き、攻め寄せてくる徳川方の軍勢をさんざんに破りました。

そして、一度講和後の翌年の大坂夏の陣の道明寺の戦いで、幸村は伊達政宗の軍と戦います。伊達軍は片倉重綱の鉄砲騎馬隊を先頭に立てて攻めこみました。これに対して幸村は槍隊を伏せ、伊達軍が近づくと奇襲をかけて押し返します。両者はこれが最初で最後の対決となり、幸村は翌日の天王寺の戦いで家康本陣に突撃をかけて戦死しました。

この戦いが縁で、片倉重綱は戦後になって真田幸村の遺児を探しだして保護しました。そしてうめという女子は重綱の妻となり、男子の大八は片倉守信と改名して伊達家に仕え、真田幸村の血すじを世に遺したのです。

直接対決！伊達対真田

戦国の最後を飾る大坂夏の陣で、東西両軍は惜しげもなく精鋭を繰り出して華々しい戦いが繰り広げられた。なかでも目を引くのは伊達政宗と真田幸村の対決だ。

大坂城を目指して突き進む伊達勢が道明寺についたところで現れたのが真っ赤な鎧に身を固めた真田勢だった。不意をつかれた政宗は鉄砲を持った騎馬武者を差し向ける。この鉄砲騎馬隊は、機動力と打撃力をあわせ持ち、敵陣を強行突破するときに使われる敗れたことがない精強部隊だった。しかし、これを予期していた幸村は、草むらに伏せておいた長槍隊で騎馬の脚をなぎ払い撃退した。

ここで両者ともに兵をひき、決着はつかなかった。

島津義弘

ぬけた九州の両雄

Yoshihiro Shimazu

薩摩の大名、島津四兄弟の次男。天下人の秀吉も家康も、義弘の武勇と薩摩武士の精強を怖れて、無理な戦いを挑まなかった。秀吉が信長の後継者として天下統一をすすめていた頃、島津軍は九州制覇の仕上げに、立花城を攻める。

無双演武シナリオ

九州征伐	小田原城攻略戦	杭瀬川の戦い
関ヶ原突破戦	江戸城攻略戦	関ヶ原の戦い

出現条件

立花誾千代クリア

立花誾千代

立花とは散る花ではない

恩讐の彼方をつき

Ginchiyo Tachibana

戦国九州の動乱を男よりもなおたくましく生き抜いた烈婦、それが立花誾千代だ。雷の化身と呼ばれた名将・立花道雪の唯一の子。父から武芸兵法を学び、「男だったら九州を統一していた」とさえ言われた。

無双演武シナリオ

九州征伐	小田原城攻略戦	杭瀬川の戦い
関ヶ原の戦い	島津追撃戦	江戸の陣

出現条件

最初から登場

義弘と誾千代

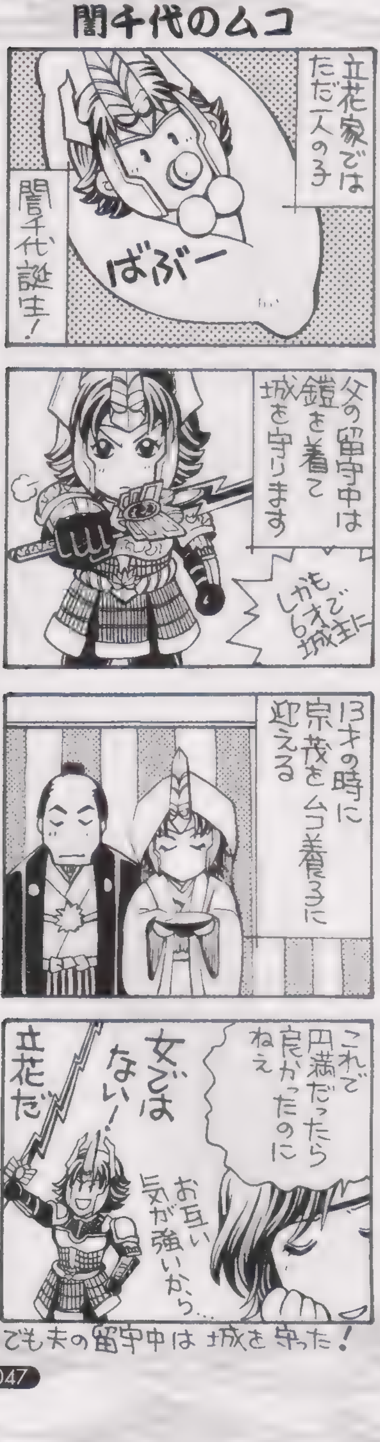
九州一の名将の血を受け継ぎ
武勇西国一の婿をもった女と
九州を制した英雄の因縁

六歳で城主となった少女

立花誾千代は、豊後（大分）の大名・大友宗麟の家臣・立花道雪の娘です。道雪は雷に撃たれて足が不自由でしたが、輿に乗って戦場で指揮をとり、三十七回戦って一度も負けなしという名将でした。

誾千代は道雪が五十六歳のときに生まれた子です。そして唯一の子供だったためか、六歳のときに家督を譲られ、筑前立花城主となりました。かといって道雪は誾千代を武将にしようと考えたわけではなく、立花家を継ぐのにふさわしい婿を探し求めていました。

道雪が悩んだすえに選んだのは、大友家臣の一人で、道雪の親友だった高橋紹運の長男・統虎です。統虎は高橋家の跡継ぎだったので、紹運はこの申し出に驚きました。



「あつかましいのは承知のうえでござる。立花家を継ぐのにふさわしいのは統虎どのしかおらぬ。どうか婿にくだされ!」

道雪の並々ならぬ決意に圧倒され、紹運もついに折れました。こうして誾千代は十三歳のとき、十五歳の高橋統虎、のちの立花宗茂と結婚します。

誾千代は猛将・道雪の娘だけあって、男勝りで武術を好み、宗茂とぶつかることもありました。しかし、夫とともに立花家と立花城を守っていこうという強い決意を抱いていたのです。

道雪没後、立花家を襲った危機が、薩摩(鹿児島)の島津家による筑前攻略でした。この遠征の指揮をとっていたのが島津義弘で、兄・義久に従い、島津軍の前線に立って九州統一をめざしていました。

しかし、高橋紹運の必死の抵抗にあって岩屋城攻略に時間がかかってしまい、豊臣秀吉の大友方への援軍が到来したため、島津軍はやむなく撤退しました。この戦いで紹運は戦死しましたが、おかげで誾千代や宗茂が守る立花城は無事だったのです。

こののち、島津家は秀吉に降伏し、義弘は島津家の代表として秀吉に仕えます。そして朝鮮の役に従軍し、「鬼石曼子(おにしまづ)」と呼ばれて敵から恐れられました。その後、関ヶ原の戦いでは西軍に属しましたが、石田三成をきらっており、国から送られた兵が少なかったこともあって、戦闘が始まっても陣から動きませんでした。

そして、西軍の敗北が決定的になったとき、義弘は敵陣を突破して退却しようとします。千にも満たない兵を率い、敵中に割って入る島津軍。兵は次々と倒れていきましたが、ついに東軍の追撃をふりきりました。そして大坂から船で薩摩へ向かったのです。

その道中をともにしたのが、かつて敵同士だった立花宗茂でした。二人は船上で会見し、お互いの無事を称えあったといいます。

島津は宗茂にとって実父・高橋紹運の仇ですが、朝鮮の役でともに戦った同志であり、また関ヶ原でも同じ西軍で苦労したことから、お互いにかつての遺恨はすでに忘れ去っていたのでしょう。

風魔小太郎

我は風と同じ、混沌に吹きすさぶのみ

異形異能の士

（いぎょう いのう）

Kotarou Fuma

相模北条氏に仕えた伝説的な忍者集団風魔党。風のようにあらわれ魔のように敵を攪乱する戦法を得意としたという。その頭領は代々、小太郎を襲名したと伝えられるが、実体は定かではない。

無双演武シナリオ

三方ヶ原乱入	大坂湾の戦い	大坂城攻略戦
風魔叛逆	九州征伐	小田原城防衛戦

出現条件

最初から登場

雑賀孫市

勝利の女神にまで、惚れられてるんでね

風雲乱世を生き抜いた

Magoich Saika

戦国大名にこわれては戦場へおもむく鉄砲傭兵集団、雑賀衆の頭領。最新兵器の鉄砲をこなす腕を資本に自由自在に生きてきた孫市だが、織田信長は雑賀衆の存在を認めなかった。雑賀を根絶やしに女子供まで手をかけた信長。生き残った孫市はただ一人で覇王への復讐を誓うのだった。

無双演武シナリオ

姉川の戦い	大坂湾の戦い	雑賀攻め
本能寺脱出	山崎の戦い	三方ヶ原決戦

出現条件

明智光秀クリア

孫市と小太郎

異能をもって乱世を生き抜いた二匹の狼

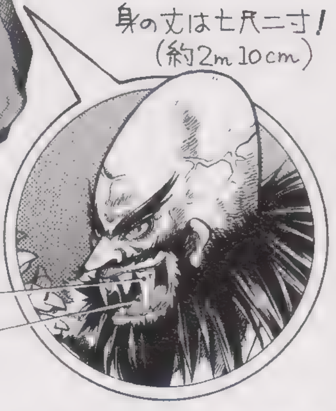
戦国時代の合戦で戦っていたのは大名の軍団ばかりではありません。金で雇われた傭兵集団が味方に加わったり、戦場の背後では忍者たちも暗躍していました。

傭兵集団として有名だったのが、雑賀孫市が率いる紀伊の雑賀衆です。雑賀衆は早くから鉄砲の威力に着目し、まだ鉄砲があまり普及していないころから、数千挺の鉄砲をそろえて戦っていました。

やがて信長が台頭し、石山本願寺と争うようになると、一向宗の信者が多い雑賀衆は、本願寺に肩入れして戦うようになります。

信仰心の薄い孫市は、最初は気乗りしなかったものの、各地の一向一揆に対する信長の容赦のない攻撃ぶりを見るうちに、

「必ず信長にオレの鉄砲をお見舞



風魔小太郎 オリジナル 想像図!

小田原落城の後に北条家の遺臣によって書かれたとされる「北条五代記」という書物に、風魔党の活躍や小太郎の記事があります。これによると、風魔小太郎はこんな人?だったそうで……

いしてやる!」

と、いつしか打倒信長に情熱を燃やすようになったのです。

[illegible]

一方、戦場の裏側で活躍していたのが忍びの集団です。戦国大名は、それぞれ独自の忍者集団を配下に抱えていました。忍者といえば伊賀・甲賀が有名ですが、関東の北条家に雇われていたのが風魔小太郎率いる風魔党でした。

武田勝頼が駿河(静岡)へ進出して北条軍と戦ったとき、小太郎は二百人の配下を毎晩のように武田陣へ侵入させました。そこで敵兵を暗殺したり、馬を暴れさせたり、大声をあげたり、果ては火をつけるなどさんざんに混乱させました。このために武田軍はろくに戦わずに撤退したといいます。

忍者の主要な仕事は情報収集ですが、風魔党はこのようなゲリラ戦も得意とし、北条家を陰から支えていたのです。

人を活かす剣…いつか…

宮本武蔵

流離(さすら)った剣聖伝説

Musashi Miyamoto

武蔵にとっては剣の道は立身出世のためではなかった。しかし、突き進めば進むほどに、武蔵の前に敵は増え、そして死が増えていく。剣は人を殺すための道具にすぎないのか。やがて武蔵は己のゆく道は、剣の腕を磨くことにないことに気づくのだった。

無双演武シナリオ

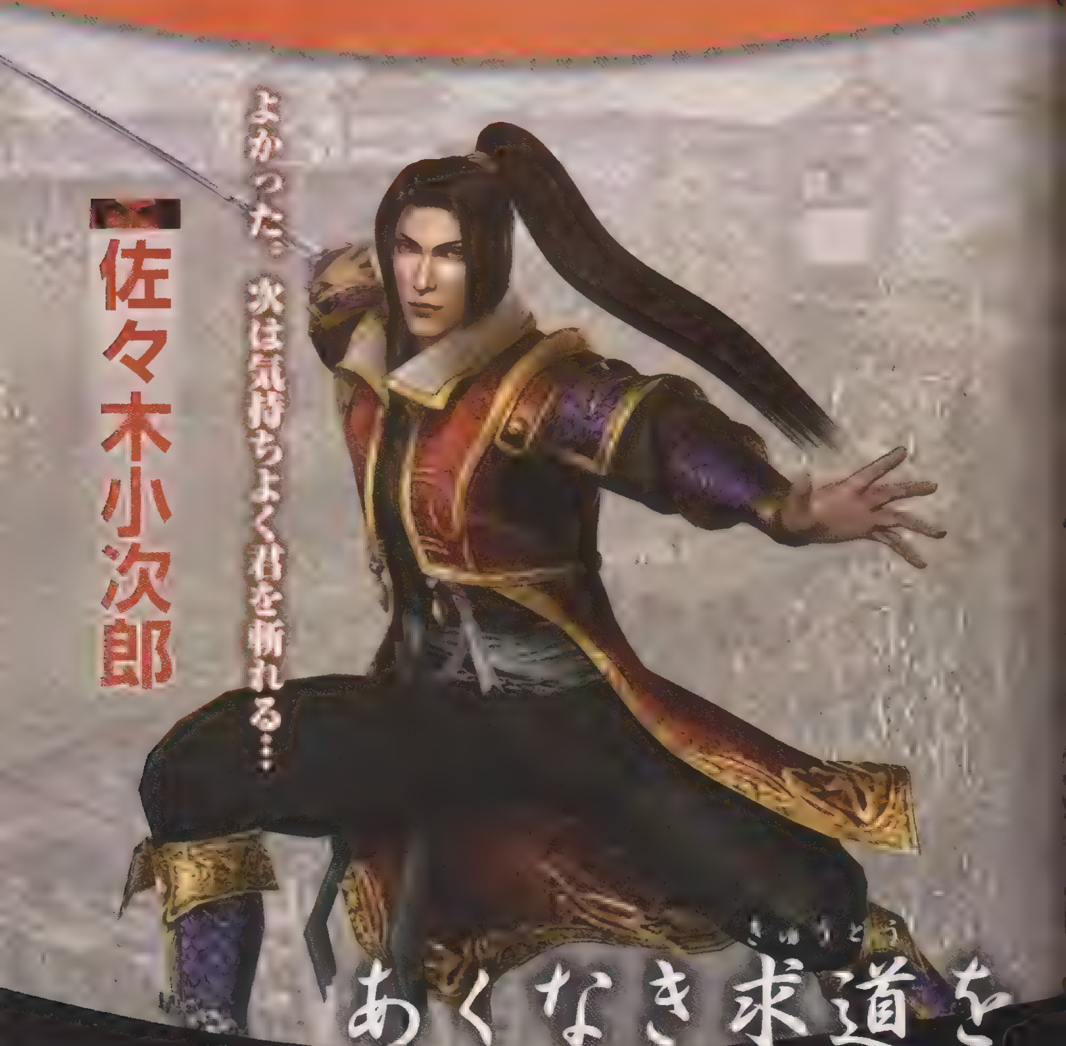
関ヶ原の戦い	村落救出戦	京洛動乱
大坂の陣	江戸城攻略	天正御前仕合

出現条件

阿国・森蘭丸を除く
全キャラクターが登場した直後に出現

佐々木小次郎

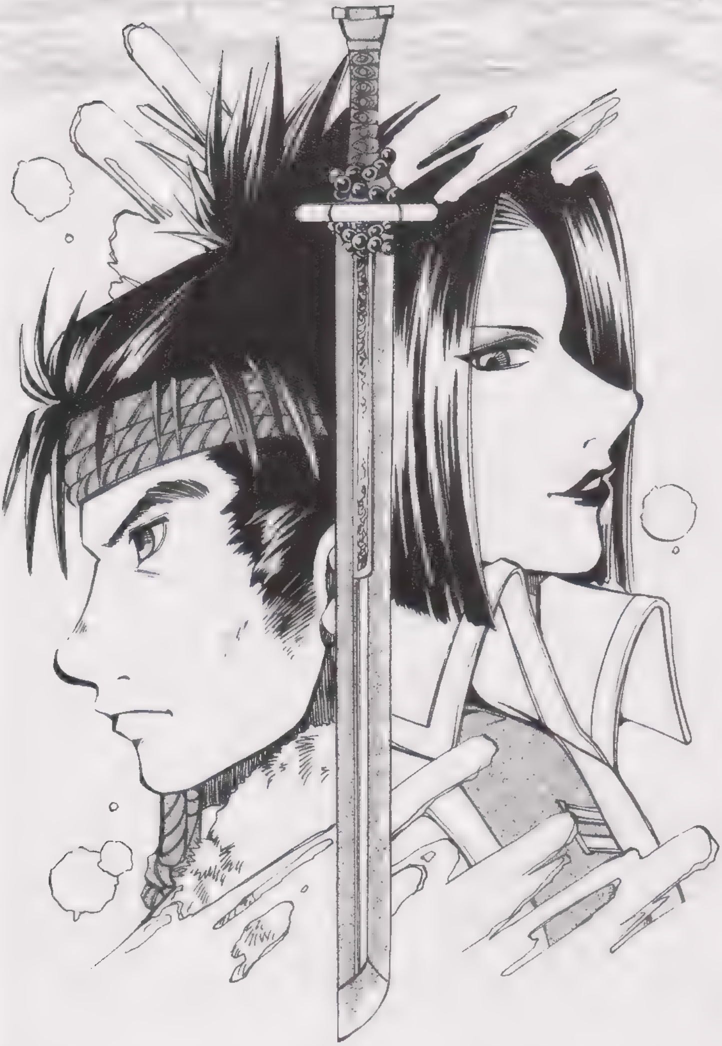
よかった。次は気持ちよく君を斬れる…



あくなき求道を

Kojiro Sasaki

戦国末期の動乱が産んだ魔剣士。敏捷性やリーチなど、武蔵に対して腕力以外はすべてに優っていた。備前長船作の業物、三尺一寸の長刀「物干し竿」と、「燕返し」の秘技の前に武蔵は立ち向かえるのか？



武蔵と小次郎

二刀流と燕返し 二人の天才剣士が 意地とプライドをかけた勝負

[illegible]

徳川幕府が全国支配の総仕上げとして大坂の陣をおこしたのが一六一四年のこと。その二年前の一六一二年、九州小倉の巌流島で行われたのが宮本武蔵対佐々木小次郎の一戦です。

宮本武蔵は剣豪・新免無二斎の子として生まれ、十三歳で早くも決闘を行い、相手を棒でなぐり殺したといわれています。関ヶ原の戦いにも参戦しましたが、その後は剣を鍛えて剣豪として生き、仕官の道を探ろうとします。

その最初の試練が京都の吉岡家一門との戦いでした。武蔵が吉岡清十郎とその弟・伝七郎を倒すと、残った一門は幼い清十郎の子を総大将にたてて、数十人で戦いを挑んできたのです。武蔵は決闘場所に先回りし、最初に総大将の

剣豪番付　無双場所

番付	西		東	
横綱	塚原卜伝（つかはら ぼくでん） (一四八九～一五七一)	新当流の祖。もう一人の「剣聖」。元鹿島の神官で、足利義輝や北畠具教も弟子だった。	上泉信綱（かみいずみ のぶつな） (一五〇八～一五八二)	新陰流の祖。「剣聖」とも呼ばれる。袋竹刀を用いて、子弟の安全にも気を配った。
大関	富田勢源（とだ せいげん） (一五二三～?)	中条流、一刀流の太祖。小太刀を得意とした。佐々木小次郎の師匠との説がある。	愛洲移香斎（あいす いこうさい） (一四五二～一五三八)	陰流の祖。伊勢の出身で、陸奥から九州まで各地を修行した。上泉信綱の師。
関脇	宝蔵院胤栄（ほうぞういん いんえい） (一五二一～一六〇七)	宝蔵院流槍術の祖。上泉信綱に学び、兄弟弟子の石舟斎と切磋琢磨した。	柳生石舟斎（やぎゅう せきしゅうさい） (一五二九～一六〇六)	柳生新陰流の祖。上泉信綱に剣を学び、無刀取りを完成させたと言われている。
小結	小野忠明（おの ただあき） (?～一六二八)	一刀斎の弟子。兄弟子や師匠を力で乗りこえた実力者。小野派一刀流を創始した。	柳生宗矩（やぎゅう むねのり） (一五七一～一六四六)	石舟斎の子。活人剣という思想によって徳川家の剣術指南となる。剣の実力は未知数。
前頭筆頭	佐々木小次郎（ささき こじろう） (?～一六一二)	巌流の創始者。長太刀一本での剣術は、戦国期から脱却し近世剣術への先がけとなる。	宮本武蔵（みやもと むさし） (一五八四～一六四五)	無敗の剣豪。二天一流という実践的な剣術を創始する。晩年、「五輪書」を著述した。
前頭二枚目	伊東一刀斎（いとう いっとうさい） (?～?)	一刀流の祖。鐘捲自斎の弟子で、師匠を破って一刀流を興したともいわれている。	東郷重位（とうごう しげかた） (一五六一～一六四三)	薩摩自顕流の祖。攻撃に全力をかたむけた剣法。薩摩藩士のほとんどが習得する剣術。
前頭三枚目	鐘捲自斎（かねまき じさい） (?～?)	富田勢源の弟子。伊藤一刀斎の師だが、佐々木小次郎の師匠でもあるという。	丸目長恵（まるめ ながよし） (一五四〇～一六二九)	タイ捨流の祖。上洛して上泉信綱に敗北して弟子となる。一時東郷重位が師事していた。

独断と偏見でつくった剣豪番付。やはり横綱を張るのは「剣聖」と呼ばれた上泉信綱と塚原卜伝にしたい。どちらが東西かは甲乙つけがたい。

大関に持ってきた愛洲移香斎と富田勢源は、それぞれの事蹟はそれほど華々しくないが、両名から発した剣術が戦国から江戸期に大きく占めるところに注目した。

関脇・小結および前頭筆頭はいずれもライバル関係にあるものを採用。小結の柳生宗矩と小野忠明では、剣においては小野忠明の方に分があるが、将軍家から剣術指南を罷免されるなど器としては問題がある人物である。

子供を討って敵の戦意を喪失させて、みごとに勝利を収めました。

[illegible]

一方の佐々木小次郎は、越前の剣豪・富田勢源、あるいはその門弟の鐘捲自斎のもとで富田流兵法の修業を積んでいました。

富田流は小太刀を得意としていました。小次郎はそのけいこ相手として大太刀ばかり使っていた結果、「つばめ返し」という恐るべき必殺技をあみだし、「巌流」という剣術流を創始します。

吉岡一門を滅ぼして名を挙げた二刀流・武蔵と、天才剣士・小次郎。この二人が剣術日本一をかけて戦うのは運命的でした。

決戦当日、武蔵はわざと遅刻し、船の櫓を削ってつくった長い木刀を武器に選びます。武蔵を待ち続けた小次郎は、戦う前からいらだちを隠せませんでした。「戦う前に勝つ」——小次郎はすでに武蔵の術中にはまっていたのです。

阿国

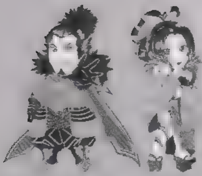
ほんに、一期は夢やわあ

豊穣(ほうじょう)なる芸能の女神

Okuni

戦国時代も終わりに向かう頃、男装の麗人の踊りが人気を博した。「阿国かぶき」と呼ばれる艶やかな舞の踊り手は「出雲の阿国」と呼ばれた。生年も没年も不詳のこの踊り手は、今なお、歌舞伎の創始者として名を伝えられている。

出現条件
双六クリア



第二章　信長の時代

2nd mission / **The Nobunaga Age**

戦国時代MAP

信長の時代

1560～1582

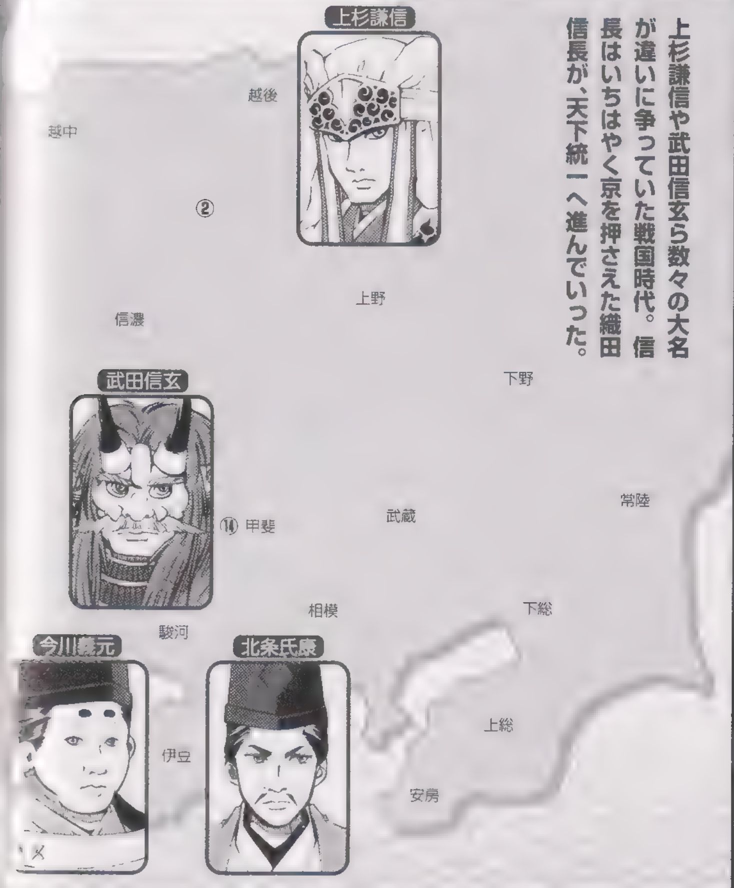
①桶狭間の戦い（一五六〇）
織田信長が今川義元を破る。義元は戦死。

②川中島の戦い（一五六一）
武田信玄と上杉謙信が戦うが決着はつかず。

③稲葉山城の戦い（一五六七）
織田軍の攻撃で稲葉山城が落ちて、美濃は信長のものとなる。

④信長上洛（一五六八）
織田信長が足利義昭とともに上洛。義昭を将軍につける。

上杉謙信や武田信玄ら数々の大名が違いに争っていた戦国時代。信長はいちはやく京を押さえた織田信長が、天下統一へ進んでいった。



⑩小谷城の戦い（一五七三）
織田軍の攻撃に小谷城が落ちる。長政は自害。

⑪長篠の戦い（一五七五）
織田徳川連合軍が武田勝頼を破る。

⑫手取川の戦い（一五七七）
上杉謙信が織田軍を破る。

⑬木津川の戦い（一五七八）
織田水軍が毛利水軍を破る。

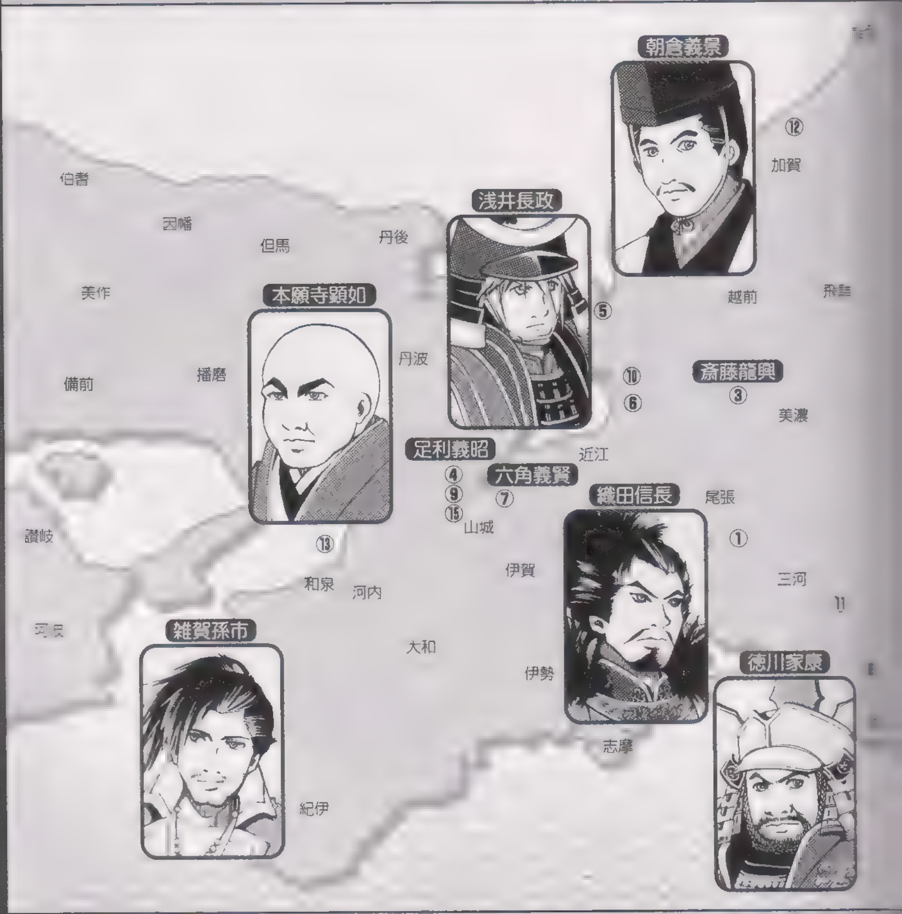
⑤金ヶ崎の戦い（一五七〇）
織田徳川連合軍が朝倉義景を攻めるが、浅井長政の背反にあい撤退する。

⑥姉川の戦い（一五七〇）
織田徳川連合軍が、浅井朝倉連合軍を破る。

⑦宇佐山の戦い（一五七〇）
浅井朝倉連合軍の攻撃により織田家の森可成が戦死する。

⑧三方ヶ原の戦い（一五七二）
徳川家康、武田信玄の前に惨敗する。

⑨室町幕府滅亡（一五七三）
織田信長、足利義昭を京から追放する。



⑭天目山の戦い（一五八二）
織田軍の進攻により、追いつめられた武田勝頼が自害して武田氏は滅亡する。

⑮本能寺の変（一五八二）
明智光秀が京の本能寺にいた織田信長を襲う。

信長をめぐる人々

織田信長の前には、強力なライバルたちがひしめいていた。信長は優秀な家臣とともに、彼らと戦ったのだ！

⟷ 敵対　＝＝ 友好　―― 微妙　←― 敵意　……… ライバル

織田家臣・柴田派

柴田勝家

北陸方面軍団長
お市に恋慕、晩年まで独身

- **滝川一益** 甲賀の忍者出身といわれる武将。関東担当
- **前田利家** 秀吉の親友
- **佐々成政** 鉄砲組のエリート武将

恋仇、お互いにムシが好かない

織田家臣・丹羽派

- **丹羽長秀** 織田家ナンバー2。穏やかな人柄。四国方面担当に
- **羽柴秀吉** 才知に富みトントン拍子に出世

ライバル

- **明智光秀** 濃姫の従兄弟、幕府朝廷との折衝役
- **細川藤孝** 光秀の旧友で足利将軍家の元家臣
- **筒井順慶** 島左近の元主君

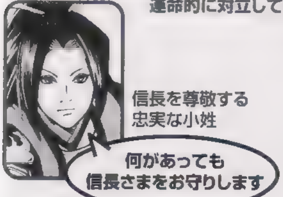
濃姫

従兄弟

認め合いながらも
相容れない

敬慕

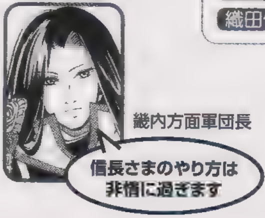
森蘭丸



信長を尊敬する
忠実な小姓

運命的に対立していく

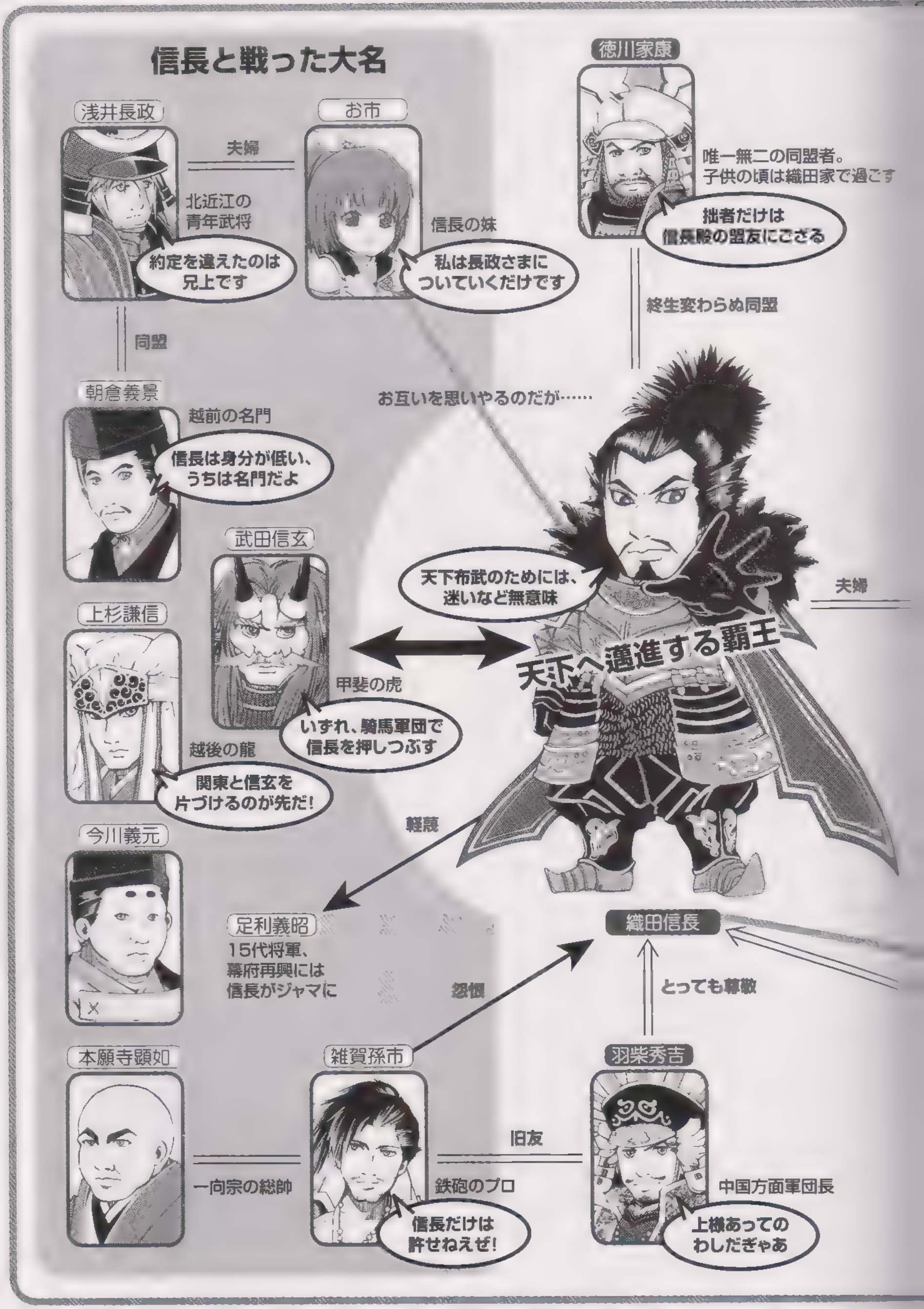
明智光秀



畿内方面軍団長

信長の息子たち

- **織田信忠** 長男。本能寺の変で急死
- **織田信雄** 次男。小大名として残る
- **織田信孝** 三男。賤ヶ岳の後、謀殺


信長と戦った大名
浅井長政
北近江の
青年武将
約定を違えたのは
兄上です
夫婦
お市
信長の妹
私は長政さまに
ついていくだけです
同盟
朝倉義景
越前の名門
信長は身分が低い、
うちは名門だよ
武田信玄
甲斐の虎
いずれ、騎馬軍団で
信長を押しつぶす
上杉謙信
越後の龍
関東と信玄を
片づけるのが先だ!
今川義元
足利義昭
15代将軍、
幕府再興には
信長がジャマに
軽蔑
本願寺顕如
一向宗の総帥
雑賀孫市
鉄砲のプロ
信長だけは
許せねえぜ!
怨恨
旧友
羽柴秀吉
中国方面軍団長
上様あっての
わしだぎゃあ
とっても尊敬
徳川家康
唯一無二の同盟者。
子供の頃は織田家で過ごす
拙者だけは
信長殿の盟友にござる
終生変わらぬ同盟
お互いを思いやるのだが……
天下布武のためには、
迷いなど無意味
天下へ邁進する覇王
織田信長
夫婦

柴田勝家（しばた かついえ）（?～一五八三）

織田家の後継争いで秀吉に敗れた猛将

織田家四天王の一人で、権六とも呼ばれていた。柴田家は織田家中でも名門の家柄だった。そのため「うつけ」と呼ばれていた信長に一時背いていたが、帰参後は織田家の主力として奮闘を続けていた。

勝家は家中随一の猛将である。信長が足利義昭と反目して各地の敵対勢力に攻められた際、近江で敵軍に囲まれてしまう。すると勝家は城内にあった飲料用の瓶をすべて割って籠城戦を不可能にし、配下の将兵に覚悟の出陣をさせたのである。以後勝家は「瓶割り柴田」と呼ばれ、武勇を賞讃されたのである。

勝家は本能寺の変の頃、北陸方面の軍団長として上杉家と対戦しており、光秀の討伐は秀吉によって先を越されてしまう。このため後継争いでは一歩立ちおくれてしまい、翌一五八三年の清州会議では秀吉に主導権を握られてしまう。ところでこの会議のとき、浅井長政の未亡人だったお市は、勝家の後添いを希望している。秀吉もお市に惚れていただけに、恋では秀吉に勝利したのである。

しかし翌年には賤ヶ岳の戦いに敗れ、秀吉に北ノ庄城を包囲されると、落城時にお市とともに自害するのであった。

佐久間盛政（さくま もりまさ）（一五五三～一五八三）

勝家の恩を思い、秀吉の勧誘をこばむ

佐久間信盛の甥で、「鬼玄蕃」の異名を持つ猛将。信盛が信長によって追放されると、母方の叔父である柴田勝家に仕え、加賀一国を任された。

賤ヶ岳の戦いで、初戦で豊臣軍の将・中川清秀への奇襲が成功する。しかし味方が追いつけずに孤立し、賤ヶ岳敗戦の要因ともなってしまった。秀吉は盛政の武勇を惜しんで仕えるよう勧めるが、叔父・勝家への恩義に報いるため、これを拒否して処刑されることを選んだ。

佐久間信盛（さくま のぶもり）（?～一五八二）

見せしめによって追放された筆頭家老

織田家中でも名門の出身で、信長の父・信秀の代から仕えていた。信秀死後の家督争いで信長を支持したため、以後は織田家の筆頭家老となった。

しかし三方ヶ原の戦いで徳川家への援軍に失敗し、さらに石山本願寺での攻略で将兵に多大な被害を出すなどの失敗が続き、信長の怒りを買って高野山に追放されてしまう。これは信長が家柄よりも実績を重視すると家臣に示すための、見せしめの追放でもあった。

前田利家（まえだ としいえ）（一五三八～一五九九）

秀吉との友情にこたえ豊臣家の重鎮となる

信長が「うつけ」と呼ばれていた頃から仕えており、信長の寵愛も受けていたが、信長が重用していた茶坊主を切り捨て一時出奔していている。このとき帰参に尽力したのが柴田勝家で、以後利家は勝家を父同様に思い、与力として勝家の北陸方面攻略に貢献した。一方、秀吉とは若い頃から同じ長屋で暮らしたこともある旧友であった。

しかし信長死後、この両名が争うようになり、利家は大いに苦悩する。賤ヶ岳の戦いでもその去就は定まらず、ついにどちらにも兵を動かすことはできなかった。恩人・勝家は利家の苦衷を察し、これを責めることもしなかった。一方秀吉も利家の友情を大いに喜び、豊臣政権下では重用され、家臣・大名たちから一目置かれる重鎮となった。

秀吉死後、利家は権勢が家康に移ることを懸念するが、利家自身も病に冒されていた。そこで利家は自分のもとへ見舞いに来た家康と刺しちがえようと試みる。しかし用心深さにまさる家康によってこの計画は失敗に終わった。彼の死後、豊臣家の家臣団はおさえが利かず、加藤清正ら尾張出身の武断派と石田三成との対立が深まり、政権崩潰が加速されるのであった。

佐々成政（さっさ なりまさ）（一五三九～一五八八）

秀吉に抵抗し続けた信長の直臣

信長直属である黄布衣衆の出身で、織田家が北陸に進出した際、柴田勝家の与力となり、のちに越中一国を与えられた。

信長直属の出身という誇りのためか、信長死後は秀吉には柴田勝家と結んで抵抗した。さらに小牧・長久手の戦いでも家康と結ぶが、ついに抵抗しきれず秀吉の傘下にくだる。のち肥後（熊本）を与えられるが、一揆が発生し責任を問われ切腹した。これは秀吉がわざと領内不安定な肥後を与えたためともいう。

滝川一益（たきがわ かずます）（一五二五～一五八六）

すべてが信長の死とともに水の泡に

信長が自ら登用した家臣で、甲賀の忍びの出身ともいう。秀吉同様、実力によって信長に出世を重ねた。多才な武将で、木津川口の戦いでは専門外でありながら、九鬼嘉隆とともに鉄甲船の造船もこなしている。

武田家滅亡後、関東管領に任命され北関東を支配したが、信長死後、北条氏政に攻められ北関東を追われてしまう。清州会議では発言権を失い柴田勝家と結ぶが、勝家死後は秀吉にくだり、失意の晩年を送った。

丹羽長秀（一五三五〜一五八五）

秀吉に協力したものの晩年に後悔する

信長に早くから仕えた重臣で、織田家四天王の一人。美濃斎藤家の攻略や長篠の戦いなど、数多くの合戦で活躍し、席次も柴田勝家に次ぐものだった。しかし彼が本領を発揮したのは、軍事面よりも内政や外交であった。特に信長が新たな拠点として求めた安土城の建立を担当し、安土城の完成度の高さにその手腕は高く評価された。

本能寺の変の際、長秀は信長の三男・信孝や池田恒興とともに四国攻略のため摂津にいた。彼らの軍団は光秀に対して一番近くにあり、もっとも仇討ちの機会があるのだが、現地では誰が敵か味方かわからず混乱して、身動きがとれなかった。そこへ秀吉が中国地方から大返しをしてきたため、長秀らは秀吉指揮のもと、山崎の戦いで勝利するのであった。

このため、翌年清洲で行われた信長の後継会議でも、秀吉と組むことになり、柴田勝家・滝川一益らと対抗することになった。賤ヶ岳の戦いののち、長秀は越前一国と加賀（石川）の一部を与えられるが、次第に権力を持ってくる秀吉に対し後悔の念が強くなる。晩年、病身の長秀は、信長に対して不忠をわびつつ切腹したという。

森可成（一五二三〜一五七〇）

早くから信長仕えていた美濃の猛将

美濃の出身で蘭丸の父。土岐家に仕えていたが、美濃の動乱を避けて織田家に仕えた。外様ながら信長が家督を継いだときからの旧臣で、桶狭間でも活躍した。斎藤家滅亡後は美濃出身の家臣団の筆頭となった。

石山本願寺を攻略中、背後から浅井・朝倉家が挙兵したため、近江坂本城において両軍と何度も合戦におよび奮戦の末討死した。信長も可成の働きに感銘し、長可や蘭丸ら息子たちを養育・重用している。

森長可（一五五八〜一五八四）

勇猛だが、父や弟同様に悲運に見舞われる

可成の次男。父と兄の可隆が近江で戦死したため、信長の庇護のもと家督を継いだ。父同様に勇猛な武将で、若年ながら武田家攻略戦などで活躍し、「鬼武蔵」の異名を持った。

信長死後は秀吉の配下となり、小牧長久手の戦いでは三河本国を奇襲する部隊に属した。しかし事前に察知した徳川軍に急襲され戦死した。可成の息子は六人いたが、蘭丸ら三人が信長とともに戦死したため、五人までが悲運の死をとげている。

筒井順慶（つつい じゅんけい）（一五四九〜一五八四）

去就に迷って、事実無根の汚名を残す

大和（奈良）の筒井家の当主。幼少の頃に父が死亡し、一時松永久秀によって所領を追われていた。のち信長に仕え所領を回復したが、このとき信長に取りなしたのが明智光秀だった。

本能寺の変後、順慶は光秀から協力の要請を受けたが、判断に迷い、本国からまったく動けなかった。これが後世「洞ヶ峠の日和見」という誤報となって残ってしまう。しかし順慶自身は大和の寺社に信望があり、秀吉も無条件で彼を迎えている。

池田恒興（いけだ つねおき）（一五三六〜一五八四）

信長の乳兄弟としての意地で死を急ぐ

信長とは乳兄弟で「うつけ」と呼ばれた頃から仕えていた。本能寺の変の際は、摂津で信長の三男・信孝とともに四国攻めの準備中だったが、結局秀吉の軍勢と合流して山崎の戦いにのぞむことになった。

以後恒興は秀吉の傘下に組みこまれてしまったが、このことで内心鬱屈してしまう。小牧長久手の戦いの際、恒興は無謀を承知で家康の本拠・三河の奇襲を主張して強行し、死にいそぐかのように戦死する。

堀秀政（ほり ひでまさ）（一五五三〜一五九〇）

蘭丸と信長の寵愛を争った名人久太郎

幼少時から信長の小姓をつとめた。合戦だけでなく内政や外交にもすぐれた手腕を発揮したため「名人久太郎」と呼ばれた。

信長第一の側近だったが、やがて森蘭丸が寵愛されるようになると、側近よりも戦場での働きが多くなってしまう。そこで織田家中でも出世頭である秀吉の与力となり、秀吉に重用されるようになる。のち山崎や賤ヶ岳の戦いでも、名人ぶりを発揮したが、小田原攻めの陣中で病死し、秀吉を悲嘆させている。

山内一豊（やまのうち かずとよ）（一五四六〜一六〇五）

妻・千代の内助の功と軍議の一言で国持ち大名に

信長、秀吉に仕え、遠江掛川に6万石を与えられた。

関ヶ原の戦い前の軍議で、「家康殿にお味方し、掛川城と兵糧のすべてをさしだしましょう」と発言した。これがきっかけで、去就に迷っていた武将たちが家康につくきっかけとなった。戦後に土佐一国を与えられる。

夫人の千代には、一五八一年の馬揃えのパレードのときに、小身の夫が目立つように、名馬購入にへそくりを用立てたという逸話が残っている。

細川藤孝（一五三四〜一六一〇）

世渡りもたくみな大文化人

足利将軍家の重臣。実父は幕府の中堅官僚・三淵能員だが、十二代将軍・足利義晴の落胤という説もある。名門・細川家の養子となり十三代将軍・義輝の補佐を務めていたが、義輝が討死すると、義輝の弟・義昭を奉じて織田信長を頼った。藤孝は政務にすぐれ、また文化人としても著名で、禁中にも親交があった。信長も有能な人材として重用するようになった。

しかし信長と義昭との間に対立が生じると、藤孝は旧主・義昭を見かぎり、信長を選ぶ。また明智光秀とは、長男・忠興が光秀の娘・ガラシャと婚姻関係にあるにもかかわらず、本能寺の変の際は中立を保ち、秀吉に許され息子・忠興ともども重用されつづけたのである。

関ヶ原では、忠興が東軍の主力だったため、藤孝は居城の田辺城でわずかな城兵とともに留守を守っていた。そこへ西軍の主力の一部が来襲し、籠城戦となってしまう。しかし藤孝はわずかな兵で籠城を続け、最後は藤孝の文才を惜しんだ朝廷が勅使をよこしたので、西軍も停戦せざるを得なかった。敵戦力の一部を引きつけ、文学の力で落城をまぬがれられたのは、藤孝ならではの才覚である。

斎藤利三（一五三四〜一五八二）

光秀の無謀を諌めた春日局の父

明智光秀の家老。美濃斎藤家の一族で、明智光秀の甥ともいう。娘は徳川三代将軍・家光の乳母・春日局である。若い頃は稲葉一鉄の家臣だったが、のちに光秀に仕えた。本能寺の変の際は、計画が無謀であるとして強く反対したが、光秀の決心は変わらず、やむを得ず挙兵に参加した。

山崎の戦いで明智軍の主力として、数にまさる秀吉軍を相手に奮闘したが、最後は捕らえられて処刑されてしまう。

明智秀満（?〜一五八二）

本能寺で先陣をきった光秀の娘婿

明智光秀の重臣で、一族という説もある。元の姓は三宅だったが、荒木村重の息子と離縁になった光秀の長女を娶り、明智姓を名のった。

以後光秀の信頼する重臣の一人となり、本能寺の変では先陣をつとめた。山崎の合戦では安土城を守備するが、光秀が敗死すると坂本城に戻り光秀の妻子とともに自刃した。その際、信長や光秀らが所持していた名品を秀吉軍に明けわたしたため、秀吉を感銘させたという。

内助の功の実際は？

戦国乱世をたくましく生き抜いていったのは男性だけではない。女性もまた、武将となった夫や子を支えて、活躍したという話が多数現在に伝わっているのだ。

名家の妻には個性のない人が多い

戦国時代は男の時代ではなく、女性たちもその夫を支えてかなり活躍していたのだ、という説が最近では主流となっている。その結果、武将の妻を主人公にした小説やドラマなどがヒットするようにまでなった。しかし、すべての武将の妻が、みな同様に夫を支えていたのか、というとそうでもない。冷静に史実を見ていけば、武将の妻とはいっても戦争とは関係せず、ひっそりと暮らし、死んでいったものの方が多数派である。

たとえば信長の正妻であった帰蝶（濃姫）だが、この人は信長が美濃を支配したあたりから消息不明になる。信忠などを産んだ生駒氏は、やはり早くに病没してしまっているので、ことに信長に関しては、「内助の功」を発揮する妻は存在しなかった。武田信玄の妻三条殿も名前以外は伝わっていない存在であり、上杉謙信に至っては生涯独身で妻そのものが存在しなかった。基本的に、もともとの大名の妻というのは、存在感が希薄である。

成り上がりに多い「糟糠の妻」

産まれたときから大名クラスの妻や娘の場合、立花道雪の娘誾千代などの例外を除けば、ほとんど「内助の功」を発揮していない。しかし、部将以下のクラスの家に生まれた娘の場合、夫を助けてさまざまな活躍を示す例が多い。秀吉の妻・ねねや山内一豊の妻・千代、前田利家の妻・まつなどである。

一般的な武士の妻や娘の場合、城に籠って戦う際には、兵士たちへの炊き出しや武器・服のつくろいなどの仕事をしており、「内助の功」を発揮するチャンスが出てきたと思われる。なかには、夫の出世を助けるため、夫が取ってきた敵将の首に化粧を施し、身分が高い武士のように見せて手柄を大きくする手伝いをした、という話もある。

織田家は小大名から成り上がっていった家であり、一般的な大名よりはかなり下の階層出身の夫婦が多い。このため「内助の功」を発揮した妻もかなりいる。

その筆頭は秀吉の妻・ねねだろう。秀吉が長浜城主になった頃、女漁りを始め、困ったねねは信長に訴えている。これに対し、信長は「お前は最近非常にきれいになった。その美人の女房をないがしろにして他の女に走るあの禿ネズミ（秀吉のこと）は許しがたい」という手紙を送っている。ねねは主君の信長さえもが一目置き、わざわざ手紙を書いてなだめるほどの存在だったのだ。

猛妻の家・徳川家

織田家には「内助の功」を発揮した妻が多いのだが、徳川家にはそうした妻は少ない。しかし、他の大名家のように存在感が薄いのではなく、「夫を尻に敷く」という形で存在感をアピールしている。

徳川家の場合、家康の妻・築山殿、嫡男信康の妻・五徳（信長の娘）、二代将軍となった秀忠の妻・お江与（淀殿の妹）など、揃いも揃ってみな「猛妻」であった。築山殿は、密かに夫の子（後の結城秀康）を身ごもった侍女をリンチにかけているし、お江与は秀忠に対し、他の女性に触れることを許さなかったのだ。

長政とお市をめぐる人々

一五六七年にお市と長政の結婚により、北方の安全を確保した信長は、一五六八年に京にのぼり、足利義昭を将軍位に就けた。しかし浅井と織田の新興大名同士の蜜月は長く続かなかった。

一五七〇年春に、信長は長政に無断で朝倉領へ進攻した。朝倉と織田は、もとから仲が悪かった。長政は信長と同盟するときに、もし織田が朝倉と戦うことになったら、長政に一言ことわる約束があった。この約束を破った信長に対し、長政はすぐに挙兵した。

両軍は姉川で激突する。長政はこの戦いで敗れるが、その後は、小谷城を拠点にして、織田の大軍を前に4年間も激しく戦うことになった。一方、

⟷ 敵対
＝ 友好
…… ライバル
← 感情

浅井長政

浅井同盟者

朝倉義景

越前の名家で長政の祖父の時代の浅井家独立のときには力を貸した。朝倉にとって浅井は属国のような存在である

本願寺顕如

一向宗の総帥で、各地で門徒を蜂起させる

斎藤義龍

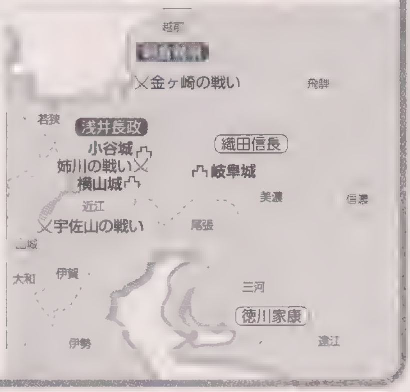
美濃の大名で濃姫の甥。信長に敗れて流亡、朝倉家に身を寄せる

六角義貞

南近江の守護。信長に敗れて流亡、失地回復を狙う

足利義昭

信長の力で将軍に就くが、信長に利用されたことに気づき、密かに浅井、朝倉、武田信玄、一向宗を扇動して反信長包囲網をつくった策士



石田三成

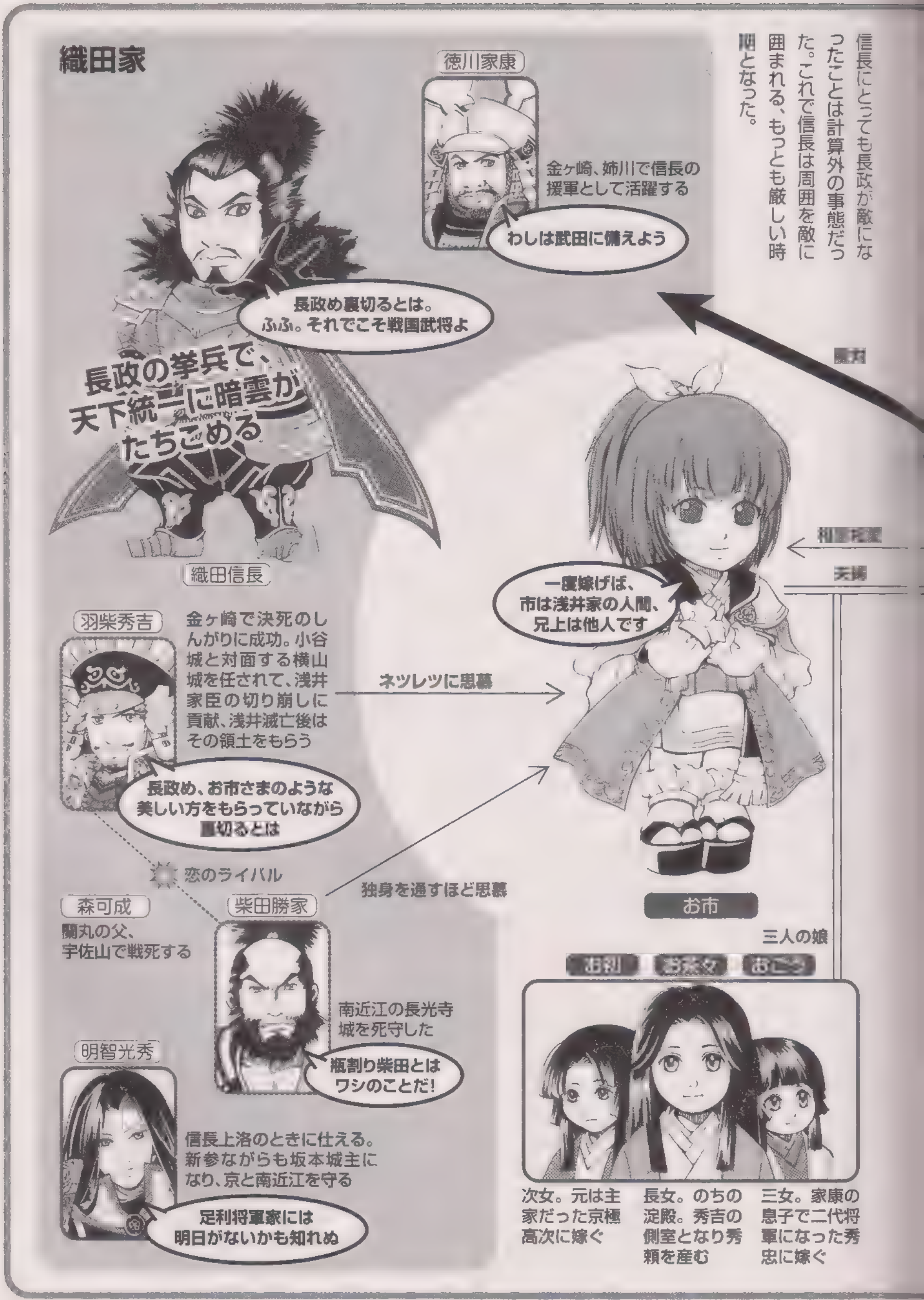
浅井家領内石田村の人で秀吉の小姓に

浅井家の有力家臣

磯野員昌 佐和山城主で姉川で先陣をきった。織田家に投降する

遠藤直経 剛勇でならした猛者、姉川で戦死

信長にとっても長政が敵になったことは計算外の事態だった。これで信長は周囲を敵に囲まれる、もっとも厳しい時期となった。



朝倉義景（あさくら よしかげ）（一五三三～一五七三）

優柔不断さが目立った老大国の大名

越前（福井）の大名・朝倉家の当主。若い頃の義景は一向一揆などと戦って武名をあげたが、補佐役の教景が死んでからは次第に一乗谷の館にひきこもり、遊芸にふけるようになった。

京都で十三代将軍義輝が暗殺されたあと、明智光秀・細川藤孝などの幕臣が将軍の弟（後の義昭）をつれて義景を頼った。しかし、義景は彼らが熱心に誘っても上洛を決意せず、失望した義昭たちは織田家を頼って尾張に去っていった。

その後、浅井家とともに織田家と対立し、浅井・朝倉連合軍は、織田・徳川連合軍と姉川で激突する。戦いははじめ浅井・朝倉方が優勢だったが、徳川家康の武将・榊原康政が義景軍を側面攻撃したため敗れた。

また、武田信玄が上洛しようとした際は、信玄と同盟して織田軍を近江に釘づけにする役を果たすはずだったが、突如撤退して同盟軍の戦略を台なしにした。これにより九死に一生を得た信長は、一五七三年に小谷城包囲する。援軍に来た義景が怖じ気づいて退却する機会を逃さずそのまま義景を追撃し、本拠一乗谷城を攻めた。義景は一端は城を脱出したが、一族の裏切りにあって、やむなく自害した。

磯野員昌（いその かずまさ）（？～一五七八）

信長に降伏した浅井の先鋒大将

佐和山城主。六角氏との戦いで武名をあげ、浅井家の先鋒大将に任命された。姉川の戦いでは、織田陣に深く突入し、信長の本陣まであと少しの所まで迫った。この時の猛突撃は、「姉川の十一段崩し」と呼ばれるようになる。

その後、秀吉の放った流言により、主君との関係が悪化した員昌は、織田家に降伏する。織田家では最初重用されたが、やがてささいなことから信長の怒りを買い、高野山に追放された。

遠藤直経（えんどう なおつね）（？～一五七〇）

信長の首をつけ狙った猛将

浅井家中でもっとも織田家に対して強硬な態度を取った家臣。織田・浅井家が同盟していた時代にも、すきを見て信長を討つように長政に進言していた。ただし後に、朝倉家と織田家のどちらにつくかで意見が割れた時には、勝ち目のある織田家を選ぶように主張した。

姉川の戦いでは、味方が不利になると信長の首を求めて敵陣深く侵入、本陣までわずかのところまで迫ったが、竹中半兵衛の弟久作に討たれた。

京極高次（一五六三〜一六〇九）

妹と妻の力によって出世した没落した名家

京極家は、北近江守護の名門だが、浅井家の台頭で没落していた。高次は浅井長政の甥にあたり、小谷城で生まれた。成長してからは、織田家に人質になり、浅井家滅亡後も織田家の家臣状態で生き延びる。本能寺の変では明智方についていたが、秀吉に美人の妹・竜子を差し出し、滅亡を免れ、後には淀殿のお初を妻にする。

関ヶ原の戦いでは、東軍につき、西軍を大津城に迎え撃ち、落城したが、戦功を認められた。

本願寺顕如（一五四三〜一五九二）

門徒の大軍を率いて信長と戦った僧侶

本願寺の門主。妻を通じて武田信玄とは義兄弟の関係になる。

一五七〇年頃から織田家と対立するようになり、足利義昭の指導した信長包囲網に参加する。自らは石山本願寺に籠城し、雑賀衆などの助力を得て、いくども織田軍を撃退し、信長を苦しめた。

しかし、鉄甲船により毛利家からの物資輸送ルートを断たれた後はしだいに力を失い、一五八〇年に信長と和睦した。

六角義賢（一五二一〜一五九八）

時代の流れに見放された名家の当主

南近江の守護大名六角定頼の子。承禎。

野良田の戦いで浅井長政に敗れ、お家騒動で家老後藤賢豊を暗殺し、家臣の信用を失ってしまう。さらに足利義昭が庇護を求めにきたが無視する。その足利義昭をかついで織田信長が上洛のため、六角領に侵攻すると、家臣たちは次々と降伏・逃亡し、やむなく城を捨てて逃亡する。

その後は、ゲリラ戦に転じて旧領回復をはかるが、果たせなかった。

斎藤龍興（一五四八〜一五七三）

死ぬまで信長と戦い続けた男

美濃斎藤家の最後の当主。信長によって稲葉山城を追われたあと、伊勢長島で一揆に合流して信長と戦い続けた。その後は三好三人衆と組んで畿内で信長と戦い、さらに越前の朝倉氏のもとに逃亡してなおも信長と戦い続けた。稲葉山城にいた時期は暴君だと言われていたが、城を追われてからは執念深く信長を狙って戦い続け、歴戦の勇者に変貌していったようだ。最後は、越前の刀禰坂で信長軍と決戦し、壮絶な戦死を遂げた。

戦国のグルメ
作画：美鈴秋
みなさんこんにちは
お料理戦国の時間です♪
今日は合戦時の非常食のレシピを
ゲストを交えてご紹介したいと思います
それでは干飯と芋がら縄
なんで私が
焼きおにぎりを作りましょう
まずは干飯から…
炊いたご飯をミズで洗いねばり気をとって

干して完成！
なにぃ?!
水やお湯ですぐもどせるからとっても重宝よ
お湯でもどせばご飯に逆戻り！
芋がら縄はどうするのだ?
里芋の茎を長～く編み
味噌で煮しめて干す!!
ば
ん
それだけよ♪
えぇっ
なんと手軽な
そのままでも食べられるけど
ほー!っ
ちぎって煮れば味噌汁にもなるの♪
さっどんどんいってみましょー
次は焼きおにぎりでーす

三成！頑張って!!
頑張る!?
作り方は…
玄米おにぎりに赤みそをまんべんなくまぶして
それは具体的にどういうことですか？
んもう！生きにくい子だねえ
網で両面をこんがり焼く!!
ぱた ぱた
はいっ！よくできました♪
……
では最後に特別に!!完全無欠のスタミナ食
兵糧丸の作り方を教えちゃいます

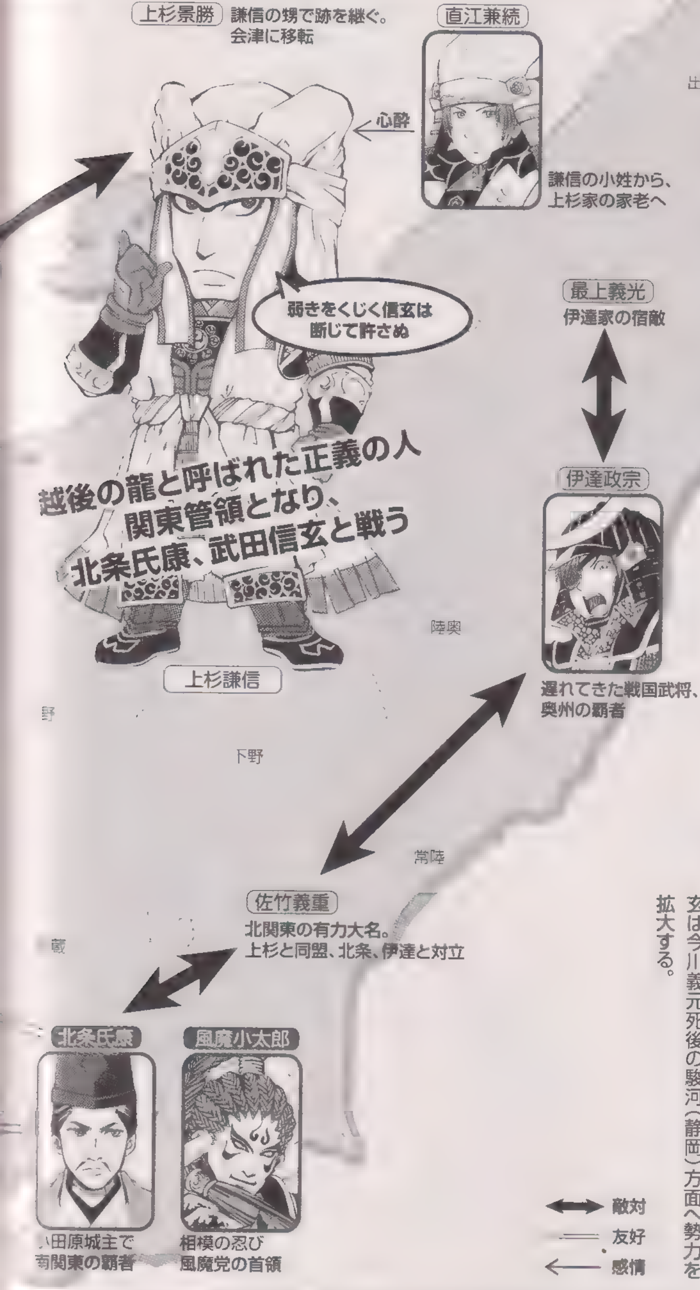
料理はこちら
はちみつ
上新粉
にごり酒
ハチミツ 1
すりごま 2
上新粉
そば粉
きな粉 各4
にごり酒（適量）
こちらもボールに入れて十分に練り
直径5cmくらいの団子状にして
こね
こね
こね
蒸し器で10分
しゅぽー
無双!!
じゃなくて蒸そう…
……
き…きな粉をまぶして出来上がりです♪
じゃんっ
どれも簡単なのでみんなも試してみてね♪

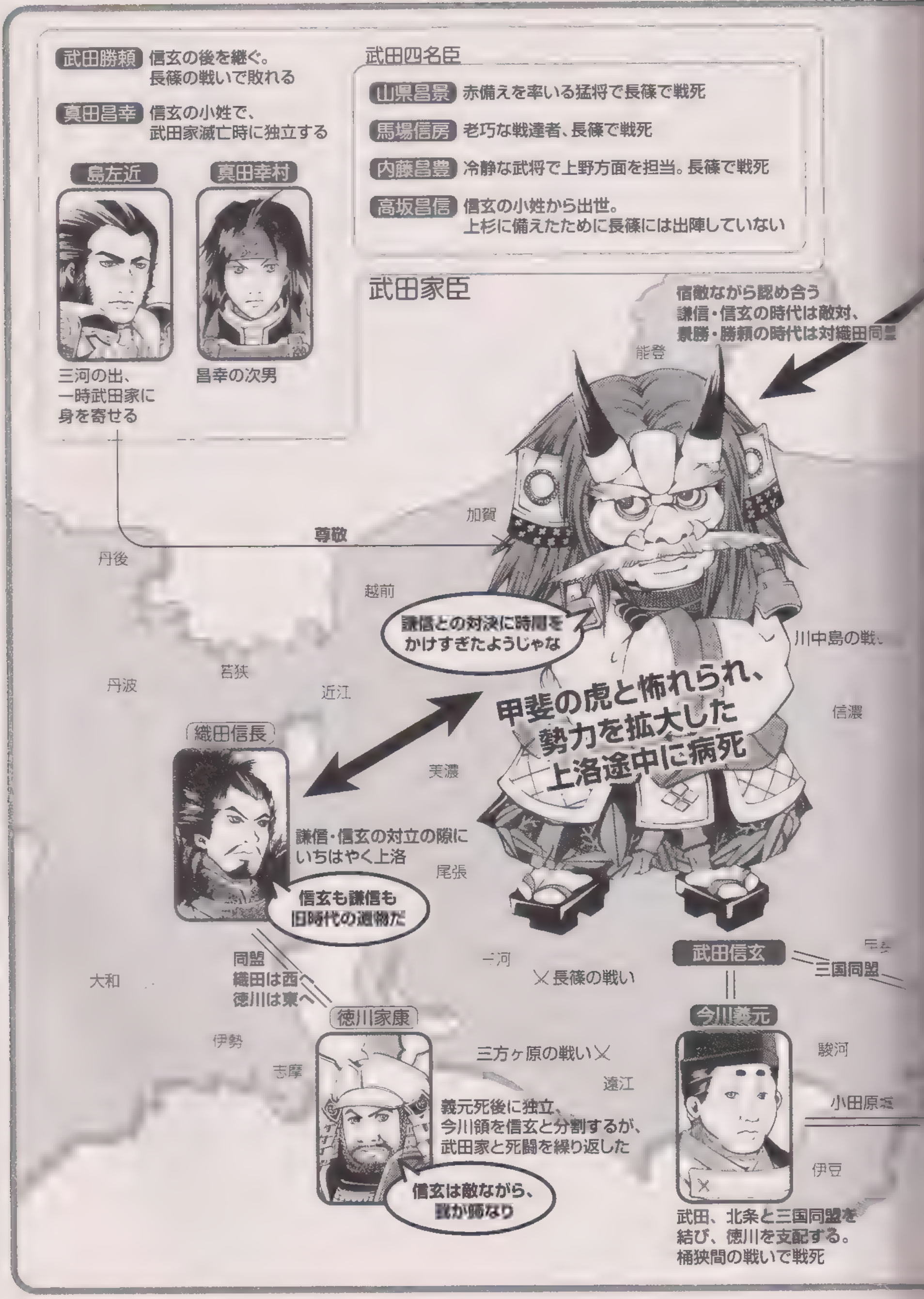
謙信と信玄をめぐる人々

甲斐（山梨）の武田信玄、越後（新潟）の上杉謙信は信濃（長野）の川中島で激突した。

一五六一年、一騎討ちとなった川中島での対決は戦国史のハイライトだった。

その後、二人は対立関係を続けながらも衝突を避け、謙信は関東と越中（富山）へ出兵し、信玄は今川義元死後の駿河（静岡）方面へ勢力を拡大する。




武田勝頼 信玄の後を継ぐ。長篠の戦いで敗れる
真田昌幸 信玄の小姓で、武田家滅亡時に独立する
武田四名臣
山県昌景 赤備えを率いる猛将で長篠で戦死
馬場信房 老巧な戦達者、長篠で戦死
内藤昌豊 冷静な武将で上野方面を担当。長篠で戦死
高坂昌信 信玄の小姓から出世。上杉に備えたために長篠には出陣していない
島左近
三河の出、一時武田家に身を寄せる
真田幸村
昌幸の次男
武田家臣
宿敵ながら認め合う
謙信・信玄の時代は敵対、
能登
加賀
尊敬
丹後
越前
謙信との対決に時間をかけすぎたようじゃな
丹波
若狭
近江
信濃
甲斐の虎と怖れられ、勢力を拡大した上洛途中に病死
織田信長
美濃
謙信・信玄の対立の隙にいちはやく上洛
尾張
信玄も謙信も旧時代の遺物だ
同盟
織田は西へ
徳川は東へ
大和
長篠の戦い
武田信玄
三国同盟
今川義元
徳川家康
伊勢
志摩
三方ヶ原の戦い
遠江
駿河
伊豆
義元死後に独立、今川領を信玄と分割するが、武田家と死闘を繰り返した
信玄は敵ながら、我が師なり
武田、北条と三国同盟を結び、徳川を支配する。桶狭間の戦いで戦死

上杉景勝（うえすぎかげかつ）（一五五五～一六二三）

謙信譲りの風貌と気風を持った義将

謙信の甥。母が謙信の姉で、父は越後上杉家の重鎮・長尾政景である。父・政景が不慮の事故で早世し、謙信に実子がなかったため、養子となった。謙信死後、同じく養子だった北条氏政の弟・景虎との家督争いを制し、上杉家の当主となっている。

景勝は養父・謙信を思わせるような風貌や気質を持っていた。そばに仕える家臣たちも、するどい形相のまま一言もしゃべらない景勝につねに緊張していたという。彼の考えを容易に汲めるのは直江兼続ただ一人だった。

景勝は見た目だけではなく、義に厚い性格も謙信ゆずりだった。そのため関ヶ原では豊臣恩顧の立場を重んじて西軍に属した。上杉家は北方が主戦場となったが、この戦いでも最上・伊達などを圧倒する勢いだった。しかし関ヶ原の本戦場では東軍が圧勝し、景勝も徳川家に屈しなければならなかった。

大坂の陣ではもはや時勢も定まり、上杉家も徳川方として参戦せざるを得なかった。しかし景勝の威厳は衰えておらず、彼の采配ひと振りで、配下の軍勢がみごとに行動した。景勝の采配ぶりには、家康も大いに感銘を受けたという。

柿崎景家（かきざきかげいえ）（一五一三～一五七五）

留守居役もこなす家中随一の猛将

越後上杉家の重臣で、謙信の父・長尾為景の代から仕えた。家中随一の猛将として、川中島の戦いでは先鋒をつとめて武田軍を圧倒し、信玄の本陣にも肉迫している。また武勇だけではなく春日山城の留守居役や、北条氏康との和睦交渉などにも活躍した有能な武将だった。

謙信が信長と争った際、信長側の謀略によって謙信に疑心をいだかれ誅殺されたといわれていたが、謙信の信頼も厚く、今では病死説が有力になっている。

斎藤朝信（さいとうとものぶ）（一五二七～一五九一）

幅広い活躍で謙信を支えた越後の鍾馗

謙信の重臣で、その風貌から「越後の鍾馗」と呼ばれていた。平素は奉行として内政などを担当していたが、戦場でも活躍した有能な武将だった。川中島の戦いにも出陣し、越中の一向一揆鎮圧にも大いに戦果をあげている。その功績から、謙信が関東管領に就任する際は、柿崎景家とともに就任式の太刀持ちを務めたという。

謙信死後に家督争いが生じた際は、上杉景勝を支持し、変わらず重宝された。

武田勝頼（たけだかつより）（一五四六～一五八二）

領土を拡大するものの家臣団の対立で滅亡

信玄の四男。母は信玄が滅ぼした諏訪頼重の娘だったが、信玄の寵愛は深かった。信玄の長男・義信が信玄と対立して自決すると、信玄によって武田家の後継者となった。しかし家中では元敵将の子という反発も強く、信玄も勝頼の子・信勝を後継として、勝頼はその後見役という策をうつことになる。

このような逆境の中、勝頼は父・信玄を超えるべく勢力の拡大に努めた。実際、武田家の最大領域は勝頼の時代である。しかしその一方で勝頼の側近と、信玄の旧臣との溝は広がるばかりであった。

長篠の戦いでも、戦前から強気の戦略を主張する勝頼側と、作戦を無謀とする山県昌景・馬場信房ら信玄時代の旧臣との意見の衝突があった。結局、旧臣の意見を聞きいれなかったため長篠で大敗北を喫し、信玄時代の重臣を失ってしまう。

長篠の敗戦は武田家の総戦力からみれば、滅亡に直結しないが、これをきっかけに内部崩壊が強まってくる。織田・徳川方の調略によって、親族・重臣らが次々と裏切っていくのである。天目山の戦いもまた、重臣の裏切りにあい、追いつめられて自害した。

仁科盛信（にしなもりのぶ）（一五五七～一五八二）

織田家の猛攻に最後まで抵抗した若武者

信玄の五男で、信濃の名門である仁科姓を名のった。信玄死後は、親族の中でも武田勝頼のもっとも信頼する存在だった。

信長が本格的に武田家攻略を始めると、おもだった親族・重臣たちも次々と降伏するか逃亡するありさまだった。

しかし信濃高遠城を守る盛信だけは、信長軍の降伏勧告に応じず最後まで抵抗していた。落城時、盛信は自刃するが、盛信の奮闘ぶりは敵である織田方からも称賛の声が上がった。

山本勘助（やまもとかんすけ）（?～一五六一）

死をもって作戦失敗の責任を取った老軍師

信玄の参謀。三河出身の浪人だったが、信玄が広く人材を募っていることを知り、板垣信方の推挙を得て信玄に仕えた。ほどなくして信玄の信任を得ることとなり軍師となっている。

川中島の戦いでは上杉軍に夜襲をしかけようとするが、かえって謙信にこれを察知されてしまい、上杉軍の先制を受けることとなった。上杉軍の猛攻に信玄の本陣も危うくなったことに勘助は責任を感じ、敵陣に突入して奮戦、戦死した。

山県昌景（やまがた まさかげ）（一五二九～一五七五）

兄弟の情よりも忠義を重んじた「赤備え」

武田四名臣の一人。兄・飯富虎昌は信玄の嫡男・義信の傅役だったが、義信が信玄と不仲になった際、謀叛を企てようとした。これを知った昌景は、信玄に通報し、謀叛は失敗する。

信玄は昌景の忠節に感銘し、甲斐の名門である山県姓を名のらせ、兄・虎昌が率いていた武田家最強の騎馬軍団「赤備え」を率いることを許した。昌景も信玄の重用にこたえ、三方ヶ原などで活躍し、長篠の戦いでも戦死するまで奮戦した。

高坂昌信（こうさか まさのぶ）（一五二七～一五七八）

信玄に寵愛された、武田家の出世頭

武田四名臣の一人。農民の出身だったが、美貌と才能によって信玄の小姓に抜擢された。進言の寵愛は深かったが、昌信もそれにおごらず信濃海津城主となり、武田家の出世頭となった。

川中島の戦いでは山本勘助の進言に従い、上杉軍の本陣を奇襲しようとしたが空振りに終わっている。また長篠の戦いでは、自軍が危機であることを知ると、信濃から援軍を率いて出陣するが間に合わず、敗走してきた主君・勝頼を迎えたという。

内藤昌豊（ないとう まさとよ）（一五二三～一五七五）

功名を誇らない武田家の副将

武田四名臣の一人。信玄の父・信虎によって家族が誅殺されたため、出奔して北条家などを頼った。信玄の代になると、帰参が許されている。

戦場での派手な功名よりも、政略・外交などを重んじたため、信玄の信頼も厚く、信玄の弟・信繁とともに武田軍の副将を務めた。かつて関東に在住していた実績が買われ、北関東の支配を一任されると同時に、一時疎遠となっていた北条家への使者を務めた。

馬場信房（ばば のぶふさ）（一五一五～一五七五）

武田騎馬軍団の主力となった不死身の鬼武者

武田四名臣の一人。合戦を得意とし、戦場ではまったくの無傷で「不死身の鬼美濃」の異名を持つ。信玄によって重用され、武田家のおもだった戦いにはほとんど参加している。

信玄死後は勝頼の後見となったが、勝頼の側近と対立し、勝頼から遠ざけられてしまう。長篠の戦いの際も、山県昌景とともに出兵に反対したが聞きいれられなかった。長篠で敗戦が決まると、勝頼を逃がしたのち一人敵軍に突入し戦死した。

北条氏康（ほうじょう うじやす）（一五一五〜一五七一）

北条家の最盛期をつくった智謀あふれる当主

北条家三代当主。関東管領・上杉家を滅ぼし武蔵を支配下においた。また居城・小田原城を大城塞として謙信・信玄の攻撃をはね返している。このように氏康は軍事にもすぐれていたが、彼が重んじたのは内政・外交である。氏康が当主となった頃、武田・今川両家とは決して良好ではなかったが、信玄や今川義元とともに三国同盟を結び、背後の安全を確保している。また義元死後、信玄が駿河に侵攻すると、今度は謙信と同盟を結んで信玄と争うなど、柔軟な外交力を持ちあわせている。

彼のバランス感覚を伝えるエピソードとして、長男・氏政との食事の場面がある。当時は戦場での食事が多く、米飯に汁をかけて食べるのはよくあることだった。このとき氏政が飯椀に汁を二回かけたことを見て氏康はとがめている。氏康にしてみれば、めしを食べるのに必要な汁の量の見積もりもできないことを嘆いているのだ。

神経質にすぎる考えかもしれないが、軍事から民政まであらゆることに細かい配慮とバランスをこころがけて隆盛を築いた氏康にとって、我が子・氏政のおおざっぱな汁のかけ方が我慢できなかったのだろう。

今川義元（いまがわ よしもと）（一五一九〜一五六〇）

イメージとかけはなれた勇猛な武将

駿河・遠江・三河を支配していた有力大名。もとは諸子の出で、若い頃は出家させられていた。しかし当時の当主だった兄・氏輝が急死したため、出家していた別の兄・恵探と家督を争い当主の座を勝ちとった。彼は信長によって桶狭間で急死したため、人物を軽く見られがちだが、当主になる時点ですでに修羅場をくぐってきたのである。

義元は当主になると、長年争ってきた武田・北条両家に同盟を提唱している。この甲相駿三国同盟によって、三家はともに背後の不安がなくなり、たがいに勢力拡大している。またお歯黒や蹴鞠など京風文化を取り入れていたことを揶揄されることもあるが、これは畿内地方との交流を盛んにして交易にも効果をもたらそうとするねらいもあったのだ。

桶狭間の戦いでの最後もまた、武将として情けない最後ではなかった。最初に鎗をつけてきた織田方の侍・服部小平太に対し、深傷にもひるまず相手の膝を切りつけてきているし、小平太の助太刀にきて首級をあげた毛利新介の指をかみ切るなど、最後まで戦意が衰えてなかったのだ。義元もまた勇猛な戦国武者だったのである。

旧大友家家臣

立花道雪 「雷の化身」と怖れられた猛将 ＝親子＝ 立花誾千代

友人

高橋紹運 道雪を尊敬した大友の武将で、
年齢の離れた友人でもある。
島津の猛攻の前に岩屋城で玉砕する

親子

立花宗茂 東の本多忠勝と並び称された武勇の人
誾千代の婿になる

夫婦

敵対
友好
感情

九州動乱

戦国九州三強とは、薩摩（鹿児島）の島津義久、豊後（大分）の大友宗麟、肥前（佐賀）の龍造寺隆信を呼ぶ。彼らは、それぞれ対立していたが、中央で織田信長が倒れ豊臣秀吉がその後継として天下統一事業を引き継ぐ頃には、島津がほぼ九州を統一を果たした。抗戦していたのは大友家臣の立花が守る立花城のみ。このときに四国を制圧した豊臣秀吉軍が九州遠征にのりだした。島津は緒戦の戸次川の戦いでこそ、豊臣勢を破るが、戦うのはこれが限界だった。

長門
凸⚔立花城
凸⚔岩屋城の戦い
1586年
○島津対高橋紹運●
筑前
豊前
龍造寺隆信
肥前の熊と呼ばれた新興大名。大友家を破り、一時は北九州の覇者となったが、沖田畷の戦いで、島津勢に敗れて戦死する
肥前
筑後
大友宗麟
豊後の名門。立花道雪・高橋紹運などの名将を配下に耳川の戦いで島津に敗れたあとは衰退していく。最後は豊臣秀吉に助けを求めた。その後、領地召し上げとなる
加藤清正
沖田畷の戦い⚔
1584年
○島津対龍造寺●
豊後
⚔戸次川の戦い
1586年
○島津対豊臣●
肥後
虎退治で有名な秀吉の股肱の武将。島津降伏後、肥後（熊本）の北半分をもらう
家臣
秀吉さまから、九州の抑えを任されました
島津貴久
四兄弟の父で薩摩を平定して、九州制圧の基礎を築いた
島津四兄弟
薩摩
義久
長男。弟の助けを得て九州統一へ。降伏後、隠退する
歳久
三男。四兄弟のなかでは内政向きだが、秀吉に最後まで抗戦し自害する
家久
四男。末子ながら、戦場では兄弟最強だった名将
親子
島津豊久
⚔耳川の戦い
1578年
●大友対島津○
九州最強、鬼島津とはわしのことだ
兄義久の隠退後に家督をつぐ
島津の武の象徴
島津義弘
次男
島津家期待の若武者。家久の子で義弘の影武者をつとめる

島津義久（しまづよしひさ）（一五三三～一六一一）

島津家の危機を何度も乗りきった忍耐の君主

島津貴久の長男で、義弘の兄。剛胆な義弘に対し、忍耐強い性格で、両者の特長がかみあって島津家は九州の大半を支配することができた。しかし秀吉が九州に進出してくると、降伏をいさぎよしとせず、秀吉と相性の良い義弘を前面に出し、自身は隠居してしまう。

しかし関ヶ原で義弘が西軍に属し敗走してくると、徳川家と粘り強い交渉を行い、ついに一辺の領土をも失わず徳川幕府との和睦に成功している。

島津歳久（しまづとしひさ）（一五三七～一五九二）

四兄弟の中で最後まで秀吉に抵抗する

島津貴久の三男で。義久・義弘の弟。智謀をもって義久・義弘の九州攻略に貢献した。九州統一を目前にしながら秀吉が進出してくると、兄弟の中では最後まで抗戦を主張し、降伏に反対している。

そののちも秀吉の出仕命令にもいっさい応じずに所領に引きこもっていた。

しかし朝鮮の役の際、出兵に反対して一揆を起こした島津家臣との関係を責められ、義久もかばいきれず、自害した。

島津家久（しまづいえひさ）（一五四七～一五八七）

降伏後に急死した、島津四兄弟の末弟

島津貴久の四男で、義弘の末弟。いくさ上手で知られ、沖田畷の戦いで龍造寺隆信を敗死させるなどの功績を挙げている。また戸次川の戦いでも豊臣軍に対し猛攻をしかけ、長宗我部信親や十河存保らを戦死させた。

しかし戦局は島津家が不利になり、豊臣秀長と停戦交渉を行うこととなる。しかし会談の翌日に急死してしまい、豊臣側の謀殺という疑念を呼び、義久や歳久の態度をかたくなにさせてしまった。

島津豊久（しまづとよひさ）（一五七〇～一六〇〇）

叔父・義弘の身代わりとなって退却を助ける

島津家久の子で、家久の急死にともない義弘が養育した。朝鮮の役で義弘の実子が戦死したため、以後は実子同様の扱いを受けていた。

関ヶ原の戦いの際も、叔父・義弘に従い上洛する。戦いは東軍の圧勝となり、西軍についた義弘は敵陣に覚悟の突撃をしようとしていたが、豊久の説得により退却を決意する。しかし徳川軍の追撃も厳しく、豊久は義弘をかばい井伊直政勢を足止めするため奮戦、戦死した。

権力者たちに愛された九州の快男児

立花宗茂（たちばなむねしげ）（一五六七〜一六四二）

高橋紹運の長男。若い頃から武勇に秀でていたため、立花道雪が、紹運に懇願して娘・誾千代の婿として迎えた。道雪死後も、実父・紹運とともに衰退した大友家を支えつづけていた。

岩屋城の戦いでは、後方の立花山城を守備していたが、紹運の危機を知ると援軍にかけつけようとした。しかし玉砕覚悟の紹運によって拒絶されてしまう。この紹運の奮戦と宗茂の武将としての器量を気に入った秀吉は、宗茂を大友家から独立させ筑後柳川城の城主としている。

宗茂はこの恩に報いるため、関ヶ原では西軍に属するものの敗戦してしまう。このとき堺から船で敗走することになったが、父・紹運の仇・島津義弘が同船していた。家臣らは仇討ちの好機と勧めるが、宗茂は道義にもとるとしてこれを拒絶している。

敗戦によって柳川城を失った宗茂だが、武将としての器量を高く買っていた家康は、本多忠勝を通じて徳川家に仕官するよう勧誘してきた。宗茂はこれを受け、旗本として大坂の陣で活躍する。そして二代将軍・秀忠によって旧領・柳川城への復帰を果たすのである。関ヶ原で敗将となりながら、旧領を復帰した大名は宗茂だけである。

立花道雪（たちばなどうせつ）（一五一三〜一五八五）

生涯を大友家にささげた忠義の将

大友家の重臣で誾千代の父。もとは戸次鑑連と称したが、主君・大友宗麟の命で名門・立花家の名跡を継いだ。若い頃雷に打たれ歩行が困難になったが、配下の将兵に戦意がないときは、輿に乗ったまま最前線に乗りこみ、将兵を鼓舞した。

主家・大友家が島津や龍造寺の台頭で次第に衰退する中、高橋紹運とともに忠節を守り続けた。その紹運との友情の証として、誾千代に紹運の息子・宗茂を婿に迎えた。

高橋紹運（たかはしじょううん）（一五四八〜一五八六）

玉砕戦術で島津軍を足止めした猛将

立花宗茂の実父で、もとは吉弘鑑種と称した。北九州の名門・高橋家が謀反で滅亡したため、大友宗麟の命で高橋家の名跡を継ぐ。以後、立花道雪とともに衰退した主家を支えつづけた。岩屋城の戦いでは、島津軍五万に対しわずか七百の兵で抵抗を続け、城兵全員が玉砕した。しかしこの抵抗により島津軍の進軍がにぶり、大友家が滅亡する前に、秀吉の援軍を得ることができた。秀吉も紹運の献身を戦功第一と賞讃している。

最強の島津軍団の秘密

戦国で一番強かったと言われる島津軍は、何度も少ない兵力で大軍を打ち破っている。その強さの秘密をさぐってみよう。

薩摩兵の強さ

島津家の強さは、まずは、その所領である薩摩の兵そのものが強かったからである。有名な剣術の示現流は薩摩の東郷重位が開祖で、厳しい修行を重ねることで誰でも最初の一太刀は達人の域に達する。この流派が広まるのは乱世が終わってからのことだが、他の流派に例を見ないほど激しく厳しい稽古を重ねるのは古くから島津武士の伝統だった。

また、剣だけでなく鉄砲を使うことにも優れていた。鉄砲が伝来した種子島は島津家の勢力圏であり、鉄砲の扱いに長けていた。たいていの大名家では鉄砲を「いやしい兵器」とみなし、足軽に持たせたが、島津家では武士にも鉄砲を持たせ、普段から鉄砲の練習をするように命じていた。合理的で因習にとらわれない進取の家風があったのだ。

必殺、釣り野伏せ

合戦での戦い方が巧かったのも島津家が強かった理由の一つで、釣り野伏せと呼ばれる戦法を用いながら強敵に立ち向かった。この戦法は軍勢を三つに分け、最初は一つだけを敵に向かわせる。敵は大軍で押し寄せてくるので後ろに押されてしまうのだが、この間に残る二つの味方が左右に回り込む。そして押されていた中央の軍勢が押し返すことで、三方から敵を包み込んでしまう。包まれた敵は混乱し、ただささえ強い島津武士にはとてもかなわない。

この戦い方は最初に押された兵が押し切られてしまうと陣形を分断されるうえ、敵に悟られないように左右に回り込むのも難しいので危険も多い。だから簡単に真似ができる戦い方ではなかった。

関ヶ原の中央突破

島津勢がいかに強かったかを示す例としては、関ヶ原の敵中突破がよく知られている。負けた西軍に属していた島津義弘は、八〇〇まで減った兵力で圧倒的な東軍に包囲されてしまった。後ろの山は散り散りになって逃げる西軍の兵が埋め尽くしていたので、義弘は前にいる徳川家康の本陣に向けて突き進んだ。なんと、敵の大将の本陣を突き破って逃げようというのだ。このとき島津勢の凄まじい勢いを家康の旗本は食い止めることができず、ついに義弘は包囲の輪から逃れた。そして逃げる島津勢を東軍の井伊直政と松平忠吉が追ってきたとき、島津の捨てカマリが迎え撃った。

カマリとは伏兵のことで、置き捨てにされるのを覚悟したうえで、地面に座り込んで鉄砲を構え、追ってくる敵を待ちかまえて狙撃するのだ。決死の捨てカマリは直政と忠吉を撃ち倒し、二人に重傷を負わせた。こうして追い討ちを食い止めた島津勢は、その後も何度か落ち武者狩りに狙われたものの、これらを撃退して無事に義弘を薩摩に帰国させたのだった。

これほどの強さを見せた島津軍だが、大坂夏の陣での真田幸村の戦いぶりを見て「真田日本一の兵」と、真田勢の強さを称賛している。

島津と真田が直接対決したことはないが、本当に戦ったらどちらが強かったか興味深いところだ。

第三章　秀吉と家康の時代

3rd mission / The After Nobunaga Age

戦国時代MAP

秀吉と家康の時代 1582〜1615

①山崎の戦い（一五八二）
羽柴秀吉が明智光秀を破る。

②賤ヶ岳の戦い（一五八三）
羽柴秀吉が柴田勝家を破り、信長の後継者となる。

③小牧・長久手の戦い（一五八四）
羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康が戦う。

④上田城の戦い（一五八五、一六〇〇）
真田昌幸が上田城で、二度にわたり徳川軍を撃退した。

⑤岩屋城の戦い（一五八六）
島津軍の猛攻で高橋紹運が守る岩屋城は玉砕する。

⑥小田原城の戦い（一五九〇）
豊臣秀吉が北条氏を滅し、全国を統一した。

⑦関ヶ原の戦い（一六〇〇）
徳川家康率いる東軍と石田三成率いる西軍が激突し、徳川家康が勝つ。

⑧長谷堂城の戦い（一六〇〇）
直江兼続率いる上杉軍が、最上領内の長谷堂を攻め、援軍に来た伊達政宗と戦う。

⑨大坂夏の陣（一六一五）
全国の大名を率いる徳川家康の攻撃に大坂城は落ち、豊臣家は滅亡する。

本能寺の変で織田信長が倒れると、天下統一事業は羽柴秀吉（のちに豊臣秀吉）が継ぐ。明智光秀、柴田勝家を破った秀吉は徳川家康と対立し、小牧・長久手で戦う。決着つかないまま両者は和解するが……。

秀吉とねねをめぐる人々

天下布武を目前にした織田信長の横死は、戦国のすべての人の運命を変えた。信長の遺産を受け継いだのは秀吉だったが、織田家中の敵対者と血で血を洗う戦いを繰り広げた。一方、織田家と戦い敗亡間近だった上杉家や毛利家は、温和な秀吉と結び、これを支援した。秀吉は次々と敵対者を倒したが、思いもかけないライバルが出現した。信長の盟友、徳川家康である。

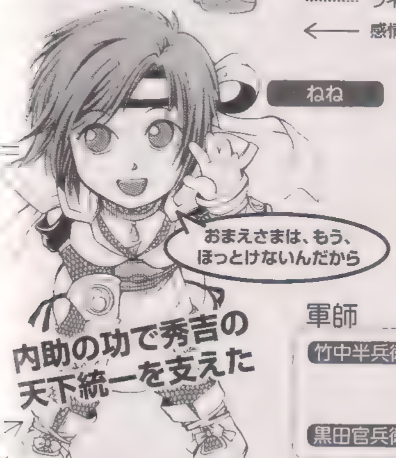
雑賀孫市

秀吉の旧友

親友

↔ 敵対
── 友好
…… ライバル
← 感情

ねね



内助の功で秀吉の天下統一を支えた

子のないねねにとっては
[illegible]が子同然

秀吉の家族

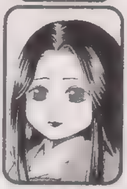
羽柴秀長
秀吉を支えた賢弟

旭姫
末の妹で、小牧長久手の戦い後に家康と結婚!!

羽柴秀頼

唯一の後継ぎ

淀殿



秀吉の側室でお市の長女で秀頼を産む

旧浅井領出身なので姫君として尊ぶ

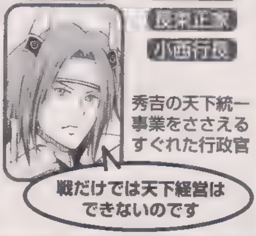
軍師

竹中半兵衛	浅井長政との戦いで活躍するが若くして病死する
黒田官兵衛	秀吉の知恵袋

家臣：文治派

秀吉の傍らで奉行を務める。近江出身者が多い

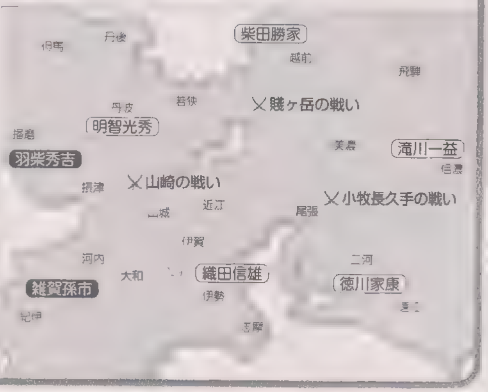
石田三成



増田長盛
長束正家
小西行長

秀吉の天下統一事業をささえるすぐれた行政官

対立



秀吉と戦った人々

徳川家康

織田信雄の要請で挙兵、長久手で秀吉を破る

織田信雄

信長の次男で、小牧長久手の戦いで単独講和

お市

信長死後に勝家に嫁ぐ

柴田勝家

織田家筆頭家老で、信長死後に主導権を争い、賤ヶ岳で決戦する

滝川一益

柴田勝家とともに戦う

明智光秀

本能寺の変のあと、京の入り口にある山崎で戦う

秀吉の親戚縁戚など

- **羽柴秀次** 秀吉の甥、長久手の戦いで敗北
- **小早川秀秋** ねねの甥、小早川家の養子に
- **宇喜多秀家** 備前（岡山）の大名の子で秀吉の養子に

夫婦

織田家の同僚だった武将たち

- **前田利家** 秀吉の親友で、賤ヶ岳の戦いで降伏し、秀吉を支える
- **丹羽長秀** 織田家の家老で秀吉を後押しする
- **池田恒興** 長久手で戦死する
- **森長可** 長久手で戦死する
- **堀秀政** 越後の大名に
- **蒲生氏郷** 会津の大名に

家臣：武功派

戦場の最前線で活躍、ねねのもとで育った者が多い

母のように慕う

加藤清正

秀吉のはとこにあたる勇者

福島正則

秀吉のいとこにあたる猛将

羽柴秀長（はしばひでなが）（一五三九～一五九一）

裏方に徹した、影のMVP

羽柴秀吉の弟。小一郎と呼ばれる。いわゆる「猿面」の兄とは違い、幼少時はふくよかな頬を持つ少年だったという。

織田家家臣となった兄秀吉に誘われて兄の最初の家臣団の一人となって以降、墨俣築城、美濃攻略戦、浅井攻めなどに参戦、しばしば兄が不在の際には羽柴勢総帥の代役を勤めた。

その戦いぶりは地味だが手堅く、賤ヶ岳の戦いでは、「鬼玄蕃」こと佐久間盛政の猛攻を、兄秀吉が岐阜から帰還するまで耐えぬき、大逆転勝利の立役者となった。

四国平定戦では大将、九州平定戦では副将（主将秀吉が後から来たので事実上の大将）として大功をあげ、紀伊・和泉・大和三国と権大納言の官位を得て「大和大納言」と呼ばれた。

柔和な性格ではあったが、対外的には強硬派であり、妹朝日姫を家康の嫁に送ったり、実母を人質にするなどの政策には反対したと言われる。

一五九一年、兄に先立って大和郡山城で死去する。享年五十一歳。彼が兄より長生きしたら、豊臣家の基礎は彼によって固められたはずで、家康は豊臣家に臣従し続けなければならなかった、と言われている。

羽柴秀次（はしばひでつぐ）（一五六八～一五九五）

京の住民を震え上がらせた「殺生関白」

羽柴秀吉の姉・とも（瑞龍院日秀）と三好吉房の子。小牧・長久手の戦いでは岡崎攻略部隊の大将となるが、家康の奇襲により森長可・池田恒興を戦死させるという失態を演じたが、実子のない秀吉の後継者に指名され、関白職を譲られる。

秀吉に実子秀頼が生まれると疎まれ始めた秀次は、京の町で辻斬りを行うなどの乱行におよび、ついには秀吉に切腹を命じられた。その死の直後、妻子三十人余も三条河原で斬られた。

小早川秀秋（こばやかわひであき）（一五八二～一六〇二）

吉継の怨霊に祟り殺された？秀吉の義甥

秀吉の正妻ねねの兄・木下家定の子。秀吉の養子を経て、小早川隆景の養嗣子となる。

関ヶ原では東軍への寝返りを約束したまま西軍として参戦。開戦後しばらく模様眺めをしたため、怒った家康軍鉄砲隊の一斉射撃を受け、あわてて大谷吉継の陣地に攻撃を開始した。

吉継は「おのれ金吾（中納言・秀秋の官位の呼び名）、人面獣心なり」と呪いの言葉を叫んで自決し、その祟りか秀秋は謎の死を遂げた。

竹中半兵衛（たけなかはんべえ）（一五四四～一五七九）

若くして死んだ秀吉の知恵袋

名は重治。美濃斎藤家の家臣の家に生まれ、美濃三人衆の安藤伊賀守の娘婿となった。

半兵衛の主君斎藤龍興は暗君で、半兵衛はたびたび諫言したが聞入れられなかったので、わずか十数人の手勢で稲葉山城を攻め、これを乗っ取るという事件を起こした。

城を主君に返したあと、隠居同然の生活を送っていたが、秀吉に説得され、その配下となる。

以後、秀吉の軍師として、浅井攻めなどに活躍する。

荒木村重が信長に背いた際に、同僚の黒田官兵衛が説得に行き、そのまま村重に拉致監禁されるという事件がおきた。この時信長は、官兵衛もまた裏切ったと思い、その子松寿丸を斬るように命じた。しかし官兵衛が裏切るような男ではないと信じていた半兵衛は、密かに松寿丸を手元においてかくまった。後、官兵衛が解放され、裏切りの事実がなかったことが確認された時、信長は松寿丸を殺すよう命じたことを悔い、その直後半兵衛によって松寿丸が守られていたことを知って安堵したという。

官兵衛救出の直前、持病（肺結核だと思われる）を悪化させていた半兵衛は、陣中で三十六年の短い生涯を閉じていた。

黒田官兵衛（くろだかんべえ）（一五四六～一六〇四）

秀吉に警戒された野心と知謀の軍師

播磨（兵庫）の豪族小寺氏の家老の子として生まれる。早くから信長に接近し、織田家の西国攻略を助けた。織田家の前線司令官として秀吉が着任すると、その寄騎となって従う。

信長配下の荒木村重が背いた際には、切支丹仲間の村重を説得するために有岡城に向かうが、村重に土牢に監禁される。牢内の環境はひどく、救出された時には、官兵衛は両脚が立たず、髪も抜け落ちた状態だった。

復帰後の彼は、以前にも増した知謀の軍師として活躍する。一説には、備中高松城の水攻めを考案したのは、彼だったといわれる。その知謀の冴えに、警戒感を抱いた秀吉は、天下統一後わずかな領地しか与えなかった。「不公平だろう」という家臣の意見に、秀吉は「やつに大禄を与えると、天下を取ってしまうだろう」と答えたという。

これに対し官兵衛は隠退でいて「如水」（水の如し＝無欲ということ）と号して無欲を装う。しかし、関ヶ原の合戦の時には短期間に九州を席捲、決戦が長引けば三成・家康の双方を打倒し、自分が天下を握ろうともくろむ。しかし決戦がわずか一日で終結したため、その野望は水の如く流れてしまった。

浅野長政（一五四七～一六一一）

真面目一途のねねの従兄弟

織田家の弓兵部隊を指揮していた浅野長勝の甥。長勝の養女と結婚し、その後継ぎとなるが、その妻の姉がねね、つまり後の秀吉の正妻・北政所であった。

この縁で浅井攻めの頃から秀吉配下となり、派手さはないが実直な執事役を務める。

秀吉晩年には五奉行筆頭として、三成の上役となっていたが、後に家康に接近、子の幸長が関ヶ原で大功をあげたため、常陸真壁五万石を与えられて引退、以後平穏な日々を送った。

宇喜多秀家（一五七二～一六五五）

関ヶ原の戦いの西軍の事実上の総帥

備前の大名・宇喜多直家の子。幼くして父を失うが、その後秀吉に育てられる。秀吉の養子たちの中では最も器量を評価されていて、同じく秀吉の気に入りの養女であった豪姫（前田利家の娘）を正室とした。

関ヶ原の戦いでは西軍主力として奮戦、敗北後薩摩島津家に一時身を寄せていた。三年後、幕府に自ら出頭し、死罪を免ぜられて八丈島に流される。その後、実に五十年間にわたって、島で流人として生活した。

増田長盛（一五四五～一六一五）

内治が得意な豊臣政権の倉庫番

羽柴秀吉の古参の家臣。太閤検地などで内政官僚としての手腕を発揮し、その功で秀長没後大和郡山城を与えられ、五奉行の一人となる。

関ヶ原の戦いでは中立を保ち、大坂城で留守居役を果たしており、決戦には参加しなかった。しかしそれでも、戦後所領は没収され、武蔵岩槻城で軟禁状態に置かれる。大坂の陣の時、尾張徳川家に使えていた息子・増田盛次が大坂城に入ったため、その責任を問われ自殺した。

長束正家（一五六二～一六〇〇）

算術の能力に優れた五奉行の一人

はじめ丹羽長秀の家臣であったが、長秀死後に羽柴家中に移り、秀吉の直臣になった。

算術の能力が非常に高く、秀吉が彼を招いたのも、その能力を評価したためだった。北条攻めの際に、糧食調達役としてその能力をいかんなく発揮し、後、水口十二万石を与えられ、五奉行の一人となる。関ヶ原では西軍として参戦したが、陣が日和見行なった吉川広家隊の後だったため動けず、戦後居城を池田輝政らに攻められ自害した。

加藤清正（かとうきよまさ）（一五六二〜一六一一）

秀吉と同郷で子飼い家臣団のエース格

秀吉と同じ尾張中村の出身。母は秀吉の母の従姉妹または妹であったと言われ、幼い時から秀吉の数少ない肉親として、ねねに直接養われて育ち、やがて秀吉の小姓となる。

成長すると、身の丈一九〇センチあまりの大男になったと言われ、賤ヶ岳の戦いでは同じく秀吉の小姓であった福島正則らとともに「七本槍」と称される大功をあげる。九州平定後に、小西行長と肥後を半国ずつ分けあったが、文治派の行長とはそりが合わない。同じく文治派の三成に訴えられ、それを信じた秀吉の命により謹慎されられる。

しかし、処分中に起こった大地震で、伏見城に孤立した秀吉を真っ先に救助に向かい「虎之助（清正の幼名）が参りましたぞ」と大音声で叫び、その場に居合わせたねねの口添えもあって、秀吉に許される。

秀吉死後は三成・行長と対立し、関ヶ原の戦いの間接的な原因を作る。関ヶ原の戦いには、黒田官兵衛とともに、九州の数少ない東軍として活動して、戦後に行長の旧領をほぼそのままもらっている。

なお、築城の名手で、居城熊本城のほか、江戸城・名古屋城の建設などに深く関っている。

福島正則（ふくしままさのり）（一五六一〜一六二四）

不幸な晩年を過ごした関ヶ原の東軍主力

幼名市松。清正と同じく、秀吉の親戚の出身。ねねに養育され、賤ヶ岳の戦いで武将としてのデビューを飾る。この際、正則は名のある武将を討ち取り、その手柄は七本槍随一とされた。

秀吉死去の際には尾張清洲二十四万石の大名となっており、清正とともに武断派の筆頭として、文治派の三成・行長と対立した。その結果、三成憎しの一念で家康に接近、下野（栃木）小山で三成挙兵の報を聞いた際には、率先して家康に味方することを告げ、諸将の動揺を抑えた。

関ヶ原の戦いでは、東軍先鋒主力として、西軍主力の宇喜多勢（先鋒大将明石全登）と激突、何度か撃退されたが粘り強く反撃し、ついに宇喜多勢を壊滅させる。正則はこの間、常に陣頭にあって「かかれかかれ」と号令をかけ続けていたという。

戦後、安芸広島四十九万石を与えられ、左近衛権少将となる。しかし幕府は、関ヶ原で見せつけられた正則の武力を恐れており、大阪の陣の際には徳川方への従軍を許されず、江戸で軟禁状態に置かれた。

家康の死後、将軍・秀忠はささいな理由をつけて福島家を改易、正則は流刑同然となった。

着実に地歩を固めて、天下にたどりついた苦労人
徳川家康
天下泰平のためには、重き荷でもいといはせぬ
上杉謙信
対武田同盟
武田との対立で手を結ぶ
北条氏康
同盟
関東の強豪で縁戚となり同盟をする
織田信長
同盟
姉川、長篠でともに戦う
終生変わらなかった同盟者
家康はよき友だ
家康と戦った人々
時の勢いにはさからわない
豊臣秀吉
ライバルだが、天下平定のために手を結ぶ
家康殿は油断ならぬお人じゃ
賞賛
大敵だが尊敬
武田信玄
家康を生涯悩ませた越えられない大敵。勝頼の代で滅亡したあと武田の家臣を多く召し抱えた
どれ、小せがれに戦を教えてやるか
今川義元
東海一の弓取り。家康は最初は今川の支配下の小大名だった
天敵
天敵
真田家
真田幸村
昌幸の次男
親豊臣派
真田昌幸
武田の旧家臣で、徳川軍を二度撃退した知将

家康をめぐる人々

家康は、三河（愛知）の小さな大名で、幼い頃は織田や今川の人質となった。桶狭間の戦いで独立し織田信長と同盟を結び、武田信玄とともに今川領を攻めて領地を広げた。しかしその武田家と対立、国力で三倍で信玄はじめ多くの名将を抱える武田との戦いは、家康とその家臣に多くの経験をもたらすことになった。決して無理をしない慎重な性格の家康は、忠義に篤くて忍苦に耐える三河武士に支えられ、天下泰平への道を歩んだ。

- 敵対
- 友好
- 微妙
- 天敵
- 感情

徳川四天王

- 榊原康政　忠勝と同年の宿将
- 井伊直政　赤備えの勇者
- 酒井忠次　古参の筆頭家老

本多忠勝

信頼
信頼

親子

真田との講和のために
一時養女にして真田信之と婚姻

夫婦

稲姫

忠勝の娘

真田信之
昌幸の長男で稲姫の夫
親徳川派

徳川家の武将たち

服部半蔵

伊賀の出身で
伊賀忍者を束ねる

- 本多正信　側近中の側近で家康の知恵袋
- 徳川秀忠　家康の三男。温厚な2代目

徳川秀忠（とくがわ ひでただ）（一五七九〜一六三二）

篤実さで将軍職を得て幕府を盛りたてる

家康の三男。長兄・信康が若くして自害し、次兄・結城秀康は勇猛だが家康にうとまれていたため、おのずと徳川家の後継候補となった。しかし秀忠は温厚篤実だが覇気に欠け、家臣たちには物足りない主君だった。

関ヶ原の戦いは、そんな前評判に対して秀忠の武勇を発揮する絶好の機会だった。しかしこのやる気が、かえってあだとなる。秀忠は徳川家の本隊を率いて中山道を進撃したが、上田城にこもる真田昌幸・幸村父子によって完全に足止めされてしまう。この結果、秀忠の隊は関ヶ原の本戦に遅れるという大失態を演じてしまったのだ。

これには家康も激怒し、合流地の大津でもなかなか面会をしてもらえなかった。それでも、このことで後継者の指名が変わるということはなかった。家康の長期政権の構想では、信長や秀吉のような独裁体制よりも、将軍を有能な家臣たちが支える幕府体制を理想としていたのだ。

秀忠は家康の期待通り、家康死後も重臣たちを盛りたてながら、幕府の基盤を固めていった。しかしこれは篤実さだけではなしえないことである。家康の意図を完全に理解できるだけの賢良な資質があればこそだった。

結城秀康（ゆうき ひでやす）（一五七四〜一六〇七）

家康からうとまれ、将軍職を逃した猛将

家康の次男で、幼少の頃秀吉の養子となったが、のち秀吉に世継ぎができると、関東の名門・結城家の養子に出された。勇猛な武将として家臣たちからの信頼は厚かったが、豊臣家の重臣とも親交があったため家康から疑念をいだかれていた。

関ヶ原では北関東に留守として残され、上杉家への備えにあたった。家中には次代将軍への期待もあったが、家康にうとまれて秀忠が将軍となり、数年後、失意のうちに病死した。

松平忠吉（まつだいら ただよし）（一五八〇〜一六〇七）

関ヶ原で一番槍を出しぬいた御曹子

家康の四男で、舅にあたる井伊直政が後見にあたっていた。関ヶ原では、一番槍を得ようとして井伊直政とともに物見のふりをして、福島正則隊を出しぬき、初陣にして一番槍をつけることに成功した。

また合戦終了後は義父・直政とともに島津義弘の追撃にも参加し、島津豊久を討ちとることに成功した。戦後、尾張の国主となるが、島津隊から受けた傷がもとで、二十八歳という若さで死亡してしまう。

榊原康政（一五四八～一六〇六）

三河武士の意地をつらぬいた硬骨漢

徳川四天王の一人。幼少時から家康の側に仕え、本多忠勝とともに徳川家の主将として活躍した。姉川の戦いでは、伏兵として朝倉軍の側面を攻め、形勢を逆転させるなど数々の殊勲をあげていった。

武将として康政の働きぶりは、文句のつけようがなかった。しかし徳川家も勢力が拡大しており、政局を担える者が重要になってきている。その代表例が本多正信の重用である。康政は合戦は不得意な策士の正信を「はらわたの腐った者」と評して忌み嫌っていた。

秀吉死後、宇喜多家で家臣団の抗争が勃発した。康政はこれを仲裁しようとしたが、実はこれは家康・正信主従の策であった。また関ヶ原で秀忠が遅参した際も、正信の冷淡な態度に怒りながら、家康に秀忠を許すよう取りなしている。

康政はかつて家康を支えた三河武士の典型なのだが、政権を目前にした家康とはすでに距離ができていたのだった。のちに家康が大御所となり、秀忠が将軍になった際、秀忠は関ヶ原の恩義に報いるため康政を老中に迎えようとした。しかし政局とは無縁の三河武士である康政は、これを辞退したのである。

井伊直政（一五六一～一六〇二）

島津への追撃で寿命を縮めた能将

徳川四天王の一人。若い頃は小姓として家康の寵愛を受けた。内政・外交に加えて武勇にもすぐれた有能な武将で、武田家の遺臣で編成された「赤備え」の指揮も任された。

関ヶ原では、外様大名とともに先陣に加わりつつ、事前外交でもその手腕を発揮している。また戦後も、本多正信とともに大名の論功行賞に従事した。しかし島津義弘を追撃した際に受けた鉄砲傷が悪化し、わずか二年後に病死してしまった。

酒井忠次（一五二七～一五九六）

家康の創業時代を支えた重臣

徳川四天王の一人。桶狭間で今川義元が戦死すると、家康に独立して信長と結ぶよう進言した。独立後は、石川数正とともに宿老として三河国内の領国経営に貢献している。

また三方ヶ原や姉川の戦いなど、戦場でも武勇を発揮した。特に長篠の戦いでは、鳶ヶ巣山への奇襲を進言、自ら出陣した。この作戦が成功し、動揺した武田軍を設楽が原に誘いだした。信長も忠次の働きを戦功一番と賞讃している。

本多正信（一五三八～一六一六）

家康のためいっさい情と欲を捨てた謀臣

家康の謀臣。三河一向一揆に参加し、そのまま出奔した。その後は各地を放浪し、加賀一向一揆を指揮したり、松永久秀の客分になっていたりした。姉川の戦いの頃、旧友・大久保忠佐の取りなしで帰参したという。

正信は合戦はまったくの不得手だった。姉川での戦いでは、部隊を猛進させすぎて本多忠勝に危ういところを救われている。正信の持ち味はその智謀である。ほかの三河武士が合戦に明けくれる中、彼一人はさまざまな世界で見聞を広めていたのだ。このため家康は帰り新参の正信を重用した。この重用ぶりが徳川家の旧臣との溝を作ってしまう。

家康が天下をうかがえる時勢ともなると、正信の重要性はますます上がっていった。家康が天下を取るためなら正信は手段を選ばなかった。関ヶ原から大坂の陣までの家康の強引な手法は、正信に因るところが大きい。かつての恩人・大久保忠佐の子・忠隣と権勢を争うことになると、容赦なくこれを排除した。

しかし正信は自身の栄達にはまったく無欲だった。彼は帰参を許した家康に報いたいだけだったのである。彼もまた忠義一途の三河武士の一人だった。

大久保忠隣（一五五三～一六二八）

本多正信との権力闘争に敗れ失脚する

幼少から家康に仕え、戦場での活躍だけでなく内政や外交にも才能を発揮した。のちに徳川秀忠の家老となり、関ヶ原では秀忠とともに中仙道を進んだ。しかし真田父子の守る上田城攻略に賛成し、作戦が失敗したため本多正信の非難を受けた。

徳川幕府が開かれると、両者の対立は激化した。忠隣は三河時代からの旧臣からは信頼が厚かったが、家康が幕府の創設に不可欠な正信を重用したため、忠隣は失脚することになる。

石川数正（？～一五九二）

秀吉の権勢に圧倒されて惑乱する

家康が幼少の頃から仕えていた重臣。徳川家が三河で独立すると酒井忠次とともに領国経営を担当した。戦場での活躍ばかりでなく外交にもすぐれていた。

しかし小牧・長久手の戦い以降、豊臣家との和睦交渉にたっていた数正は、秀吉の威厳に驚異をおぼえ、徳川家を出奔して秀吉の家臣になってしまう。このため家康は軍制が豊臣側に漏れるのを防ぐため、「赤備え」をはじめとする旧武田家の軍制を導入し、対処した。

北条家と佐竹家

関東での戦国時代の争いは、中央の動きに比べると地味にうつる。しかし、中央との大名の同盟関係と密接に連携しており、かなり複雑な動きを見せていたのだ。

関東大名連合と北条家の争い

一五六〇年代の関東は、小田原に本拠を置いて拡大を続ける北条家と、その侵略に怯える中小大名との抗争の舞台だった。この中小の大名のリーダー役となっていたのは、最初は里見家であり、里見家が北条家に屈伏した後は、佐竹家がその役を果たした。

関東の大名たちは、こうして結束した後に、関東管領職を受け継いだ越後の上杉謙信と結び、越後兵を関東に遠征させ、北条家に圧力を加えていたのである。

常陸（茨城）北部の大名・佐竹家は、謙信との同盟だけでは不完全と見て、早いうちから織田家に接近していた。佐竹義重は、信長が足利義昭を奉じて上洛する軍の中にいたと言われており、その後、信長の推薦によって義重は常陸介（常陸には「守」は事実上いないので、常陸介が最上位になる）に任命されている。要するにこの推薦で、佐竹家は、徳川家と同格の織田家の同盟者となったのである。

佐竹家対北条家の戦い

佐竹義重は、上杉謙信との同盟や、その後の織田家との同盟を軸にして関東の諸大名のリーダーとなり、北条家との抗争を続けた。義重は自分自身が戦場で戦うタイプの武将で、自分自身は戦場に出ず、小田原城で総指揮を取る政治家型の武将である北条氏政と対照的だった。

織田家や、その後を引き継いだ羽柴家との同盟関係があるとはいえ、国力から言えば佐竹家の方が圧倒的に不利であった。しかし、太田資正（三楽斎）やその息子梶原政景など、北条家に所領を奪われた武将が次々と味方し、国力の不足を人材で補っていた。

秀吉が賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を破り、徳川家康と対立するようになると、北条家は同盟関係により徳川方になり、佐竹家は秀吉・上杉景勝との同盟により、徳川・北条連合を包囲する格好になる。この体勢は、徳川家と秀吉が講和し、同盟から脱落した後も続いた。この時期、秀吉は何度か「富士を見たい（つまり、富士山の周囲を領有している北条家を攻撃するぞ、という意味）」という書状を関東の諸大名に送っている。

北条家滅亡後の佐竹家

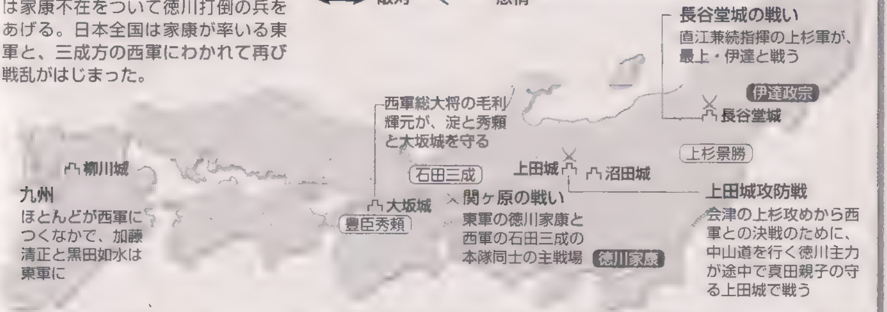
佐竹家は秀吉との同盟をうまく使い、北条家を始末するだけでなく、同時に北方の大敵であった伊達政宗も退けようとした。しかし、政宗が打った芝居により、伊達家取り潰しの方は失敗する。どうやらこのあたりから、義重は秀吉との関係を見直すようになったらしい。

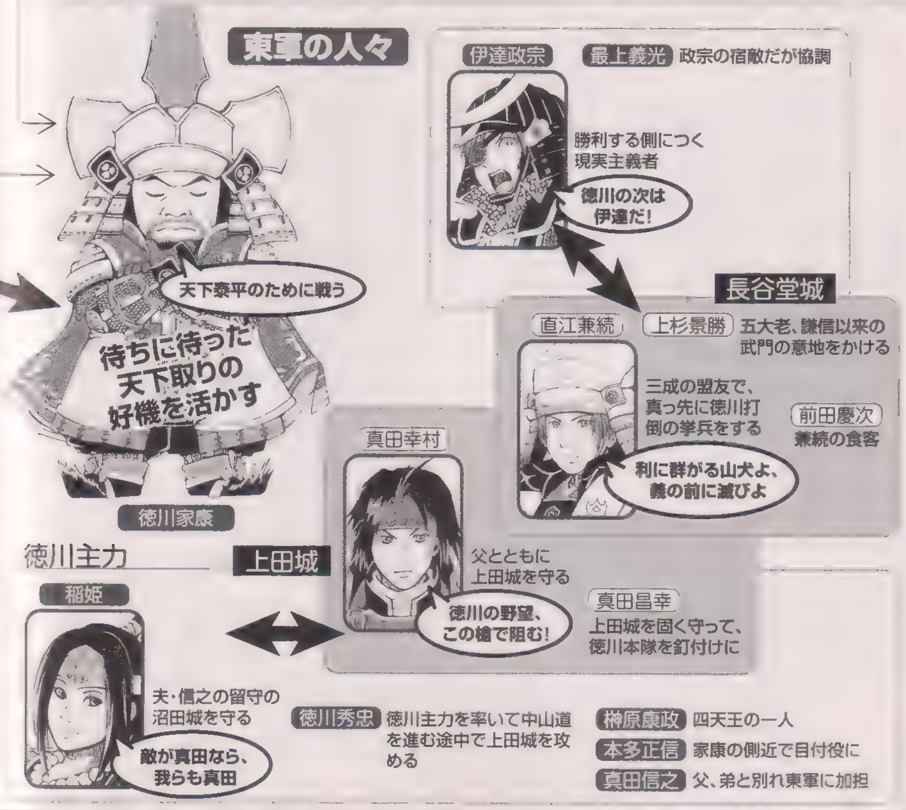
しかし、義重の子義宣は秀吉の奉行・石田三成との関係を維持した。これは領国の石高を誤魔化すためと思われる。石高が多いと軍役の負担などが重くなるので、少なく申告した方が有利なのだ。佐竹家の所領は、一般には五十四万石とされているが、書物によっては七十五万石とするものもある。これ以外に、周囲に親類筋となった大名の所領があった。三成との関係は、これらを誤魔化すのに役立ったが、その結果佐竹家は関ヶ原では中立ながら西軍寄りと見なされてしまう。

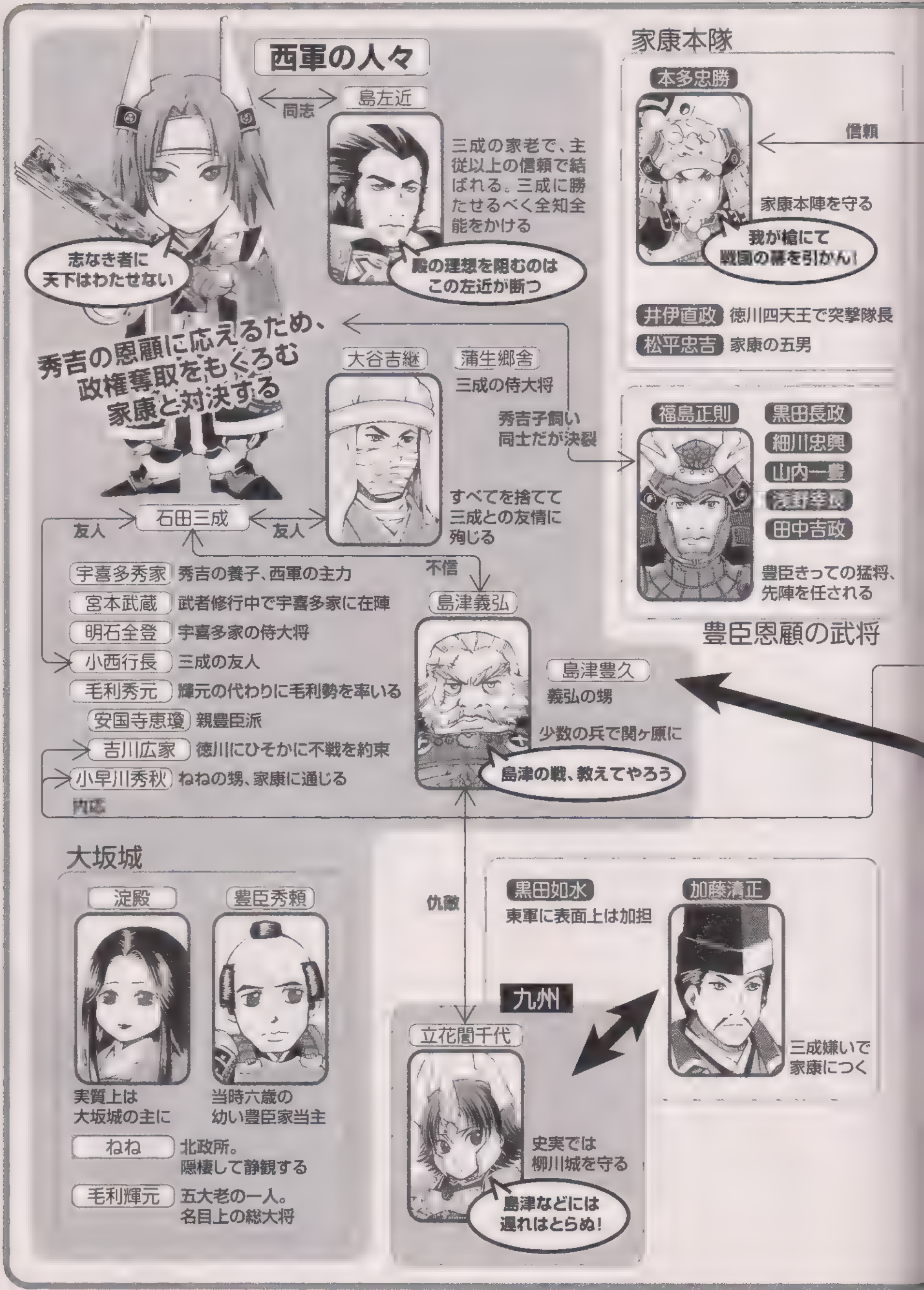
関ヶ原の戦い

秀吉の死後一年。石田三成は上杉家家老の直江兼続と語らって天下を狙う家康打倒の計画をねる。会津にこもって上洛要請に応じない上杉景勝に対し、徳川家康は豊臣家の筆頭大老の名で討伐軍を起こした。三成は家康不在をついて徳川打倒の兵をあげる。日本全国は家康が率いる東軍と、三成方の西軍にわかれて再び戦乱がはじまった。

⟷ 敵対　← 感情







西軍の人々
同志
島左近
三成の家老で、主従以上の信頼で結ばれる。三成に勝たせるべく全知全能をかける
殿の理想を阻むのはこの左近が断つ
志なき者に天下はわたせない
秀吉の恩顧に応えるため、政権奪取をもくろむ家康と対決する
大谷吉継
蒲生郷舎
三成の侍大将
秀吉子飼い同士だが決裂
すべてを捨てて三成との友情に殉じる
友人
石田三成
友人
不信
宇喜多秀家 秀吉の養子、西軍の主力
宮本武蔵 武者修行中で宇喜多家に在陣
明石全登 宇喜多家の侍大将
小西行長 三成の友人
毛利秀元 輝元の代わりに毛利勢を率いる
安国寺恵瓊 親豊臣派
吉川広家 徳川にひそかに不戦を約束
小早川秀秋 ねねの甥、家康に通じる
内応
島津義弘
島津豊久
義弘の甥
少数の兵で関ヶ原に
島津の戦、教えてやろう
家康本隊
本多忠勝
信頼
家康本陣を守る
我が槍にて戦国の幕を引かん!
井伊直政 徳川四天王で突撃隊長
松平忠吉 家康の五男
福島正則
黒田長政
細川忠興
山内一豊
浅野幸長
田中吉政
豊臣きっての猛将、先陣を任される
豊臣恩顧の武将
大坂城
淀殿
実質上は大坂城の主に
豊臣秀頼
当時六歳の幼い豊臣家当主
ねね 北政所。隠棲して静観する
毛利輝元 五大老の一人。名目上の総大将
仇敵
九州
立花誾千代
史実では柳川城を守る
島津などには遅れはとらぬ!
黒田如水
東軍に表面上は加担
加藤清正
三成嫌いで家康につく

最上義光（もがみよしあき）（一五四六～一六一四）

独眼竜政宗の、油断のできない伯父

出羽の大名・最上家の十一代当主。妹は伊達輝宗の妻・義姫で、政宗の伯父にあたる。

その苛烈な性格を恐れた父は、家督を弟中野義時に譲ろうとしたが、義光は父を幽閉、弟を謀殺して実力で家督を得る。

関ヶ原の戦いの際、義光は東軍東北部隊として行動、西軍の上杉景勝と対立する。その際、景勝の家老で三成の親友である直江兼継の率いる兵二万五千を、七千の兵で撃退した。戦後出羽五十七万石を得た。

黒田長政（くろだながまさ）（一五六八～一六二三）

父からは叱られた関ヶ原の裏MVP

黒田官兵衛の長男で、幼名松寿丸。秀吉の小姓たちと年齢が近く、彼らとともに育った。

関ヶ原の戦いの際には、東軍の将として事前の根回しに大活躍し、戦いの前に東軍勝利を決定づけたのは、彼と藤堂高虎の手柄であると言われる。

関ヶ原合戦当日にも、島左近率いる三成勢と戦い、これを撃退する。だが、戦を長期化させ、漁夫の利で天下を制しようと狙っていた父・官兵衛は、戦後長政を激しく叱ったという。

田中吉政（たなかよしまさ）（一五四八～一六〇九）

三成の居城佐和山を攻めた猛将

秀吉と同じ農民の出身で、宮部継潤を経て秀吉の配下となる。その後秀次付きの筆頭家老となり、秀次切腹後も処罰されず、逆に加増され、三河岡崎の城主として関ヶ原の戦いを迎える。

合戦においては東軍として参戦し、三成勢を相手に奮闘、戦後は三成の居城佐和山に進攻して、これを落城させた。伊吹山中に隠れていた三成を捕縛したのも吉政の部下である。これらの功により、筑後柳川三十二万石を得た。

細川忠興（ほそかわただおき）（一五六三～一六四五）

伝統ある名家に生まれたお坊ちゃま勇将

足利幕府で長く管領を務めた細川家の出身。しかし、その性格は名家の出とは思えないほど激しいものであったと言われる。

妻は明智光秀の娘・玉で、忠興はその姿を覗き見た植木屋をその場で手討ちにするほど、妻を溺愛していたという。

関ヶ原の戦いにおいては、逃げ遅れて西軍の人質状態になる妻に自決せよと命じ、悲しみをこらえて三成軍と戦った。なお、利休の高弟で、茶の湯の道にも通じていたといわれる。

真田昌幸（さなだ まさゆき）（一五四七〜一六一一）

家康を翻弄し続けた籠城戦の天才

信濃の豪族・真田幸隆の三男。幼い時に武田信玄の人質となり、小姓として育てられる。長篠の戦いで二人の兄が戦死し、真田家の家督を継ぎ、武田家滅亡後に自立する。

その後、上野・沼田の領地を巡って徳川家康と対立、徳川・北条同盟軍七千を二千の手勢で撃退する。これが家康に「真田コンプレックス」を植えつけるきっかけになったといわえる。

関ヶ原の戦いの際には、長男信幸を東軍に所属させたが、自分は次男幸村とともに西軍となり、中山道経由で関ヶ原に向かった徳川秀忠軍三万八千をわずか二千の兵で上田城に迎撃する。この結果、秀忠軍は上田に釘づけ状態となって関ヶ原の決戦に間に合わず、秀忠自身の徳川家の後継者の座が危うくなる程であった。

関ヶ原の戦いのあと、昌幸に対して深い恨みを抱いた家康は、昌幸と幸村を死罪にしようとしたが、信幸とその舅本多忠勝のとりなしにより、死罪は撤回され、紀伊・九度山に蟄居ということになる。その後昌幸は、大阪城を舞台にする家康との最終決戦を待ちながら忍従の日々を過ごしたが、大坂の陣の数年前に、あえなく病没した。

毛利輝元（もうり てるもと）（一五五三〜一六二五）

結果的に祖父の遺言を守った温厚な大名

中国の覇者、毛利元就の長男・隆元の子。幼時に父を失い、祖父から後継者に指名される。

家督相続時の毛利家は、織田家の猛攻により存亡の危機にあった。この困難な状況にあって元就は、「天下を望むな。とにかく家名の存続をはかれ」との遺言を残した。輝元は、性格が温厚で、武勇の面でも知略の面でも特に秀でたものを持っていなかったが、武に優れた吉川元春、智に優れた小早川隆景という二人の叔父の忠告をよく聞き、結果的に毛利家を豊臣政権の大大名として存続させることに成功した。

その二人の叔父が死んだあと、毛利家にまた大きな災難が訪れる。輝元自身には天下への野望がないにも関らず、西軍の総帥にかつがれてしまったのだ。

しかしここでも、従兄弟にあたる吉川広家が家康と必死の裏交渉を行い、輝元自身は大坂城の留守を預かり、野戦部隊を率いた広家は戦闘に参加せず日和見を貫いた。それでも戦後に家康は裏取引を守らずに、輝元の切腹と毛利家改易を迫ったが、広家が家康と直談判を行い、自分用の領地とされた長門・周防二国を毛利領とすることで、何とか毛利家を存続させた。

大谷吉継（おおたによしつぐ）（一五五九〜一六〇〇）

秀吉に「大軍を率いさせたい」と言わせた知将

近江出身とも豊後出身とも言われており、その幼少期についてははっきりしていない。十六才頃から、長浜城主となった秀吉に小姓として仕えはじめ、同じような境遇であった石田三成の親友となる。

賤ヶ岳の戦いの直前に、柴田勝家の養子であった勝豊の調略に成功し、その能力を秀吉に注目される。

その後は兵站輸送業務などにつくことが多かったが、秀吉は吉継の将才を高く評価しており、よく「紀之介（吉継の幼名）に百万の大軍を指揮させてみたい」と言っていた。

秀吉の天下統一がなった頃、吉継はハンセン氏病にかかり、顔面の皮膚が崩れて白布で被わなければならない状態になる。これを不気味に思った諸大名は吉継との交流を避けたが、三成だけは以前と変わらず、吉継は「この男のためなら死ねる」と思ったという。

関ヶ原の戦いの前に、吉継は三成に、挙兵の無謀を説いたが、聞き入れられなかったためにすべてをあきらめ、三成のために死ぬことを決意した。そして決戦の場において、裏切った小早川秀秋の部隊に攻められ、奮闘後、自決する。

蒲生郷舎（がもうさといえ）（?〜一六〇〇）

三成配下の豪勇侍大将の一人

もとは蒲生氏郷の家臣。蒲生家にあっては、万石以上の領地を与えられ、主君から蒲生姓を許されるほどであったが、氏郷死後に浪人する。高名な彼を、上杉景勝・伊達政宗などが勧誘したが、石田三成に仕える。三成は家臣に物惜しみせず高禄を与えたので、領地の割りには高名な侍大将を多数抱えていた。

関ヶ原の戦いでは、島左近とともに三成軍主力として奮戦、最後は茶道における親友であった織田有楽斎に討たれた。

小西行長（こにしゆきなが）（?〜一六〇〇）

薬屋の息子から肥後半国の大名になった男

堺の薬商人・小西隆佐の子。はじめ宇喜多氏に仕えていたが、後に秀吉配下の水軍の将となる。

九州平定戦の後に、加藤清正とともに肥後を半国ずつ与えられるが、清正と不和で、このため石田三成と接近、関ヶ原の戦いでは西軍として参加する。

戦場では三成隊とともに奮戦したが敗れ、伊吹山中に潜伏する。そこを竹中重門（半兵衛の子）に見つかり、六条河原に引き出されて斬首される。

吉川広家（きっかわひろいえ）（一五六一～一六二五）

自らの所領を差し出して主家を存続

吉川元春の子。幼時には秀吉の元に人質として送られ、秀吉養女（宇喜多秀家の姉）を娶るなど、豊臣家との繋がりは深い。この過程で加藤清正などとの縁ができ、関ヶ原の戦いでは東軍総帥の家康と談判し、毛利家存続の約束を取りつけた。

しかし、家康が戦いの後に約束を無視しようとしたため、広家は自分の領地を毛利本家に譲り、自らは岩国六万石のみを得た。大坂の陣では秀頼に誘われたが、きっぱり拒否している。

安国寺恵瓊（あんこくじえけい）（一五三九～一六〇〇）

秀吉の将来は見えても自分の将来は……

安芸の守護職武田家（甲斐武田家と同族）の出身で、毛利氏に仕え、外交を担当する。この際、無名時代の秀吉を評して「いずれひとかどの人物になるだろう」と言ったことが後に高く評価された。

関ヶ原の戦い前夜、毛利家の重鎮となっていた吉川広家と対立し、形式的に毛利輝元を西軍総帥にかつぎ出す。しかし、合戦当日は戦場から逃亡した。しかし、京都に潜伏しているところを捕らえられ、六条河原で斬られた。

平塚為広（ひらつかためひろ）（？～一六〇〇）

大谷吉継を支えたたたき上げの現場指揮官

秀吉の馬廻り役から出世し、一万二千石の大名になった現場たたき上げの人物。関ヶ原の戦いの直前、この戦いが無謀であると感じた大谷吉継の使者として、三成を説得するために佐和山城に赴く。

関ヶ原の合戦では、病で動けない吉継に代わり、大谷隊の指揮を執ったともいう。しかし、小早川秀秋の裏切りにより、小勢の大谷・平塚隊は劣勢になり、為広は吉継に辞世の句を送りつけて、突撃して玉砕した。

大坂の陣

関東方の人々

苦手

徳川家康

⟷ 敵対 ⟵ 苦手

幕府を開いた徳川家康が、豊臣秀頼の大坂城を二回にわたって攻囲して滅ぼした戦い。豊臣家の呼びかけに応じた大名はなく、すべて徳川方についた。秀頼に応じたのは、関ヶ原の戦いで取りつぶされた長宗我部盛親や真田幸村ら牢人たちで、起死回生の望みをかけて大坂城に参集した。一六一四年、冬の陣が戦われたが決着がつかず、いったん講和する。しかし翌年そうそうに手切れとなり、豊臣家の存亡を賭けた夏の陣がはじまった。

徳川一族

徳川秀忠 やっぱり影が薄い徳川二代将軍

松平忠輝 家康の六男。越後勢を率いる

松平忠直 家康の子・秀康の長男、越前勢を率いる

四天王の子たち

本多忠朝 忠勝の次男、毛利勝永と戦い戦死

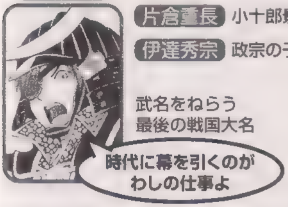
井伊直孝 直政の子、木村重成を討ち取る

酒井家次 忠次の子

榊原康勝 康政の子

全国の諸大名

伊達政宗



片倉重長 小十郎景綱の子

伊達秀宗 政宗の子

武名をねらう
最後の戦国大名

前田利常 利家の子、外様では最大の兵力で参戦

片桐且元 賤ヶ岳七本槍で秀頼の傅役だったが

真田信政 幸村の甥、父信之のかわりに出陣

藤堂高虎 先鋒を任される

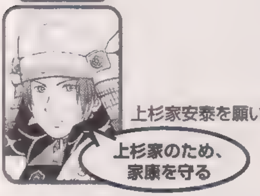
黒田長政 徳川方に参加

細川忠興 徳川方に参加

上杉景勝

謙信以来の武を示す

直江兼続



上杉家安泰を願い参陣

福島正則

豊臣家への恩を忘れず、
江戸城に待機を命じられる

大坂方の人々

淀殿

豊臣秀頼

大野治長 秀頼の側近で、総大将格

木村重成 秀吉、秀頼二大に仕えた豪傑

薄田隼人 もと加藤嘉明に仕えた豪傑

三好政康 もと三好三人衆の老将

大谷吉勝 大谷吉継の子

※大名は誰一人として大坂方に味方する者はいなかった。大坂方の主力は、関ヶ原の戦いで取りつぶしにあった大名や主家を無くした牢人だった。この牢人が力戦奮闘して徳川方を手こずらせた。

大坂牢人五人衆

大坂方の主力。もと大名や家老格で、歴戦の強者ぞろい

後藤又兵衛 もと黒田家の侍大将

長宗我部盛親 土佐のもと大名

明石全登 宇喜多家のもと侍大将

毛利勝永 関ヶ原でとりつぶされた豊前の大名

真田大助 幸村の子で秀頼の身辺を守る

真田幸村

片倉景綱（かたくら かげつな）（一五五七〜一六一五）

独眼竜軍団を支え続けた知将

伊達家家臣で小十郎と呼ばれる。伊達政宗の守り役に任じられ、伊達一族の成実とともに政宗を補佐した。俗に、「武の成実、知の小十郎」と言われる。

秀吉が北条家を攻撃した際、口実をもうけて政宗を殺害しようとしたが、政宗は景綱の助言によって難を逃れた。秀吉は景綱の才知を高く評価し、政宗配下から自分の家臣にしようと勧誘したが、景綱はその誘いを断った。大坂の陣には病気で参加できず重長を派遣した。

片倉重綱（かたくら しげつな）（一五七五〜一六五九）

独眼竜軍団の名軍師の息子

伊達政宗の守り役であった片倉小十郎景綱の子で、父と同じ小十郎を称した。父は知の人という評価を受けていたが、こちらの小十郎は武の人で、周囲に「鬼小十郎」と呼ばれた。

大坂の陣では伊達家の先鋒大将となり、大坂方の主将の一人後藤又兵衛を討ち取った。

また、大坂城内で真田幸村の娘・阿梅を保護し、後に彼女を自分の妻とした。さらに彼は阿梅の弟で幸村の次男大八も引き取った。

伊達成実（だて しげざね）（一五六八〜一六四六）

独眼竜軍団の武の象徴となった侍大将

伊達家家老・実元の子。母は伊達晴宗の娘にあたる。

幼い時から政宗に仕え、人取橋の合戦、摺上原の戦いで軍功をあげ、角田城主となる。

その後一時政宗の不興を買い、浪人状態になったが、関ヶ原の戦いの時に帰参、亘理（わたり）城主となり、大坂の陣の際に伊達軍を率いて戦った。伊達家の武の象徴としての彼の兜には、毛虫を象ったものが載っており、これは「決して後退しない」という彼の心意気を示したものだという。

藤堂高虎（とうどう たかとら）（一五五六〜一六三〇）

豊臣家臣から徳川家譜代同然となった男

浅井長政の家臣。浅井家滅亡後は信長の甥津田信澄の家臣を経て、羽柴秀長に仕えるなど、主を転々とする。

秀長の死後は秀吉の直臣となるが、その後は家康に接近、調略の才をいかんなく発揮し、数多くの大名を東軍に味方させた。

その後も徳川家に忠勤を励んだため、外様でありながら譜代並みの待遇を受けるに至る。大坂の陣では東軍として参戦し、八尾の戦いで、長宗我部盛親隊と戦い、激戦の末勝利した。

淀殿の実像は!?

「天下の悪女」「豊臣氏を滅ぼした女」と、とかく悪く言われる淀殿だが、その実像はどんなものだったのか。

信長の姪から秀吉の側室に

淀殿は本名をお茶々といい、浅井長政と信長の妹お市の方の間に生まれた。

その後、長政と信長が戦ったため、お市は悲劇のヒロインとして有名になり、いつの間にか小説などで「信長最愛の妹」扱いされるようになった。だが、意外に家族思いであった信長は、自分の家族の女性をほとんど政略結婚の道具として使わず、家臣など裏切りの可能性の低い相手に嫁がせているのだ。また、特に気に入った女性には、「鍋」や「五徳」のように、台所用品と同じあだ名を付けるという癖があった。お市は裏切りの可能性のある長政に嫁がされたし、台所用品のあだ名も付けられていない。世に言われるほど、この兄妹の仲がよかったのかどうかは疑問である。

秀吉が最終的にお茶々を側室にしたのは、「信長最愛の妹お市の娘だから」と言われることが多いのだが、お市最愛の妹説に疑問符がつく以上、これはあまり信用のできそうなことではない。また、秀吉はお茶々よりも先に信長の実娘を側室にしている（三条殿）ので、秀吉にとって神聖であった信長の血縁者をわがものにしたがった、という理由も成り立たない。おそらくは、お茶々が自分好みの美人に成長していたから、という単純な理由で側室にしたと思われる。

秀吉の子を産む

お茶々が豊臣家の中で発言力を高めていくのは、彼女が秀吉の子を産んだ後の話である。また、彼女だけが秀吉の子を産んだ、とされるため、その子が秀吉の実子かどうか疑問視する説もある。しかし、秀吉は長浜城主時代に南殿という女性に男子（石松丸秀勝）を産ませており、お茶々の子が秀吉の子ではないと決めつけることはできない。最初の子鶴松が生まれた時、秀吉は非常に喜び彼女に山城の淀城を与えた。これ以後、お茶々は「淀殿」と呼ばれるようになる。

鶴松は数え年三才で亡くなってしまうが、淀殿はその後秀頼を産む。秀吉の子のうち、この秀頼のみが成人した。

大坂城の支配者となる

秀吉死後、大坂城の支配者は秀頼で、その後見役は北政所（ねね）になるのだが、北政所は尼になって高台寺に引っ込んでしまったため、淀殿が事実上の大坂城の支配者となった。

とはいえ、淀殿には政治的なセンスも実績もほとんどなく、大坂城のかじ取りは彼女の感情まかせということになる。この結果、関ヶ原後に豊臣氏は六十五万石の一大名に転落し、さらに現実路線で豊臣氏の存続を図っていた家老の片桐且元がさじを投げたかのように出奔するという事態になる。

それでも彼女は現実が見えず、「秀頼が天下人であるべきである」という考えを変えることなど思いもよらない。家康とはまったく妥協しなかったため、大坂の陣を引き起こし、秀頼とともに命を落とすこととなる。

一般的には悪女の典型とされる淀殿だが、自分に仕えていた侍女達への態度は非常にあたたかく、死後、恩を忘れなかった侍女達により定期的に法要が営まれていたという。

後藤又兵衛（ごとうまたべえ）（一五六〇～一六一五）

黒田官兵衛の息子同然にして育った侍大将

播磨三木城主・別所長治の家臣の子。別所氏滅亡後、黒田官兵衛に拾われ、実子同然に育てられた。関ヶ原の合戦の時にも、関ヶ原に出陣した黒田軍主力（総帥は長政）として活躍している。しかし、官兵衛に愛された分だけ、官兵衛の実子長政とは仲が悪くなり、官兵衛死後ほどなくして又兵衛は長政と仲たがいして黒田家を出奔する。

豪勇又兵衛が浪人した、というので、諸大名家はこぞって彼を招こうとしたが、長政の妨害によりことごとく失敗、又兵衛は最後には京都で流浪人に近い境遇にまでおちぶれた。

大坂の陣が起きると、又兵衛は入城し、浪人部隊の主将格となる。冬の陣では木村重成と組み、上杉景勝・佐竹義宣という戦国乱世を知る猛将たちと激突、これをたびたび打ち破った。

夏の陣においては、東から来襲する徳川軍を迎撃するために部隊を率い、道明寺で水野勝成・伊達政宗・本多忠政の軍と激突、後藤隊は奮戦したが、真田幸村の部隊との連絡がうまくいかず、次第に数に勝る東軍に押されるようになる。もはやこれまでと悟った又兵衛は、残った部隊を整理すると東軍に突撃を敢行し、そのまま討ち死にした。

大野治長（おおのはるなが）（一五六九～一六一五）

淀殿との血縁で大坂城を牛耳った男

淀殿の乳母・大蔵卿局の息子。その縁で秀吉の馬廻り衆に取り立てられる。秀吉死後に秀頼側近として権力を揮うようになるが、内実は淀殿の意思を他の家臣に押しつけるだけであった。

大坂の陣では和平を唱え、主戦派であった後藤又兵衛・真田幸村ら浪人大将と対立する。大坂落城の際には、家康の孫千姫の命と引き換えに秀頼の助命を図ったが、交渉に失敗し、秀頼とともに大坂城山里曲輪（くるわ）で自決した。

木村重成（きむらしげなり）（一五九三～一六一五）

豊臣家への忠義を貫いた若武者

豊臣秀頼の小姓として、兄弟同然に育つ。秀吉は重成が物心つくかつかないかのうちに死んでいるので、重成の忠誠は一途に秀頼に向けられていた。

大坂冬の陣が初陣だが、いきなり百戦練磨の佐竹兵を撃退し、老練な後藤又兵衛を感動させる。夏の陣においては、長宗我部盛親とともに八尾に出陣、藤堂・井伊という東軍最精鋭部隊と激突し、藤堂軍右翼を撃破するが、疲れたところを井伊軍に討ちとられた。

長宗我部盛親（ちょうそかべ もりちか）（一五七五～一六一五）

浪人大将最大の所領の持ち主

四国の覇者・長宗我部元親の四男。関ヶ原の合戦時には東軍に属しようとしたが、外交交渉に失敗、やむなく西軍について戦後改易される。

大坂の陣の際に、西軍に所属するが、かつて国持ち大名であった浪人は彼一人であった。

冬の陣・夏の陣ともに、隠されていた軍才を発揮、特に夏の陣では木村重成とともに藤堂高虎の部隊を壊滅寸前の状態にまで追い込む。その後城から脱出したが、捕らえられ斬られた。

明石全登（あかし てるずみ）（一五六六～一六一五?）

関ヶ原・大坂の陣通じてのMVP

宇喜多氏の筆頭家老。関ヶ原の戦いでは宇喜多軍を率い、西軍の事実上の中核戦力として、福島正則と激闘を繰り広げた。

主君秀家が八丈島に流刑になった後は、浪人して黒田官兵衛に養われていたといわれる。大坂の陣が勃発すると、大坂城に入り、浪人大将の中心として活躍する。

大坂落城後、城内から彼の死体は発見されず、南蛮に逃げたとの噂が広まり、家康は「明石狩り」を行なった。

毛利勝永（もうり かつなが）（一五七七～一六一五）

最後まで秀吉に殉じた一族の当主

秀吉古参の直臣である森吉成の子。中国の毛利家とは血縁はなく、この姓は秀吉が名家にあやかれと毛利家から貰ってくれたもの。関ヶ原の合戦には西軍に荷担し、戦後山内一豊に預けられる。東西の対立が深刻化すると、土佐を脱出して大坂城に入り、浪人大将の一人として活動する。

夏の陣では本多忠朝ら三人の武将を討ち取る大殊勲をあげたが、落城の時に山里曲輪で豊臣家に殉じた。

片桐且元（かたぎり かつもと）（一五五六～一六一五）

最後に主家を退散した豊臣家家老

浅井家家臣の子。長浜時代の秀吉に、小姓として仕え、後に賤ヶ岳の七本槍の一人となる。

しかし賤ヶ岳以後の仕事場はもっぱら豊臣家の内政中心になり、城の接収、軍船調達などの業務に携わる。戦功がないため石高は少なかったが、秀吉は彼を豊臣家の重鎮と認め、晩年には秀頼の守り役につけた。秀吉死後はその遺命を守り、必死に秀頼を補佐しようとしたが、開戦直前に大坂城から出て東軍についた。

【特別戦場紹介】

関ヶ原の戦い

歴史研究家　福田誠 Fukuda Makoto

一方、事実上西軍の総大将であった石田三成は、石高ではわずか十九万石の小身でありながら、家康に対抗しうる大勢力を結集した。そしてさらに、純軍事的に合戦を見た場合、あるいは西軍の勝利という形にまで、状況を持ち込むことに成功していたのである。

決戦に至るまでの経緯は本編の趣旨ではないので省くが、両者とも思惑どおりに事が運んで決戦の日を迎えたわけではない。関ヶ原の前後に、東西両軍の戦いが全国的に繰り広げられた。決戦までの間にあった戦いの結果が一つ変わっていれば、関ヶ原の決戦自体の様相が変わった可能性は少なくない。たまたま選択肢の一つの結果が、史実の関ヶ原決戦になったといえる。

本編は、関ヶ原の前哨戦となった九月十四日の杭瀬川の戦いから、十五日の決戦にかけて、ほぼ一日に及ぶ合戦のドキュメントである。

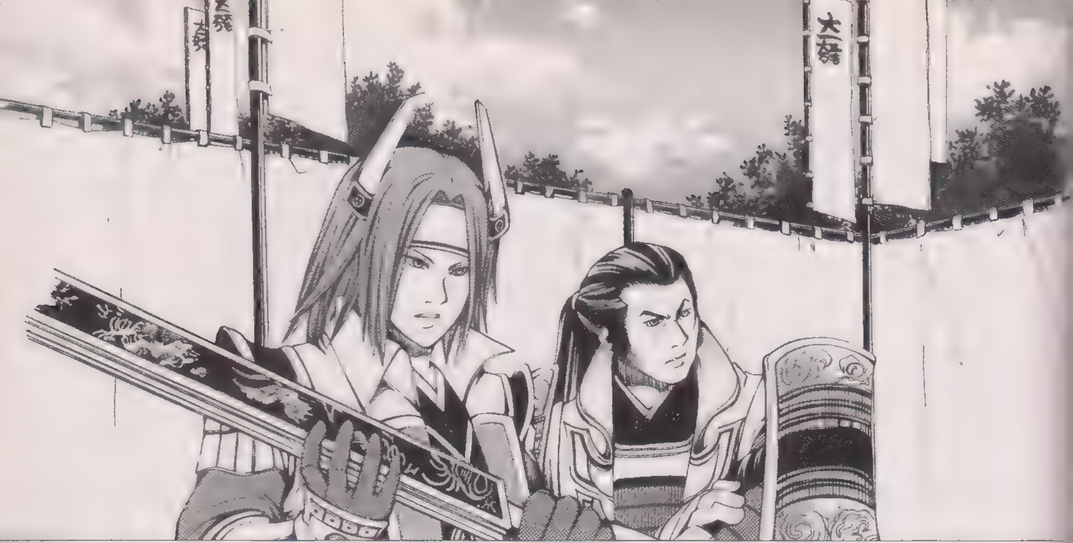
◆天下分け目の決戦

慶長五年（一六〇〇）九月十五日に起きた関ヶ原の戦いは、徳川家康が幕府を開くきっかけとなった、文字どおり天下分け目の決戦である。

一日であっけなく決着がついたことで、合戦前に策略をめぐらした家康により、いかにも勝つべくして勝ったような印象が強いのであるが、実際には、家康にとっても薄氷を踏むような経過であった。この日はおそらく家康にとって、戦国で一番長い日だったに違いない。

◆前哨戦　杭瀬川の戦い

九月十四日の夜明け前に岐阜城を出発した徳川家康は東山道を進み、同日正午頃には、福島正則ら東軍諸将が陣していた赤坂に到着し、岡山に本営を置いた。



家康の赤坂着陣に東軍はわき、大垣城に集結していた西軍には動揺が走った。

石田三成の軍師島左近は赤坂攻撃を進言した。東軍に先制攻撃をかけて勝利を得ることにより、家康の到着によって動揺した西軍諸将の気勢を上げようとしたのである。三成はこの攻撃を許し、左近は兵五〇〇を連れて、杭瀬川を渡った。

杭瀬川は、西軍が陣する大垣城と、東軍が陣する赤坂の中間を流れている川である。島左近の部隊が渡河してくるのを認めた東軍の中村一栄と有馬豊氏の両隊は、先を争って左近の部隊に向かった。左近は一戦交えた後、杭瀬川を渡って後退した。中村、有馬両隊も左近の部隊を追い、杭瀬川を渡った。

ところが、これは左近の計略であった。対岸には宇喜多秀家配下の明石全登の兵八〇〇が待ち伏せていたのである。明石隊は左近の部隊を追ってきた中村、有馬両隊に鉄炮を撃ちかけ、突撃した。横槍を衝かれた東軍の中村、有馬両隊は算を乱して後退し、この前哨戦は西軍の勝利に終わったのであった。

◆西軍大垣城出陣

杭瀬川の戦いの後、大垣城で西軍の軍評定が開かれた。島津義弘は「家康は岡山に到着したばかりで軍旅の疲れがある。夜襲をかければ勝算あり。今すぐ家康の本陣を襲撃すべし」と積極的な意見を出した。これに宇喜多秀家も賛成する。対して石田三成と小西行長は「輝元および秀頼公の出陣を待つべし」と意見した。西軍の総大将である毛利輝元は、豊臣秀頼を擁して大坂城にいた。三成は再三出陣を求めていたが、同じく大坂城にいた増田長盛内応の噂もあり、輝元の出陣はこれまで実現せずにいたのである。

大垣城で論争が続いていた頃、対岸の赤坂でも東軍が軍評定を開いていた。こちらでも「大垣城を攻撃すべし」という意見と「佐和山を抜き、一気に大坂を攻めるべし」という意見に分かれていたが、徳川家康のひと声で、佐和山城攻略の後、大坂城を攻めることに決まった。

意見のまとまらない大垣城に、東軍の

関ヶ原　参戦兵数

東軍

<関ヶ原本隊>

徳川家康	30000人
福島正則	6000人
黒田長政	5400人
細川忠興	5100人
井伊直政	3600人
本多忠勝	500人
松平忠吉	3000人
京極高知	3000人
加藤嘉明	3000人
田中吉政	3000人
筒井定次	2850人
藤堂高虎	2490人
寺沢広高	2400人
生駒一正	1830人
金森長近	1140人
古田重勝	1020人
織田有楽斎	450人
有馬則頼	300人
分部光嘉	300人
合計	75380人

<南宮山方面隊>

池田輝政	4560人
浅野幸長	6510人
山内一豊	2058人
有馬豊氏	900人
堀尾忠氏	5100人
中村一栄	4350人
水野勝成	900人
西尾光教	600人
松下重綱	300人
一柳直盛	1050人
合計	26328人

西軍

<関ヶ原本隊>

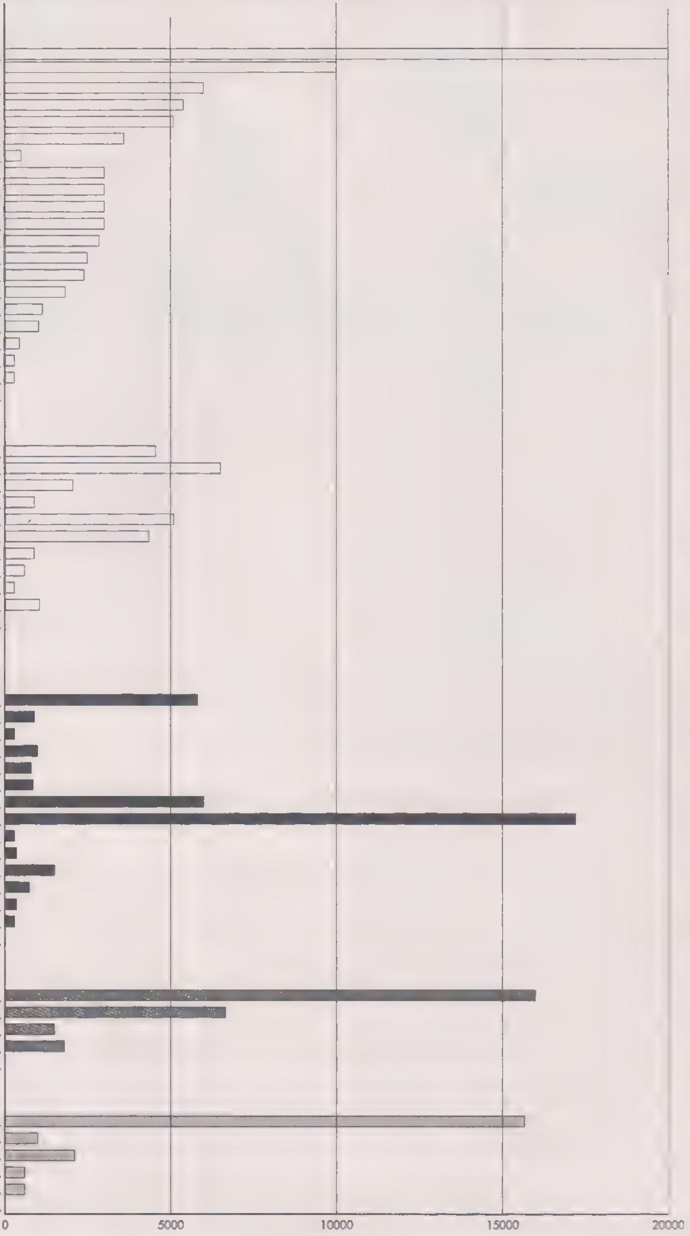
石田三成	5820人
伊藤盛正	900人
岸田忠氏	300人
豊臣麾下	1000人
島津義弘	800人
島津豊久	858人
小西行長	6000人
宇喜多秀家	17220人
川尻直次	300人
糟屋宗孝	360人
大谷吉継	1500人
木下頼継	750人
平塚為広	360人
戸田重政	300人
合計	36468人

<南宮山方面隊>

毛利秀元	16000人
長曽我部盛親	6660人
長束正家	1500人
安国寺恵瓊	1800人
合計	25960人

<西軍謀反部隊>

小早川秀秋	15675人
脇坂安治	990人
小川祐忠	2100人
朽木元綱	600人
赤座直保	600人
合計	19965人



※参謀本部編「関ヶ原役」をもとに作成

作戦が伝わってきた。佐和山城は石田三成の本城である。驚いた三成は、全軍に関ヶ原への移動を命じた、とされる。だがすでに、松尾山北麓の山中には大谷吉継の兵が九月二日から布陣し、近江へ向かう東山道を押さえていたのである。このため、関ヶ原布陣は既定の作戦であったともいわれている。

午後七時頃、西軍は密かに大垣城を出立した。大垣城には三成の女婿福原長尭が七五〇〇の兵と共に残り、三成以下四万の主力が関ヶ原に向かった。東軍に悟られぬよう松明を消し、馬の口を縛っての進軍であった。

◆西軍関ヶ原着陣

西軍主力部隊は、関ヶ原東方にある南宮山の南側を大きく迂回し、伊勢街道に入った。赤坂に布陣していた東軍部隊との接触を避けるためである。深夜になって雨が降りだし、ずぶ濡れになっての進軍となった。途中、三成は本隊を離れ、南宮山に陣していた長束正家と安国寺恵瓊を訪れている。大垣城での結果を伝え、事後の戦策を練るためであった。

また、三成は関ヶ原南方の松尾山に在陣していた小早川秀秋をも訪ね、関白職と播磨一国の加増を約している。挙兵したときから、秀秋の行動はずっと不審であった。しかしながら、秀秋麾下の兵は一万五六〇〇。決戦を左右する一大兵力である。三成としては、何としても秀秋を西軍に繋ぎ止めておかなければならなかった。だが秀秋は、すでに東軍への内応を約していた。そして、「これまでの罪を許し、働き次第では上方二ヶ国をも加増する」という、徳川家康からの誓書も届けられていたのである。

さて、西軍主力部隊の先頭を進む石田三成の兵が関ヶ原に到着したのは、午前一時頃のことであった。冷たい雨が降る中、秘匿行動をとっていた軍勢は、到着に六時間もかかったのである。そして後続の部隊はまだ、街道上に延々と長い縦隊になって進軍を続けていた。おそらく最後尾は、南宮山を過ぎていなかったと思われる。

◆東軍赤坂出陣

家康は西軍の夜襲に備え、諸将に警戒を厳重にするよう命じた。

西軍が大垣城を出陣した、という情報が家康のもとにもたらされたのは、午前二時頃のことであった。岡山の本営でいったん床についていた家康は、この報を聞いて飛び起き、ただちに全軍の出陣を命じた。東軍の先頭は、福島正則と黒田長政である。続いて加藤嘉明と藤堂高虎以下の各隊、そしてこれら先鋒諸隊の統括として、松平忠吉が続いた。徳川四天王の一人である井伊直政が忠吉を補佐する。こちらも雨が降り続ける暗い闇の中で進軍を開始、東山道を進んでいった。

食事をすませ、出陣の準備を整えた家康が動き出したのは、午前三時頃のことである。家康は麾下の兵が揃うのを待たずに出発した。将兵はばらばらに駆け集まることとなり、家康を追いかけての出陣となった。家康の軍勢は垂井のあたりまで進んでところで、ようやく陣容が整

ったのであった。

◆西軍関ヶ原布陣完了

続々と関ヶ原へ到着した西軍の各部隊は、到着した順に北から南へと布陣していった。

最初に到着した石田三成の兵六〇〇〇は、北国街道を扼する位置にある関ヶ原北西の笹尾山に布陣した。島左近と蒲生郷舎が前面に立ち、二重の柵を組んで陣地を築いた。三成は全軍を把握できるよう、笹尾山の見晴らしのよい位置に陣所を備えた。その右側には、織田信高、伊藤盛正、岸田忠氏ら豊臣麾下の黄母衣衆二〇〇〇が位置した。

石田隊の次に進んできた島津義弘の兵一五〇〇は、島津豊久を先頭にして四段に備え、北国街道の南側に位置した。

島津隊に続いて到着した小西行長の兵四〇〇〇は島津隊の右側、天満山の北麓に布陣した。

最後に到着したのは、西軍最大の兵力を持つ宇喜多秀家の兵一万七〇〇〇である。秀家は兵力を前軍と本軍の二つに分け、天満山の南麓に布陣した。

山中に陣していた大谷吉継は、西軍主力が関ヶ原に到着すると共に、麾下の兵を関の藤川まで兵を進めた。

吉継の麾下にあった脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保の諸隊四二〇〇は、関の藤川沿いに布陣した。これは東軍の横槍を衝くことができ、加えて旗幟鮮明でない松尾山の小早川秀秋に備えることもできる、絶好の位置であった。

吉継自身は選りすぐりの兵六〇〇で東山道を扼する位置に陣を備え、その前面には、東山道を挟むようにして戸田重政、木下頼継、平塚為広、大谷吉勝の兵、合わせて四四〇〇を置いた。吉継は当初より秀秋の寝返りを疑っており、大谷勢はいずれも東軍に対するより、どちらかといえば小早川秀秋に向けて備えていたのである。

西軍の布陣が完了したのは、まだ夜が明けていない午前四時頃のことであった。関ヶ原の他に、南宮山には毛利秀元、長宗我部盛親、長束正家ら合わせて二万八〇〇〇ほどの兵力が集まっており、東軍が関ヶ原へ進出してくれば、その背後を衝ける位置にあった。また、関ヶ原南方の松尾山に布陣する小早川秀秋が一万五六〇〇で、これらをすべて合わせれば、西軍の総数は八万三〇〇〇を超える大兵力であった。

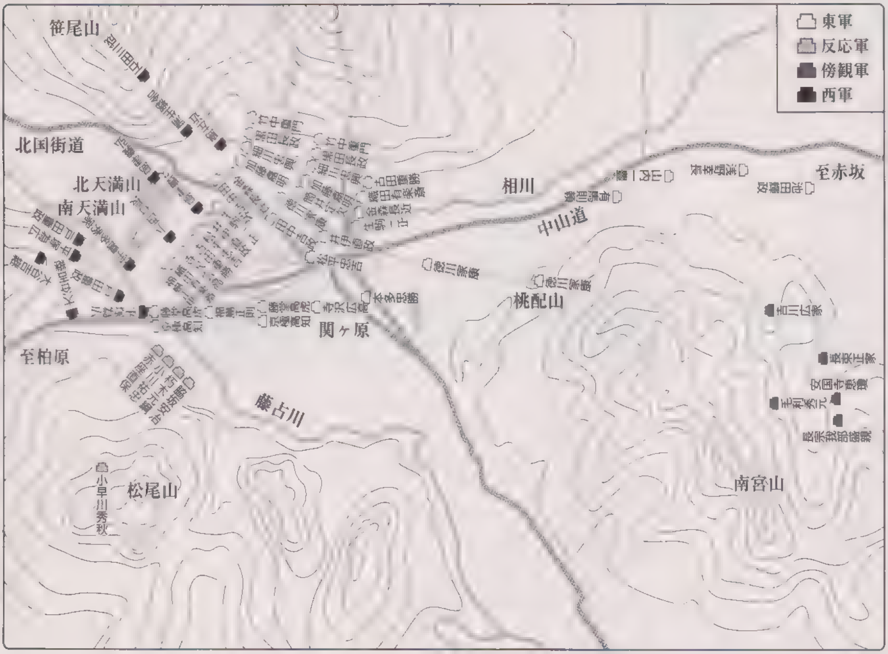
しかし、南宮山の毛利勢を統括する吉川広家はすでに、「毛利家の安泰が守られるならば、軍勢を動かさない」という密約を交わし、東軍に内応していたのである。松尾山の小早川秀秋もまったくあてにならず、後に日本を訪れたドイツ参謀本部のメッケル少佐が「必勝疑いなし」とまで評価した西軍の布陣は、実のところ、はなはだ心許ないものであった。

◆東軍関ヶ原布陣完了

雨が依然として降り続き、関ヶ原は深い霧に閉ざされていた。このような状況の中、関ヶ原に入った福島正則隊の先鋒が、西軍の宇喜多秀家の小荷駄隊と接触した。午前五時頃のことである。思いも

両軍対峙

午前8時



東軍の軍議では、福島正則が先鋒と決まっていたが、午前8時ころ、ひそかに井伊直政と松平忠吉がだしぬいて西軍の宇喜多秀家隊と銃撃を開始した。主将格の石田三成隊には、個人的な恨みもあって黒田長政隊、加藤嘉明隊、細川忠興隊らが殺到した。

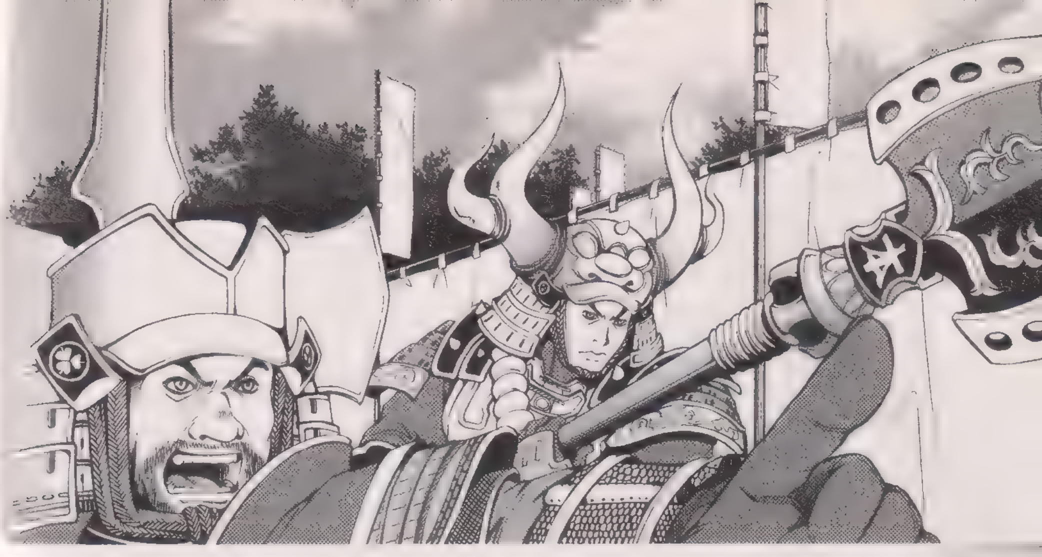
しなかった遭遇に双方とも混乱した。この報を受けた徳川家康は、ただちに進撃の停止を命じ、布陣を開始した。

先頭を進んできた福島正則の兵六〇〇〇は、宇喜多秀家と対峙する位置に備えた。その背後には、藤堂高虎二四九〇と京極高知二四〇〇が布陣した。

正則と同様に先頭を進んでいた黒田長政の兵五四〇〇は、笹尾山方面に歩を進め、石田三成に対した。黒田長政と福島正則の間には、細川忠興五〇〇〇、加藤嘉明三〇〇〇、筒井定次二八五〇、田中吉政三〇〇〇が布陣し、その後方には、古田重勝、織田有楽斎、金森長近、生駒一正、寺沢広高などの中小勢力、合わせて七〇〇〇ほどが遊軍として布陣した。

先鋒諸隊を統括すべく進んできた松平忠吉の兵三〇〇〇と井伊直政の兵三六〇〇は、東山道と伊勢街道の交差する関ヶ原の中心に布陣した。また、徳川四天王の一人である本多忠勝は五〇〇の兵を引き連れ、軍監として先鋒諸隊の後方に位置していた。

午前六時頃、徳川家康は三万の兵を引



き連れ、南宮山西麓の桃配山に本陣を移した。桃配山は、西軍からすれば完全に袋の鼠にできる位置であったが、家康は吉川広家と小早川秀秋の内応にそれなりの手応えをもっていたのであった。

とはいっても万が一に備え、家康は池田輝政、浅野幸長、山内一豊、有馬豊氏ら、合わせて二万六〇〇〇ほどを南宮山北部を通る東山道沿いに布陣していた。

東軍の総兵力は約十万二〇〇〇。兵数的にはわずかに勝っていたが、地理的な不利と、半数ほどは烏合の衆に近い先鋒諸隊のことを考え合わせれば、吉川広家と小早川秀秋の内応が現実のものとならない限り、家康の勝利はきわめて微妙なものであった。

このような状態に陥った最大の原因は、東山道を通ってくるはずの徳川秀忠の兵三万八〇〇〇が、いつになっても到着しないことであった。秀忠は信州上田城の真田昌幸に翻弄されて足止めを食っていたのであるが、家康にはその状況が伝わっていなかった。

だが、城攻めが苦手な家康にとっては、多少のリスクを背負いながらも、大垣城から西軍の主力を引きずり出すことができたこの絶好のチャンスを逃す手はなかったのである。

◆戦闘の火ぶた

両軍の布陣が終わり、そして夜が明けたものの、どちらも軍勢を動かすことができずにいた。前夜の雨と山間の地形の為、関ヶ原に深い霧が立ち込め、いつになっても晴れなかったのである。

両軍とも動くに動けない状態が、二時間ほど続いた。霧が晴れてきたのは、日もだいぶ上がってきた午前八時頃のことであった。やがて両軍とも状況が明らかとなり、戦機は熟した。

東軍の先陣は、福島正則と決められていた。小山評定以来、これまで東軍諸将をとりまとめてきた功を認め、徳川家康が正則に先陣を命じたのである。

ところが、徳川家の中にはこれをよしとしない者がいた。徳川四天王の一人、井伊直政である。直政は「この一戦こそ

徳川家大事の一戦であり、徳川家の直臣こそが先駆けせねばならない」と考えていたのである。

井伊直政は松平忠吉と共に、手勢数十騎を率いて前方へ進み出ようとした。福島正則の家臣可児才蔵がこれを咎めたが、直政は「家康殿四男松平忠吉殿直々の物見（偵察）である」と偽り、先頭に飛び出すと、やにわ宇喜多秀家隊に鉄炮を撃ちかけた。関ヶ原決戦の開始である。

これを見た福島正則は激昂し、鉄炮隊八〇〇に射撃開始を命じ、合わせて全軍に突撃を命じた。宇喜多秀家はただちに麾下の兵を五段に分け、福島隊の攻撃を防いだ。福島隊の先鋒可児才蔵と宇喜多隊の先鋒明石全登という猛将同士がぶつかり合い、両軍の旗が入り乱れての激烈な戦いを繰り広げたのである。

福島隊の銃声を聞いた他の東軍部隊も、一斉に行動を開始した。藤堂高虎、京極高知、寺沢広高の各隊は前進して大谷吉継を攻め、古田重勝、織田有楽斎らは小西行長を攻めた。宇喜多隊を射撃して開戦の火蓋を切った松平、井伊両隊は宇喜多隊を攻めることなく、島津隊に向かっていった。

◆集中攻撃を受ける三成

当然といえば当然なのだが、東軍の攻撃は、西軍の実質的な総大将石田三成が布陣する笹尾山に集中した。黒田長政、細川忠興、加藤嘉明、田中吉政、金森長近などの兵が攻めかかったものの、前面に布陣していた島左近と蒲生郷舎が東軍の攻撃を阻み、撃退した。

そこで黒田長政は側面に兵を回し、島左近が柵からうって出てきたところを見計らって鉄炮を撃ちかけさせ、横槍を入れたのである。この長政の攻撃に、島左近の部隊は大損害を受け、左近自身も負傷した。

石田勢はこれに動揺し、柵内へと後退した。東軍各隊はこれを追って、三成の本隊へと攻め寄せた。しかし、蒲生郷舎がふんばり、東軍は笹尾山を攻め上ることができずにいた。負傷した島左近は、傷の手当てもそこそこに再び戦場へ飛び出したが、いつしか乱戦の中に消えた。生死は不明である。三成自身も最前線に立って部隊の指揮を取り、両軍は一進一退の攻防を繰り広げた。

◆家康、本陣を進める

攻めかかる東軍に対し、西軍はこれを受ける。西軍は大量の鉄炮を撃ちかけたため、硝煙で戦場が薄暗くなるほどであった。ぬかるむ斜面を攻め上る格好となった東軍は、思わぬ苦戦を強いられた。

二時間ほどですぐに決着がつくと考えていた徳川家康は、西軍が予想以上に善戦しているのを見て、次第に不安といらいらを募らせてきた。西軍の中で実質的に戦っていたのは三万五〇〇〇ほどであったが、東軍四万五〇〇〇余りの攻勢を支えていた。この西軍の善戦に、内応を約していた吉川広家と小早川秀秋の心変わりがあれば、家康の目算はすべて崩れ去ってしまうのである。

家康は本多忠勝を呼び、南宮山の兵が動いた場合のことを心配したが、忠勝は

「広家の内応が破られることはないし、池田と浅野の兵が備えているので心配御無用」と家康を激励した。

午前十時頃、一進一退の状況に家康はいても立ってもいられず、本陣を進めて戦況を視察すると、諸隊に使番を走らせ、命令を下した。また、太鼓や貝を鳴らし、麾下の兵に喊声を上げさせて、自軍の士気を鼓舞したのである。

やがて毛利勢が動かないことを確信した家康は、南宮山を警戒していた山内一豊と有馬豊氏を、関ヶ原方面に回した。

◆総攻撃の狼煙

東軍の猛攻に先陣が崩れ、苦戦を強いられていた石田三成は、隣の陣地にいる島津義弘に援護を求めた。が、「自らの敵だけで手一杯である」と断られた。

軍上手を自負する義弘としては、前日の赤坂夜襲をはじめ、これまで三成に提案した自らの献策がことごとく退けられたことで、大きくプライドを傷つけられていた。さらに、毛利も小早川も動かない状況に、積極的に戦おうという意思をなくしていた義弘は、「三成のお手並み拝見」とばかりに、傍観を決め込んだのである。

島津義弘に救援を拒否された石田三成は本陣に戻り、かねてから決めてあった総攻撃の狼煙を上げた。午前十一時頃のことである。

この狼煙が上がったとき、松尾山の小早川秀秋と南宮山の毛利勢が一斉に山を下る手はずとなっていたのである。自身は苦戦しているとはいえ、三成が敵を引きつけていることで、西軍全体としては逆に押しているところさえあった。ここに毛利と小早川の軍勢が加われば、西軍の勝利は決定的になるはずであった。

狼煙を見た南宮山の長束正家は、毛利秀元に出馬を促した。秀元はこれに応じるつもりであったが、家康に内応していた吉川広家は、「毛利家安泰の為に動いてはなりません」と出馬を抑えたのである。

最大の兵力を持つ毛利勢が動き出さない以上、南宮山に陣していた他の部隊も動くことができなかった。

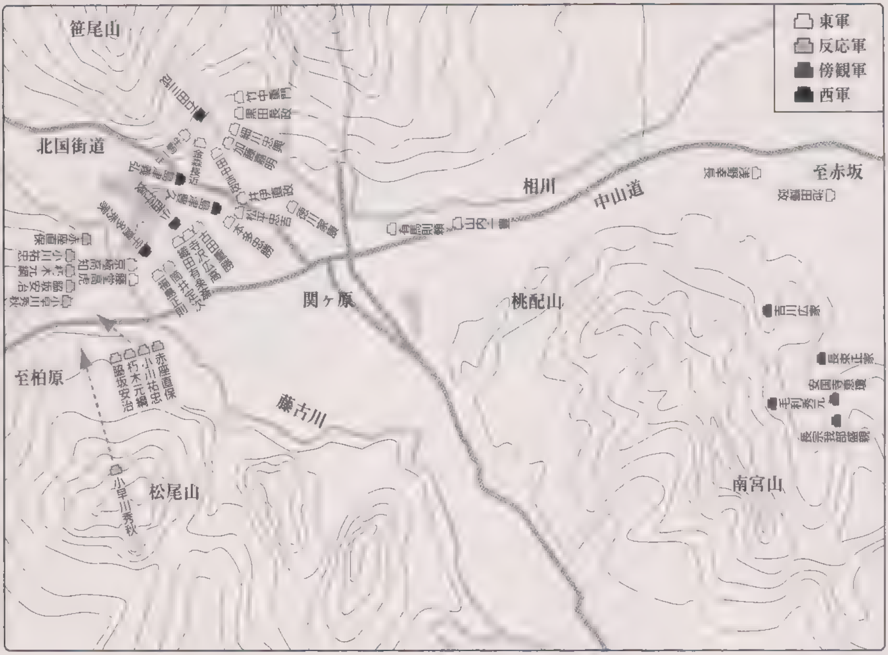
一方、松尾山の小早川秀秋もどうするべきかで悩んでいた。東軍への内応を積極的に進めていた家老の稲葉正成と平岡頼勝の二人は、何とか秀秋を東軍として動かそうとしていたのであるが、眼下では、思いのほか西軍の宇喜多勢と大谷勢が優勢に戦いを進めているのである。当初、東軍に荷担するつもりだった秀秋は、これで去就を決しかねてしまった。

◆小早川秀秋動く

総攻撃の狼煙が上がっても動こうとしない秀秋に対して、西軍は石田三成だけでなく、小西行長や大谷吉継までが使番を出し、出撃を促した。一方、東軍でも徳川家康が秀秋に使者を出し、内応の実施を迫った。いまや東西両軍が、松尾山に注目していた。一進一退の戦況は、小早川秀秋の動きひとつで大きく変わろうとしていたのである。

いつになっても動き出そうとしない秀秋に対し、本陣にいた家康は大きな不安に陥っていた。指をかみ、イライラを募

小早川秀秋、動く　正午



小早川秀秋が裏切りを決めて、松尾山を駆け下りたのは正午である。裏切りを予測していた大谷吉継は平塚隊と戸田隊で対応し、小早川隊を押し返す。しかし、前衛の脇坂隊ほかも突然裏切って、大谷隊に襲いかかった。大谷隊は壊滅し、動揺は全戦線に波及していく。

らせ、内応工作を進めた黒田長政に確認の使いを送ったりした。三成と激戦の真っ最中だった長政は、家康の使いに「秀秋の去就など今さら知ったことか」と怒鳴り返した。

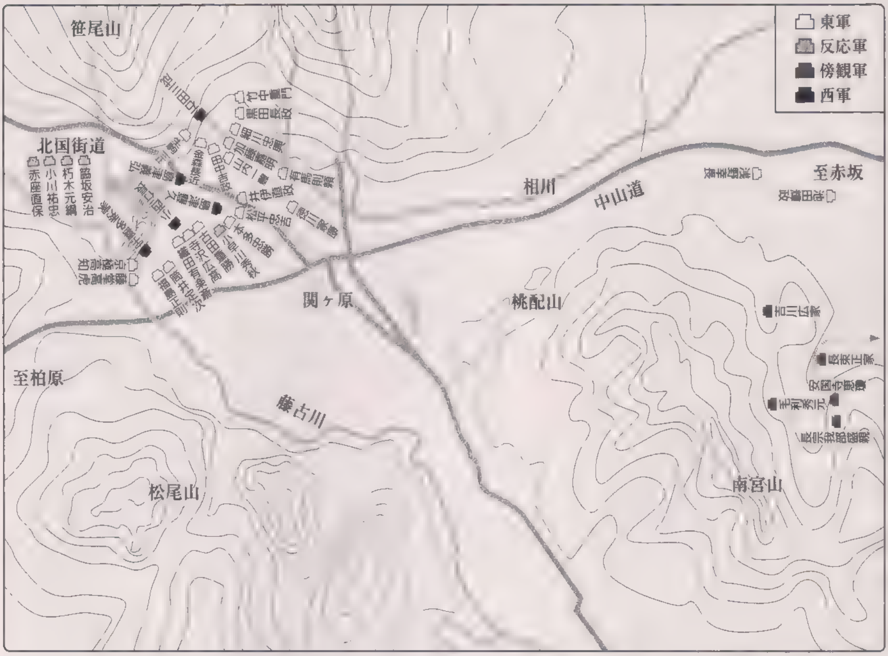
業を煮やした家康は、賭けに出た。麾下の布施孫兵衛に命じ、威嚇の鉄炮を松尾山へ撃ち込ませたのである。

はたして、この鉄炮に反応して小早川秀秋が動き出した。全軍が山を駆け下り、麓で戦いを繰り広げていた大谷吉継へ一斉に襲いかかったのである。小早川隊は鉄炮六〇〇で撃ちかけ、続いて平岡頼勝と稲葉正成を先頭に、大谷隊へ突入していった。

だが、秀秋の内応をかねてから予期していた大谷吉継は慌てることなく、ただちに全軍の向きを変え、小早川秀秋に対抗した。麾下の戸田重政、平塚為広の両隊は前面の敵を捨て置いて小早川隊の側面へ回り込み、逆にこれを撃退さえしたのである。

このとき、吉継がまったく予期しなかったことが起きた。吉継の麾下にあった

西軍総崩れ　午後一時



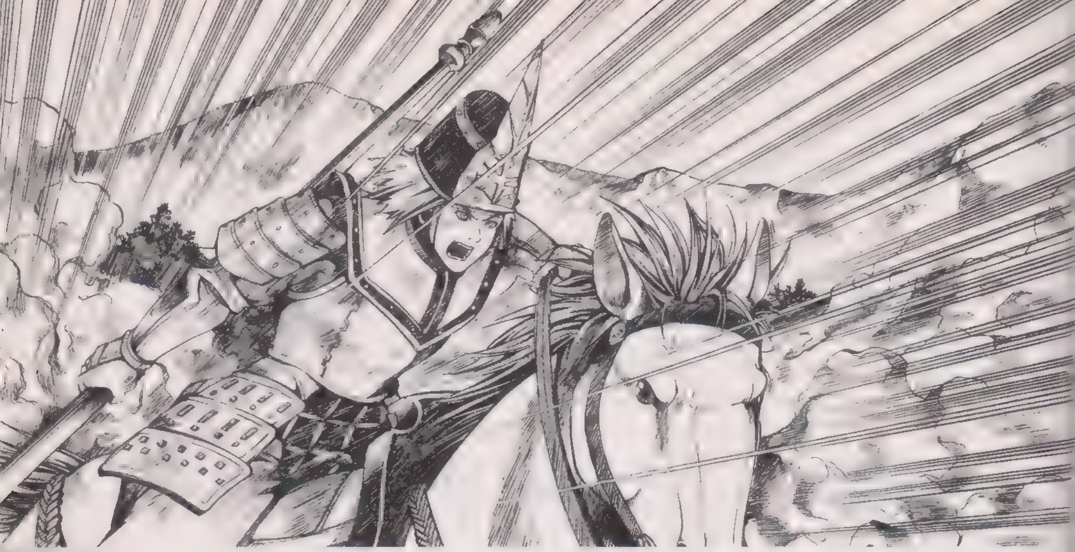
大谷隊の壊滅は、そのまま隣の宇喜多秀家隊と小西行長隊におよんだ。小西行長隊の兵は逃げだし総崩れとなる。宇喜多秀家は怒りの余り前面の敵を無視して小早川秀秋に突撃しようとした。しかし、家臣明石全登がいさめて、伊吹山中に落ち延びる。

脇坂安治、朽木元綱、小川祐忠、赤座直保の諸隊四二〇〇が小早川秀秋の寝返りに合わせ、一斉に大谷隊へ襲いかかったのである。実のところ、朽木元綱は機を見て反旗を翻すと家康に内応の約束をしていたのだが、他の将は戦機に乗じての寝返りであった。

これらの諸隊があれば小早川勢を支えきれるとふんでいた大谷吉継は、この連鎖的寝返りで逆に横槍を衝かれる格好となってしまった。小早川隊の攻撃を撃退していた戸田重政と平塚為広は三方から攻められて討死、吉継の軍勢はたちまち崩壊した。秀秋の寝返りで勝機を失った吉継は、乱戦の中で自刃したのである。

◆西軍崩壊へ

大谷吉継隊の壊滅により、西軍はなだれをうって崩壊していった。ここまで奮戦していた西軍の様子から考えると、それはまさにあっけないものであった。それだけ、小早川秀秋の寝返りは決定的だったのである。



まず、中央の小西行長隊が小早川秀秋の寝返りに士気を喪失して、たちまち壊滅した。キリシタンの小西行長は教義により自決を禁じられていたため、敗兵と共に逃走した。

小西隊の敗走により、宇喜多秀家の軍勢は両面から攻撃を受けて崩れ去った。秀家は敵中に斬り込み、秀秋と刺し違えようとしたが、明石全登に諌められ、戦場を脱出した。

石田三成麾下の将兵は最後まで笹尾山で奮戦していたが、東軍の総攻撃を受け、さらに西軍が総崩れになったのを見て動揺し、ついに敗走を始めた。午後一時頃のことである。もはやこれまでと見た石田三成は再起を期すべく、蒲生郷舎が東軍を引きつけて戦っている間に笹尾山の本陣を捨て、山伝いに伊吹山中へと脱出していった。郷舎は最後まで東軍を相手に奮闘し、討死した。

◆島津勢敵中突破

最後に戦場へ残されたのは、島津義弘の兵だけであった。島津隊は終始攻勢に出ることなく、攻撃してくる東軍をあしらっているだけであったが、それでも、すでに半数ほどの兵が失われていた。

ここで腹を切ろうとする義弘を島津豊久が押し止め、敵中突破をして戦場を離脱しようということに決まった。島津家伝統の「捨てがまり」である。

午後二時頃、島津隊は一丸となって前面の敵に突撃した。それまでまったく動かなかった島津隊が、突如として決死の勢いで突撃してきたため、東軍部隊はつい道を明けてしまった。島津隊は家康本陣の脇を抜け、伊勢街道をまっしぐらに突き進んだ。家康はただちに追撃を命じ、我に返った東軍部隊がこれを追った。

追撃する東軍に対し、島津隊は決死の殿軍を置き、退路を確保していった。この中で島津豊久は討死した。生き残った島津兵は八十余名で、義弘も生き延びて薩摩へ帰った。また、この追撃戦の中で井伊直政は手傷を負い、後にこの傷がもとで命を落とすことになった。

島津隊脱出

午後三時

小西・宇喜多の潰走後は、東軍は残された石田三成隊に襲いかかる。三成を落とすために家臣の蒲生郷舎は果敢に突撃をする。石田隊が戦場から消えると残ったのはそれまで鳴りをひそめていた島津義弘だった。島津隊は背後を見せずに100倍の東軍の中央を突破した。

◆西軍、総退却へ

南宮山に陣していた西軍諸隊は、主力である毛利勢が最後まで動かなかったため、合戦に参加することができなかった。徳川家康に内応した吉川広家は、見事にその役割を果たし、悠々と山を下りていったが、西軍の首謀者である安国寺恵瓊や長束正家、そして長宗我部盛親らは何もできないままに戦場を脱出しなければならなかったのである。彼らは伊勢や近江を目指して落ちていった。

すべての西軍が関ヶ原から敗走し、戦いが終わったのは、午後四時頃のことであった。

※　※

その後、三成の留守城の佐和山城は東軍の総攻撃を受けて、一八日に落城、その一族は自害する。家康は二七日に大坂城に無血入城をはたし、豊臣秀頼に謁見、三成ら"逆賊"討伐の報告をした。この日をもって事実上、政治の実権は豊臣から徳川へ移ったのである。

参考文献

『戦国人名事典』阿部猛・西村圭子編
『戦国大名家臣団事典　東国編・西国編』山本大・小和田哲男編
『紀州雑賀衆鈴木一族』鈴木真哉著
『真田幸村のすべて』小林計一郎編
『信長公記』太田牛一著　桑田忠親校注
『明智軍記』二木謙一校注
別冊歴史読本『織田信長その激越なる生涯』『徳川家康その重くて遠き道』
『疾風！織田信長軍団　一〇〇人の武将』『怒濤！豊臣秀吉軍団　一〇〇人の武将』
——以上、新人物往来社

歴史群像シリーズ『戦国合戦大全』『【戦国】セレクション・激闘　大坂の陣』
『【戦国】セレクション・決戦　関ヶ原』『忍者と忍術』
特別編集『決定版　図説・戦国地図帳』
——以上、学習研究社

『戦国合戦事典』小和田哲男著／PHP文庫
『常山紀談 上・中・下巻』湯浅常山著　森銑三・校訂／岩波文庫
『甲陽軍鑑』腰原哲朗訳／教育社新書
ビッグマンスペシャル『武田信玄　戦国最強武田軍団の全貌』／世界文化社
『朝日　日本歴史人物事典』／朝日新聞社
『織田信長家臣人名辞典』高木昭作監修　谷口克広著／吉川弘文館
『織田信長総合事典』岡田正人編著／雄山閣出版

以上の図書等を参考にいたしました

戦国無双2（せんごくむそう） キャラクターズ真書（しんしょ）

2006年3月31日　初版発行
2007年8月　3日　3版発行

編者
コーエー　出版部（しゅっぱんぶ）

本文デザイン・DTP
株式会社キングス

イラスト・コミック
美鈴秋

原稿執筆
岩上玲央、大山格、高安正明、福田誠、
水村洋、箕輪和仁、弾正ブラザーズ

発行者
襟川陽一

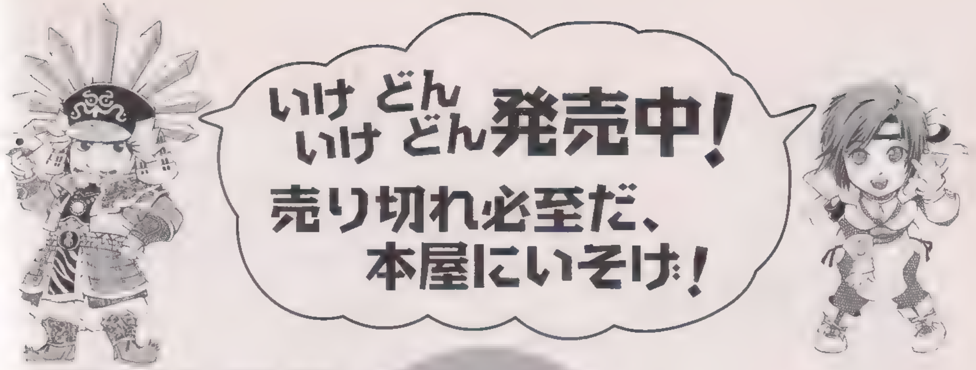
発行所
株式会社　光栄
〒223-8503　横浜市港北区箕輪町1-18-12
TEL045-561-8181

印刷・製本
株式会社サンエー印刷

- 定価はカバーに表示してあります。
- 本書記事の無断複写・複製・転載を禁じます。
- 掲載記事等はお手持ちの機種により多少の相違が生じることがございます。
- 乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
- 本書の内容についての電話によるお問い合わせはご遠慮ください。

©2006 KOEI Co.,Ltd.　Printed in Japan

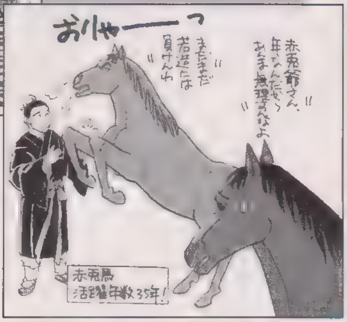
ISBN978-4-7758-0420-9



難問奇問の嵐にチェレンジ!

クイズ　三国志の王様

発売中　B6判　160頁
定価 1000円



あの英雄はピンチをどう切り抜けたのか?　気になるあの武将のその後か?
気になると夜も眠れない、三国志の数々のナゾをクイズ型式で解き明かす。
これさえ読めば、あなたも三国志通、全問正解を果たせば、あなたは三国志界のキングスオブキングスだ。

「真・三國無双」「戦国無双」シリーズの
キャラクターデザインをてがけた諏訪原寛幸の
オリジナル処女画集、ついに刊行へ

諏訪原寛幸作品集 Hiroyuki Suwahara Artworks
REBIRTH ～再誕～

A4判　並製　定価:2,940円

中世の武者、戦国の群雄、
幕末維新の英傑、
古代中国・三国時代の英雄、
仏教十二神、西洋の魔獣、
異形の群れ……。
魂の底を震わせる
イラストレーションにより、
ここに「再生」を果たす

PS2

戦国無双2 キャラクターズ真書

SENGOKU MUSOU 2
CHARACTERS PROFILE

koei

株式会社コーエー

戦国無双2
SENGOKU MUSOU

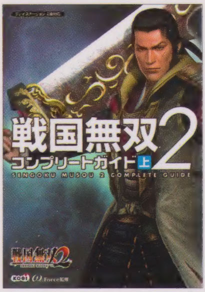
友のため、
ここで俺は負けられん！

「戦国無双2」書籍のお求めはお早めに!!

戦国無双2 コンプリートガイド 上

定価：1,470円

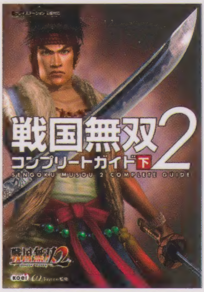
天下無双をめざす全プレイヤー必携！ さらなる進化を遂げたシステム＆登場武将を総力紹介!!



戦国無双2 コンプリートガイド 下

定価：1,890円

「無双演武」全ステージ攻略から隠し武器のすべてまでここだけでしか読めない攻略データを徹底解説!



戦国無双2 公式設定資料集

美麗なビジュアル＆バラエティに富んだムービー写真で『戦国無双2』の世界を徹底解説!!

定価：2,100円

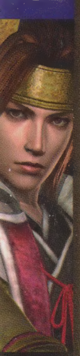
諏訪原寛幸作品集 REBIRTH ～再誕～

魂の根源を揺さぶるイラストレーションの数々！

武将絵師　諏訪原寛幸の処女作品集、ついにリリース！

定価：2,940円

PS2



戦国無双2 キャラクターズ真書

SENGOKU MUSOU 2 CHARACTERS PROFILE

koei

戦国無双2 SENGOKU MUSOU

SENGOKU MUSOU 2
CHARACTERS PROFILE

9784775804209

1920076012006

ISBN978-4-7758-0420-9
C0076 ¥1200E

定価：本体1,200円+税

株式会社コーエー®

1st mission

キャラクター勢ぞろい！

26人のプレイアブルキャラクターを、信長と濃姫、長政とお市のように二人ペアで紹介。キャラの素顔はもちろん、知りたかった結びつきがわかる。

2nd mission

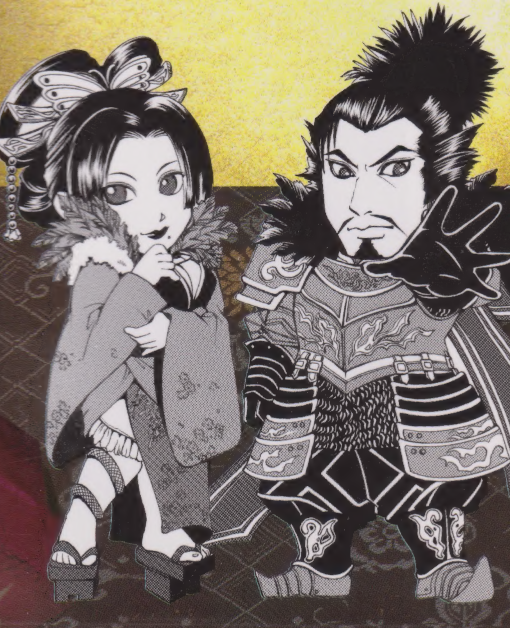
信長の時代

織田信長と上杉謙信や武田信玄などのライバルたちの時代を解説。主な合戦や大名ごとのキャラクターの関係ごとに、脇役たちの活躍もあわせて紹介。
特別コミック：「戦国グルメ」

3rd mission

秀吉と家康の時代

織田信長の後を継いだ豊臣秀吉や徳川家康の時代を解説。主な合戦や大名ごとのキャラクターの関係ごとに、脇役たちの活躍もあわせて紹介。
特別戦場紹介：関ヶ原の戦い



コミック、イラストで
戦国無双2の
キャラクターと
時代がわかる